

遙か彼方の永劫を超えて

とも2199

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

だからお願い。人類を救って――。

人類が緩慢な死を迎えようとしている未来。

アオは、月軌道の外側で、太陽を一周する程の超巨大建造物、ダイソンリングのメンテナンステナンス作業員だった。そのダイソンリングに、宇宙の大自然の驚異が襲いかかろうとしていた。リングに依存して生きる未来、それが失われると言うことは、人類の終焉を意味していた。そして、物語は舞台を変え、様々な時空を漂って行く。

江戸の町で起こった用心棒と盗賊の戦い。

内気な女子高生の恋の行方。

月面都市で暮らすある男女の想像を絶する体験。

様々な時代、そこで生きる人々の人生、それらが長い時を経て繋がっていく。これは、人類を救う、長い旅の物語。

目次

遙か彼方の永劫を超えて1	終焉の序曲	1
遙か彼方の永劫を超えて2	火付盗賊	22
遙か彼方の永劫を超えて3	少女の内なる絶望	36
遙か彼方の永劫を超えて4	月面の遺物	48
遙か彼方の永劫を超えて5	江戸の大火	63
遙か彼方の永劫を超えて6	少女の旅立ち	83
遙か彼方の永劫を超えて7	彼方への旅立ち	122
遙か彼方の永劫を超えて8	途中下車Part 1	135
遙か彼方の永劫を超えて9	途中下車Part 2	143
遙か彼方の永劫を超えて10	途中下車Part 3	151
遙か彼方の永劫を超えて11	辿り着いた場所	158
遙か彼方の永劫を超えて12	終焉の終曲	164
遙か彼方の永劫を超えて13	旅は続く	187
遙か彼方の永劫を超えて14	エピローグ(最終回)	193

遙か彼方の永劫を超えて1 終焉の序曲

時に、三十五世紀――。

地球と火星軌道の間には、巨大な人工物があつた。

それは、ダイソンリングと呼ばれる物体で、恒星系のエネルギー放射を無駄なくキャッチし、地球などの生命が住む惑星に無限とも言えるエネルギーを供給することを目的としていた。

しかし、ダイソンリングの開発が始まってから、既に千年近く経過しており、未だ完全な完成には至っていない。そして、経年劣化により、リングの老朽化も深刻な問題で、新たに開発する部分と、老朽化でメンテナンスする部分とが混在し、気が遠くなるような手間をかけて維持されていた。

そんな時代にあつて、既に旧来型の人間は重要な存在では無くなっていた。高度に発達したAIや、優勢人種を生み出す事を目的として高度な遺伝子操作技術が組み込まれた人工子宮で誕生した新しい人間が、人類の営みを支えていた。

それでも、古い旧来型の人間は、まだ大勢生き残っていた。彼らも同様に人工子宮で、優秀な男女の冷凍精子と卵子を掛け合わせて誕生していた。例えば彼らは、ダイソンリングのメンテナンス要員として、日々、地道な活動を続けている。

宇宙に果てしなく続くリングを眺めながら、アオは一休みしていた。宇宙服に身を包んでいるため、汗を拭くことも、お茶を飲む訳でもない。ただただ、そこにふわふわと漂っていた。リングと言つても、余りにも巨大な構造物で、宇宙の彼方へと真っ直ぐに伸びているように見える。

彼の宇宙服の片足は、ひらひらと漂っていた。三ヶ月程前の作業で事故があり、足を潰されて切断したのだ。

休んでいるアオの元に、人影が近付いて来た。器用に背中に背負ったバックパックのストラップを小刻みに噴射して、急速に近付いて来たかと思えば、アオの目の前で急停止した。

宇宙服の宇宙帽だけをつけており、体は完全に露出している。

「アオ。復帰したのね」

宇宙帽の中の彼女の顔は、優しい笑顔を見せていた。

「ユリ17」

アオは、ほっと安堵していた。この作業に出て間もない若い彼は、彼女の指導で仕事を覚えた。彼女がいると、ほんの少し不安が和らいだ。

ユリ17は、首を傾げて彼の片足を見た。

「足、新しいのをつけなかったの？」

宇宙帽の中のアオの顔は、苦笑いを浮かべていた。

「足は部屋にあります。でも、今日はわざとつけて来なかったんです」「どうして？」

彼は、困ったような表情をしていた。

「わかりません。何となく、無いとどうなるんだろうって思っ」

彼女は、腕を組んで諭すように言った。

「感心しないかな。足で蹴って移動したりすることもある。無ければ上手く出来ないじゃない？ また、この間みたいな事故があったら逃げ遅れる可能性が高いと思う。戻ってつけてきたら」

「わかりました。でも、今日はこのままがいいんです」

アオは、ユリ17の身体を眺めた。

彼女は、既に頭を除いて全身がサイボーグ化していた。見た目こそ普通の体と見分けがつかなかったが、宇宙服を着る必要が無いのだ。このような人は大勢いたので、特に違和感がある訳でもない。むしろ、全身を宇宙服に身を包んでいるアオの方が、目立つ存在だった。

「ま、いいけど。先輩の言うことは、聞くものよ」

そう言っ、彼女は、彼から離れて行った。

彼女が通り過ぎた後に、彼女から伸びるロープにぶら下がった資材が通り過ぎていった。近くにメンテナンス資材を運んでいるのだろう。

アオは、仕方なく作業に戻ることにした。今日の現場は、太陽光パネルの老朽化に伴う、大規模な交換作業が待っている。

現場監督に与えられた持ち場に、アオはゆっくりと移動していた。

辺り一帯には、大勢の人が、ブロック化されたリングに取り付き、新しい資材と交換作業を行っている。

リングは、ブロックパーツと呼ばれる十メートル四方の小さなパーツから出来ており、これを数十個接続した物をリングブロックと呼んでいる。このリングブロック単位で、リングブロックリーダーと、その部下となる数十名の作業員チームでメンテナンスを行っている。大規模なメンテナンスの場合は、各ブロックのチームが共同で作業を行うこともある。

ア才は、自分の持ち場に、取り付くと、交換する対象を眺めた。「五百年前に設置された太陽光パネルか。こんなもの、何ですつと動くと考えたんだろう」

ア才は、遠い昔にこのダイソンリングの建設を企んだ祖先たちに、大いなる疑問を抱いていた。

確かに、技術の革新によって、新しい資材の耐久性は大幅に伸びてはいたが、太陽の周囲を、火星と地球の間の軌道でぐるっと取り巻くこの建造物は、余りにも巨大だった。

ロボットによるメンテナンスの自動化も、当然行われてはいたが、数が少なかった。何故なら、そのロボット自体もメンテナンスが必要で、結局のところ、人間が担当する方が効率がよい、という結論になったらしい。ナノロボットによるメンテナンス技術もあるにはあったが、それで修復出来るような素材を使うのは、規模が大きすぎて、交換する方がコストが安いという結論になっていたようだ。

ア才は、諦めて黙々と作業を進めた。休憩で食堂に集まった作業員たちが、各々の体に合った食事をとっていた。殆どの人が、サイボーグ化した体用のエネルギー摂取のドリンクを飲みながらわいわいと話をしていた。

新しい体のパーツの何が良いだの、メンテナンス資材のあれがイマイチだのとそんな話題が中心だった。

ア才は、普通の食品がのったトレイを持って、人がいない場所を選んで長テーブルの隅に座った。

ア才が一人で食事を摂っていると、そこにユリー7がやって来た。

「美味しそうね」

向かいの席に座った彼女もまた、エネルギー飲料の入った缶に、ストローを挿したものを飲んでいた。

「私は、これでおしまい。この身体になってから、いろいろと便利だけど、食事だけは残念かな」

彼女は、缶を振って、中身が空になったかを確認していた。

ふと、彼女はアオの足下を見た。

「あら、ちゃんとしたのね」

アオは、彼女に言われたことを良く考えた結果、休憩時間に入ってすぐに居住区の個室に戻って新しい足を装着していた。

「言うとおりにした方がいいかな、と思ひまして」

「賢明な判断ね」

彼女はにっこりとアオに笑顔を見せた。

ユリ17は、とても魅力的な女性だった。彼は、密かに彼女に想いを寄せていたが、あまり意味が無いことだとも知っている。サイボーグ化すると、異性とかの性別の区別の感覚が薄くなり、彼女は旧来の意味での女性とは程遠い存在なのだ。

自分も、いつか身体を失って、彼女に想いを寄せていた感覚を忘れる時が来るに違いない。普通の人で居続けることは、時に人生の虚しさを加速させる。心が疲弊した者は、事故などが原因では無く、自らの意思で身体を交換するのだ。

ユリ17は、まだ若いのに全身をサイボーグ化しているのは、そういう理由からかも知れなかった。一般的に、全身を機械化した理由を尋ねるのはタブーとされていた。だから、アオも、気になってはいたが彼女に理由を尋ねることは出来なかった。

彼女の名前に番号が振られているのには理由があった。人工子宮による冷凍精子と卵子の掛け合わせの結果、優秀な人間が生まれた場合、同じ組み合わせのタイプを定義して、続けて生み出す。彼女はユリタイプの17番目の人間だった。つまり、同じタイプのユリは、他に何人も存在していることになる。アオは、新型のタイプを生み出す過程で誕生したプロトタイプだった為、まだ番号が無い。今後の人生

で、アオが優秀だと証明されれば、アオタイプが定義されることになるだろう。

「最近、疲れが取れないんです」

「どうかしたの？」

「僕たちって、何の為に生まれて来たんですかね？」

ユリ17は、少しだけ驚いたような素振りを見せたが、口を閉じて黙っていた。その瞳は、憂いを伴っていた。

その間に、少しだけアオは苛立った。

「何で、何も言ってくれないんですか？」

ユリ17は、天井の方を見上げて、何か考えているようだった。

「私もあなたと同じ。皆同じ思いを抱えている。あなただけが悩んでいる訳じゃないわ。でもね、自分で結論を出すことだから」

ユリ17は、立ち上がって彼の頭をぽんと叩くと、そのまま去って行った。

彼女の後ろ姿を、アオはただぼんやりと見つめていた。

その夜、アオは夢を見た。

何度目かのまた同じ夢だ、と彼は気が付いた。

ある女に腹を立てていた。その女をよく知っていたが、名前も顔も思い出せなかった。だが、アオがユリ17に向ける感情と似た感情を、その女に抱いていた。

慌てて急いで彼女の元に駆け付けるが、どうしても見つけれない。その焦燥の中で、彼は目覚めた。

体は、酷く冷たい汗をかいていた。

自らの身体を抱きながら、アオは窓の外の宇宙を眺めた。どんな夢だったかなど、すぐに忘れてしまった。思い出そうとするが、どうしても思い出せない。

どうして、夢っていつもこうなんだろうか、とアオは不思議に思っていた。

今日の作業現場はどこだったか、とアオは頭を切り替えた。

二十一世紀後半に、人類の科学技術は、頂点を迎えようとしていた。人工知能の進化がシンギュラリティへと到達していた。つまり、A

Iが、遂に人類の能力を超えるに至ったのだ。

知的活動は、AIが取り持つ分野が徐々に拡大を始めていた。AIを採用した国家や企業が、人間を超える成果を上げていったのである。

これを受けて、政治、経済の活動は、AIの支援無しでは成り立たないとの認識が世界中で広がり、かつての国家の運営や、経済活動は、急速に過去のものになっていき始めていた。

人類は二極化するだろうというのが、識者が出した予測だった。

一つは、高度な知識や技術を持った専門家である。このような人々は、今後もAIの支援に必要であるだろう。そしてもう一つは、AIが決定したことを実行に移す肉体労働者である。肉体労働がロボットなどに全て置き換わるには、まだまだ長い年月がかかるだろう。

シンギュラリティ到達が近いと喧伝され始めた頃からこうした議論は本格化しており、未来に絶望する者も出始めていた。

そして、先進国では徐々に少子化が進行して行った。子を残しても、未来が絶望的だと考える者が徐々に増えていったのだ。

実際、そのような変化は、人々をじわじわと侵食していった。人類は、AIの奴隷なのか？ といった議論が日々交されるようになっていた。それでも、もはやAI無しでは満足な活動が出来ない状況であることも明白だった。

こうした事態を見越してか、AIが一つの提案をおこなった。人工子宮の開発と、健康な男女の卵子と精子の冷凍保存だった。

識者の間では、将来の奴隷を生産する為か、とも揶揄されていたが、実際少子化問題は深刻な水域に達していたのだ。

人類は、この現実を受け入れるしかなかった。

これは、新たな人類の進化なのでは無いか？ とある人は言う。この進化に取り残された古い人類は、淘汰される運命なのかも知れない。

ある日、地球からニュースが舞い込んでいた。

隕石群の衝突で、ダイソンリングの一部が破損したらしい。

アオが居住している部分からは遠く離れた場所だったが、最近、そ

ういったニュースが増えて来たような気がする。

ダイソンリングが作られてから長い年月が経過していたが、決して珍しいニュースではなかった。これまでも同様な事は幾度と無く発生しており、それを修復しながら運用を続けていたのだから。それでも、隕石等が当たるとる確率は非常に低いはずで、近年の被害の頻度は、明らかに異常に高いと言える。

地球中央政府のAIや人間の高官は、特に気にするようなニュースでは無いと発表して、事態の收拾を図ろうとしているようだ。

食堂で朝食をとっていたリングの作業員たちは、報道の内容を見て、ひそひそと会話をしていた。

「地球に住む奴らが大丈夫と言ってるんだから平気だろう」

「AI様と遺伝子操作された新人人類様が考えることだからな」

「本当にそうか？奴らは、本当に頭がいい。今回の一連の事態に、何も対応しないってのが、どうも臭うぜ」

「やめろ、やめろ。俺たち旧人類のオツムじゃ、わかりっこねえって。今日も頑張つて働こうぜ」

アオも、朝食を取りながら、周囲の話を聞いていた。

確かに、少々変な気がするのだ。

そこへ、別の席に居たユリー7が通りかかったので、アオは挨拶の言葉をかけた。

「おはようございます」

「あら、おはよう」

先日の会話から、何となく疎遠になっていたのだが、彼女の様子は、いつもと変わらなかった。

その日は、破損したリングの修復作業に借り出され、居住区から遠く離れた宙域に輸送船で向かった。

破損したリングの周辺には、大量のデブリが散乱し、とても修復作業どころの状態ではなかった。

複数のデブリ回収船が到着し、急ピッチで回収作業が行われた。デブリ回収船の船首は、巨大なジンベイザメのような形状をしており、ゆっくりとした動きで、通過する宙域に浮かぶデブリをどんどん回収

して行く。

アオや、同じ居住区から駆けつけた同僚たちは、その光景を少し離れた所で、宇宙に浮かんで眺めていた。

デブリ回収船の作業が終わったら、手分けして細かなデブリを人力で回収するのだ。

待っている間、アオはいろいろな事に頭を巡らせていた。

隕石群が頻繁にやって来るのに対策しない政府。

時々見る不思議な夢。

そして――。

生きる意味について、先日ユリ17と交わした言葉。

何だか、とても寂しいと感じた。

たった一人で、宇宙を漂い、誰も気にかけてくれない。

こんな人生を、毎日変わりなく静かに歩んで、いつしか年老いて死んでいく。

一生をリングのメンテナンスだけに費やして。

何の為に生きているのかも最期までわからず、朽ち果てていくのだ。

それも、自分だけで無く、ここにいる古い世代の人間全員がだ。

アオは、無性にユリ17が恋しくなった。

彼女に抱きしめてもらえたら、生きていて良かったと、心の底から感じられるに違い無い。

彼女に自分の気持ちを告白したら、彼女はどんな反応をするだろう？

きっと、可哀想な人を見るような目で、優しく諭してくるに違い無い。

彼は、凍えるような寒さを感じて、ただ独り震えていた。

それから、数週間が過ぎた。

アオたちが所属するリングのブロックに、地球中央政府から派遣されたという一人の人間がやって来た。

遺伝子操作された新人類と呼ばれる人間であっても、見た目は特に皆と変わらない。違うのはAIに匹敵する頭脳なのだ。

彼は、食堂のスペースに作業員全員を集めて、説明会を行った。

ここで彼が語ったことは、近傍のリングブロックにも通信で映像が流され、多くの作業員が彼の言葉を知ることになる。

「皆さん。最近、多数の隕石群が太陽系内で観測されている。そして、それだけでは無く、複数の彗星群も観測されている。隕石増加の原因は、この彗星群が増えたことによるものだろう。政府は、混乱を避けるため、これらの情報をあまり公にしていけないが、AIの予測では、これから数十年か数百年の間、この状況は長く続くと考えている」

その話に、食堂に集まった作業員たちがざわめいた。

その政府の男は、この反応が予想通りと考えているのか、眉一つ動かさなかった。

「知つての通り、現代の地球文明を維持するのに、このダイソンリングは必要不可欠だ。このリングから得られる莫大なエネルギーによって、人々の暮らしが維持されている。この膨大なエネルギーが供給されなくなれば、AIの能力は、千年以上前の原始時代のような時代に逆戻りしてしまうだろう。あらゆる装置、設備が停止し、人類文明は、急速に衰退し、やがて滅びるだろう」

アオも、他の皆と同じ様に、男の話に唾然としていた。アオは、ユリ17の姿を探すと、すぐ近くに彼女はいた。彼女は、とても悲しそうな表情で、男の話聞いていた。

「そこで、私は、皆さんに協力をお願いにやって来た」

男は、どよめきで騒がしくなった周囲を見回すと、更に話を続けた。「これから、隕石や彗星接近の注意警報を、政府からダイソンリングにいる皆さんへと伝達する。それに応じて、予想接近座標に位置するリングブロックを、ブロックごと切り離して移動し、隕石通過後に再び元に戻してもらいたい。これを繰り返し、これからの数十年か数百年間、リングを守ってもらいたい」

数十年か数百年の間。

その時間は、作業員たちの心に、絶望的な感情を抱かせていた。

「皆さん自身も、ダイソンリングのエネルギーによってここでの暮らしを維持しているのを忘れなく」

男は、それだけ言い放つと、食堂から出ていった。

食堂にいた作業員たちは、男が立ち去った後でも、各々気心が知れた仲間同士で話し合っていた。

「これから数十年か数百年だってよ」

「そんなに長い間、今の仕事に加えて、それもやれってことか」

「俺たちは、このリングのメンテナンス機材ぐらいにしか思われてねえんだから、当然だろ」

「地球で温々と引きこもってる奴らの為に、何で俺たちが犠牲にならなきゃなんねえんだ」

アオは、ユリ17の姿を探していた。彼女が、今回の話をどう思っているのか知りたかったのだ。

アオは、食堂から出ていく彼女の後ろ姿を見つけて、後を追った。

ユリ17は、食堂の喧騒から逃れて、一人展望室で宇宙を眺めていた。

彼女は、心の奥から、乾いた笑いがこみ上げてくるのを感じていた。背後で物音がしたので、少し振り返ると、アオが展望室の中に入ってきて来たところだった。

彼女は、いつも彼に接する時のように、大人の女性らしく振る舞おうとしていた。だが、今はそれが出来るかあまり自信が無かった。

「ユリ17。こんな所で何を？」

ユリ17は、彼の方を見ない様にして、宇宙を眺める姿勢のままに言った。

「私だって、独りになりたい時もあるわ」

アオは、迷惑に思われているかも知れないと思って、若干萎縮したが、どうしても彼女と話がしたかった。

「さっきの話、どう思いました？」

ユリ17は、少し棘のある口調になってしまっていた。

「あなたは、どう思ったの？」

アオは、彼女の質問に少し言葉が出なくなった。

「……酷いと思いました。地球にいる人たちにとって、僕らは一体何なんだろうって」

ユリ17は、明確に苛立って、急につかつかとアオの目の前に近寄った。そして、大きな声で叫ぶ様に言った。

「私たちは、このリングの部品なのよ。ここで、メンテナンスパーツとして生産されて、一生をそれに捧げる。ロボットよりはメンテナンス性が良くて賢いから、ここにいるのを許されている。それだけよ。部品が意見するなんて、あの人たちは思いもしないでしょう。それが現実なのよ!」

アオは、目を大きく見開いて、ユリ17の突然の豹変に驚いていた。ユリ17は、彼に言い放ったことをすぐに後悔した。

「……ごめんなさい!」

そう言うと、彼の脇を通り抜けて、走るように展望室から出て行った。

後に残されたアオは、しばらくの間、呆然と立ち尽くしていた。それから、地球中央政府の指示に従って、ダイソンリングを守る戦いが始まった。

異常に増えた隕石群を避ける為、リングを移動してはまた戻してしまう、気の遠くなるような作業である。

そして、隕石群の接近がわかった時には、数日以内に作業を始めなければならぬ。そうしなければ、回避が間に合わないからである。接近が報じられると、リングブロック毎の分離、移動作業を始め、メンテナンス作業員たちは、シフト体制でこれに対抗していた。

しかし、次第に彼らにも徒勞の色が目立ち始めていた。ある場所では、リングの移動に失敗し、大きな損傷を受けた上に、大勢の人々が死傷していた。

この戦いは、気を許せば即座に敗北が待っている。

だが、これらの涙ぐましい努力も虚しく、さらなる危機が迫っていた。

「これを見ろ」

アオの所属するリングブロックリーダーによって、緊急ミーティングが開催されていた。食堂に集められた作業員たちは、中央の立体スクリーンの星図を見ていた。

その会議に参加していたアオも、重々しい雰囲気の中、落ち着かない様子でスクリーンを見つめていた。

今度は、多数の彗星群が発見されていた。

その軌道は、これまでの努力をあざ笑うかのように、リングに沿って移動するコースをとっていた。

「この彗星の群れが発見されたのは三日前。コースを見れば分かる通り、リングをブロック単位で少々移動する程度では、これを回避するのは不可能だ」

中央の星図が切り替わり、リングの構造図が表示された。

「そこで、リング自体の軌道を変更する案が、地球側から提示された。リングブロックを構成する各パーツには、もともとドッキング用の大小のスラスタが設けられている。これを再び使用可能にして、一斉に噴射してリング全体の軌道をずらすのだ」

それを一緒に聞いていたアオは、そんなことが、本当に可能なのか疑問を感じていた。

現在の座標にリングを安定させるため、地球近傍のラグランジュポイントを起点として、そこから太陽の周囲を取り巻く巨大な構造である。地球の公転周期に同期して、太陽の周りを回転しているのだ。この軌道を変更するということは、バランスが崩れ、下手をすれば全体が崩壊するリスクがある。

何より、そのようなリスクがあることは、AIが認識していないはずがない。

これは、無謀な賭けだ。あまりにも、AIが考えた策にしては、お粗末過ぎる。

「三日後には、最初の彗星が衝突コースに入る。その後、第二、第三の彗星が続けて飛来する。これら全てを避けるには、少なくとも、現在の公転軌道から、五百キロ程度は移動させておきたい」

それを聞いた作業員たちは、かなり騒がしくなった。

「そんな途方もないことが出来るものか。だいたい、リングを構成するブロックパーツは、千年前のものから、最近のものまでばらばらだ。大昔のブロックパーツのスラスタが起動するとは、到底思えない。

それでもやるといふのか？」

「そうだ。それが、地球中央政府の指示だ。これはつまり、中央政府のAIの判断ということだ。この指示は、絶対的なものだ」

アオは、そのやり取りを聞いて、思わず挙手していた。

「質問が。どうにも、おかしい話です。AIが、誤った判断をしている可能性は？」

「未だかつて、そのようなことは聞いた事も無い。そこに疑問を挟む余地は無い」

別の男が言った。

「いや、あり得るぞ。こんなの初めての事じゃないのか。AIは、経験から学習するように作られている」

「いつの時代の話をしている。政府のAIは、このダイソンリングの膨大なエネルギーで稼働する巨大な電子頭脳だ。あらゆることを想定して出したのが、この答えだろう。それとも、君に地球中央政府のAIよりも良い案が提示出来るとでも？」

ざわざわとしていた食堂は、次第に静かになっていった。

「では、具体的な指示を出す。チームを二人一組で編成し、各自がリングブロックのブロックパーツのスラスタアの電源が入るようにしてくれ。時代毎のブロックパーツの仕様については、各自の端末に転送しておいた。型番を確認して、スラスタアと電源の位置を確認して作業して欲しい。他のメンテナンスブロックでも、同じ作業を本日から開始する。準備が整い次第、タイミングを合わせて、一斉にスラスタアに点火して、移動を開始する」

アオは、一人でぼつんと立っていたユリ17に、作業を一緒にやらないかと声をかけた。

ユリ17が頷いたので、二人は与えられた持ち場に向かった。

ダイソンリングは、各ブロックを構成するブロックパーツを輸送船で運び、ドッキングすることで巨大な構造を成していた。

ドッキングする際の移動用に、大小のスラスタアが設けられていることを利用し、ドッキングしたまま、一斉に移動させて、軌道を修正しようというのが、今回のミッションだった。

アオとユリ17が受け持った区画は、今から二百年程前に設置されたブロックパーツで主に構成されていた。十個程のブロックパーツが、彼らの担当区画である。

「ユリ17。これを見て下さい。電源を中心に完全に部品が腐食しています。これは全交換する必要がありますね」

ユリ17は、アオが指差す場所を覗いてため息をついた。
「わかったわ」

彼女は、交換用の部品を、予め配布されたボックスを開けて探した。彼女は、やつとの思いで互換性のある部品を見つけた。そして、それをアオに手渡した。

アオは、受け取った部品を脇に置き、元の腐食した部品を取り外そうと悪戦苦闘していた。

しばらくして、無事に交換を終えたアオは、一休みしながら、ユリ17に話しかけた。

「先日、あなたが言っていたことを、考えてみたんです
ユリ17は、この間と言われて、少し恥ずかしくなった。

「あの時はごめんなさい。つい、いらいらしてしまっただけ
彼女が、申し訳無さそうに言うので、アオは少しほっとしていた。

「いいえ。逆に、本当の気持ちを知れて嬉しかったです」
ユリ17は、そんな彼を黙って見つめていた。

「僕は、いつの日か地球に行ってみようと思うんです」
「それは無理よ。地球は、私たち旧人類の侵入禁止区域になっているから」

アオは、笑顔を浮かべていた。

「こっさり行けば、何とかなるんじゃないですかね」
楽観的なアオの様子に、ユリ17も少しだけ笑った。

「もしかしたら、もう誰も住んでいないのかも。AIの電子頭脳しか存在していなかったりして。今は、精巧なアンドロイドだって作れるもの。遺伝子操作された新人類なんて、元からないのかも知れない」

「だからこそです。真実を確かめたいんですよ。僕たちが、何の為に

ここに生まれてくるのか、彼らなら知っていると思っています」

ユリ17は、彼の好奇心が眩しかった。

「いつか、その夢が叶うといいわね」

「何を言ってるんですか。その時は一緒に行って下さいね」

アオの屈託の無い心が、彼女の氷のような心を、少しだけ溶かしていた。

「考えておくわ」

そうして、作業は着々と進められていた。

他のブロックパーツを担当していた作業員たちも、順調に作業を進めているようだった。

こうして、彗星が到着する予定の三日後が近づいてきた。

「どうにか、間に合いそうですね」

アオは、最後のブロックパーツの点検を行っていた。

「本当に大丈夫だと思う？」

「ユリ17も、信じてないんですね」

「まあ、ね」

その時、リング内の天井に設置されたスピーカーから、甲高い音が断続的に鳴った。

「これは？」

ユリ17が、急に緊張した様子を見せた。

「リングのAIの緊急警報よ。何か、大きな問題があった時に鳴る」

ひとしきり警報が響いたあと、AIのメッセージが流れた。

「警告。各作業員に緊急通報。彗星に先行して極小氷塊群が接近中。対象が観測装置に捉えられたのは三分前。一時間後にリングに到達し、彗星本体が到達するまで断続的に飛来すると予想されます。極小といえども、高速に接近中で、相当な被害の発生を予想しています。その為、三十分以内に、リングの移動開始を求めます。各リングブロックリーダーは、直ちに実行に移して下さい」

このメッセージを聞いたアオは、青ざめた。

「そんな……！ まだ準備が終わっていないブロックだってあるというのに」

ユリ17は、黙って窓の外をぼんやりと眺めている。

「ユリ17、とにかくやれることをやりましょう」

アオの言葉に、彼女は反応しなかった。

アオは、困惑して彼女に近寄って、背にそっと触れた。

「ユリ？」

ユリ17は、ようやく振り向くと、アオに返事をした。

「わかっているわ。準備を急ぎましょう」

アオは、ほっとして頷いた。

「これから急いで、このブロックの電源をオンラインにする為、電源を入れて稼働確認します。そうしたら、僕たちも避難しましょう」

「避難と言っても、どこが安全なのかしらね。リングの軌道に沿って危険がやってくるのなら、リングを離れるしかないと思うけど」

「我々全員が乗船可能な輸送船が不足している以上、仕方がありません。最悪は、付近に一つだけ脱出ポッドがあるので、それを使いましょう」

「何だか、いつの間にか頼もしくなったわね」

アオは、そう言われて少し照れ臭くなった。

「そ、そうですかね？ とにかく、急ぎましょう」

アオとユリ17は、受け持ちのブロックパーツ十個の全ての電源をオンラインにする作業に向かって、リングの通路を走り出した。

太陽を周回するダイソンリングの各リングブロックでは、各所のリーダーによって、ブロックパーツのスラスタ起動準備が急ピッチで進められていた。

しかし、設備が古すぎるブロックパーツは、スラスタ自体が腐食しており、起動不能な箇所が幾つもあった。起動可能な箇所でも、電源を入れて稼働確認しただけで火災が発生した箇所もある。

リングブロックを統括するリーダーたちは、リング全体を管理するリングのAIに状況を報告していたが、AIの判断は作業続行の指示であった。

そして、起動五分前になってわかったことは、結局リング全体の五分の一度のスラスタしか稼働しないという残念な結果だった。

そうして、人々が苦勞して準備したスラスターの起動時間になった。

起動自体は、リングのAIが実行に移す為、リングにいる作業員たちは、固唾を飲んでそれを見守った。

再び、リング内全体に、警告音が鳴り響き、遂にスラスターの起動が始まった。

「スラスター起動開始十秒前。一分間の噴射の後、逆噴射十秒間を実行。各員、各ブロックの稼働不良に備えて待機。起動五秒前、四、三、二、一、起動開始」

リングの下部にあったスラスターが、一齐に起動した。スラスターは、リング内部の飲料水を利用し、これを熱して気化したガスを噴射する。これによって、軌道を修正するのだ。

こうして、リング全体がゆっくりと移動を始めた。

リングの内部にいたアオとユリ17も、スラスターが起動した時の軽い衝撃を感じていた。リング内部は、人工重力が働いていたが、感じたのは最初の衝撃だけで、リングが移動しているかどうかは、全くわからなかった。

「上手く行ったんでしょっか?」

アオは、窓の外の宇宙を眺めたが、対比物が無い為、状況が判断出来ない。

「見て」

ユリ17が、近くにあった端末の表示を指差した。

端末のモニターには、リングの座標が変化している様子を数値で表していた。その数値は、もともと予定していた方向にゆっくりと移動していることを表している。

アオは、少しほっとして言った。

「後は、祈るだけですわね」

ユリ17は、数値を無表情に見つめたまま言った。

「祈る……か。あなたは、誰に? 何に祈るの?」

アオは、そう言われて、確かに何に祈ればよいのか、よくわからずに口にしていたことに気付かされた。

彼は、その時ふと思った事を、そのまま言った。

「……この宇宙を創造した神、でしょうか」

ユリ17は、悲しげな表情でアオを見た。

「その神様は、誰の為のものかしらね……」

ダイソンリングは、順調に軌道を移動しているかに見えた。しかし、スラスターが起動しなかった箇所が少しづつバランスを崩し始めていた。隣接したスラスターを噴射するブロックパーツと、噴射しないブロックパーツの間で、徐々に歪みが起きて、接合部に負荷がかつていた。そして遂には、接合部が分離する箇所が出始めた。接合部が外れた箇所では、内部の空気が急速に漏れ、完全にバランスを崩して捻じれた。

リング内では、再び警告音が鳴り響いた。アオとユリ17が居たブロックでも、隣接するブロックの接合部が外れてしまったのだ。二人がいたブロックは、弾みで大きく縦に回転を始めた。

「まずい！ 回転を止めましょう」

アオは、端末を操作して、スラスターの噴射を止めようとした。しかし、制御はAIが握っており、アクセス権が無いと、エラーが表示された。

「駄目です！ 止まらない！」

ユリ17は、窓の外に、隣接するブロックが真上にゆっくりと近づいて来ているのを目撃した。ブロックの接合部が外れて回転したことで、別のブロックとぶつかろうとしているのだ。

「ユリ17、このブロックは捨てるしかありません。脱出ポッドで逃げましょう！」

「わかったわ」

二人は、このブロックの端にあつた脱出ポッドを目指して走り出した。

ダイソンリングは、あちこちで接合部が外れた上に、スラスターの噴射が停止せず、ばらばらに崩壊を始めていた。

もはや、隕石や彗星などの手にかからずとも、リングは風前の灯火だった。

リングのAIも、接合部が外れたことで、ネットワークが切断され、既に命令を伝達することが出来なくなっていた。更に、リングが分解したことによるエネルギー供給が途絶え、じわじわと機能が失われつつあった。

これは、同時に地球への太陽エネルギーの供給が途絶え始めたことを意味する。それは、人類の文明の終焉も意味するのだ。

アオとユリ17は、脱出ポッドに辿り着いていた。

しかし、脱出ポッドは二人で乗るようには出来ていなかった。

悩んだ末に、アオはユリ17に向かって言った。

「ユリ17、あなたが乗って下さい」

ユリ17は、冷静にそれを否定した。

「いいえ。あなたが乗るべきよ」

「しかし」

「私は、頭以外は全身サイボーグよ。少量の酸素で長時間活動出来る。あなたは、生身なんだから、あなたが乗って。私は、ポッドの外側にしがみつくから」

アオは、一瞬躊躇したが、悩んでいる時間は、もう殆ど無かった。

「わかりました」

船外活動の準備を終えたユリ17は、アオの脱出ポッドに近寄って何かを手渡した。

「これは？」

それは、円筒形の水筒のような容器だった。

「大切な物なの。ポッドの中に、一緒に持って行って」

アオは、不思議そうにその容器を眺めた。

「もう行きましょう」

ユリ17は、外から脱出ポッドのハッチを閉じようとした。

その時、アオは、ユリ17が泣いているように見えた。

「ユリ？」

ユリ17がハッチを完全に閉じたので、彼女の表情は、それ以上確認出来なかった。

アオは、気を取り直して、脱出ポッドの装置を起動して、射出準備

を始めた。ポッドの窓の外では、別のリングブロックがどんどん近づいていた。もう、残り時間が殆ど無い。

「ユリー早く来て下さいー!」

すると、窓の外に、ユリー7の姿が見えた。その宇宙帽には暗い宇宙が映っているだけで、彼女の表情を窺い知ることは出来なかった。

その時、通信機から、ユリー7の声が響いた。

「準備できたわ。今すぐ射出してー!」

それを聞いたアオは、一瞬嫌な予感がよぎった。指が射出ボタンにかかったまま、押しているのか迷いを感じていた。

「アオー!」

ユリー7の叫び声を聞き、アオはやつとのことと、ボタンを押した。激しい衝撃と共に、脱出ポッドはリングを急速に離れて行った。

ポッドはくるくると回転しながら宇宙を飛んだ。

ふと、窓の外に、ユリー7の姿が見えた。遠く離れたリングの傍で手を大きく振っている。彼女は、脱出ポッドに掴まっていなかったのだ。

「ユリー!」

脱出ポッドは、どんどん速度を上げて、ユリー7の姿は小さな点になり、やがて見えなくなった。

「どうして……!」

アオは、彼女が残した円筒形の筒を抱きしめて、声を出して泣いた。

あれから、一ヶ月が経過した。

アオを載せた脱出ポッドは、長い時間宇宙を漂っていたが、輸送船に回収され、彼は無事だった。

ダイソニングは、分解して制御不能となり、彗星群に一部が完全に破壊されていた。一部は、リング同士がぶつかったことで大破。また一部は、スラスターの逆噴射が作動せず、宇宙の彼方へ飛んでいった。地球や月に降り注いだものもあった。これによって、月面都市が被害を受け、致命的な損傷を負っていた。

一部は、元の軌道付近に漂っていたが、もはや復旧するには、長い

年月がかかるのは明白だった。

輸送船から、地球中央政府に何度も通信を試みたが、一切応答は無かった。

地球中央政府やAIは、ダイソンリングのエネルギー供給が絶たれたことで機能が停止し、大混乱に陥っているだろうと推測された。

地球探査に向かう計画も検討されたが、月面都市が破壊されたことよって、地球への着陸船も無い。

アオは、輸送船の展望室で、ユリ17のことを思っていた。彼女の消息は、その後、確認することは出来なかった。彗星群にやられたか、酸素が無くなって宇宙を漂っているか。いくつかの可能性があったが、定かでは無い。

どうして彼女は逃げなかったのだろうか。

彼女は、言葉の端々で人生への絶望感をあらわにしていた。もしかしたら、死に場所を探していたんだろうか。

彼女が残した円筒形の容器は、今はアオの個室に置いてある。大切な物と言っていた彼女に敬意を表して、中に、何が入っているかは確認していない。

アオは、いつの日か、彼女が無事に帰ってくるような気がしていた。再び彼女に会えたら、何が入っているのか尋ねよう、と彼は思っていた。

リングを失った自分たちは、時が経つに連れて生存の可能性は低くなるだろう。また、地球にいるという新たな人類にとっても、それは同様だった。彼らが原始時代と呼ぶ千年前の水準の文明に落ちぶれるのか、それともこのまま、人類という種が死に絶えるのか。

アオの乗る輸送船も、近いうちに燃料や食料が尽きてしまうだろう。

それでも、アオや生き残った人々は、生きる可能性を探して、まだしばらくは、足掻くことになる。

アオは、ユリ17への想いを胸に、これからどうするか、仲間たちと話し合う為に、展望室を出ていった。

続く…

遙か彼方の永劫を超えて2 火付盗賊

長屋暮らしが板についてから、かれこれ五年になる。武士を辞めて町人になってから、生計を傘張りなどに頼っている。貧乏を絵に描いたようなみすぼらしい暮らしだったが、同居人の妹は、文句一つ言わずに明るく振る舞っていた。

「およね。いつもすまねえな。大黒屋の用心棒の仕事が上手く行ったら、ちよつとした稼ぎになる。もうちよつとの辛抱だ」

およねと呼ばれた女は、傘張りの仕事を続けながら、出掛けようとする彼に声をかけた。

「兄様、期待してるよ。頑張ってるね」

およねの笑顔に見送られ、勝野龍之介は、本郷の町を歩き始めた。太陽はまだ高く、日差しは強かった。龍之介は、手で目を避けるようにかざしたが、あつという間に、汗が吹き出した。手拭いで汗を拭いながら、彼は大黒屋へと歩みを早めた。

「ごめんよ」

龍之介が、大黒屋の暖簾をくぐると、何やら揉め事の最中だった。「大黒屋の旦那。あんたに貸した百両、今すぐに返してもらいてえんだが」

武士崩れと思われる三人の男たちが、店の中で大声を張り上げていた。そのうちの一人が、板の間に土足で足を踏み入れて、凄んでいた。対して、大黒屋の主人が、正座して頭を下げていた。

「もう少し待ってくれないか。今日明日で売掛金の集金をすれば、すぐに返せる目処が立つ」

別の男が、たまたま外出から帰って来た丁稚奉公の若い娘に目をつけた。

「お房じゃねえか。相変わらずの器量良しだな」

男が、お房と呼ばれた女を羽交い締めにしていた。

「おやめ下さい！」

「大黒屋の旦那。どうだい、この娘を借金のかたに差し出せば、半金でいいと、うちの親分が言ってるんだ」

大黒屋の主人は、慌てて立ち上がった抗議した。

「それだけは、ご勘弁を。その娘は、私が世話になった家の子なんだ。大切にすると約束して奉公を受け入れた」

「そんなこと知ったことか！ 今すぐ、耳を揃えて返すか、この娘を差し出すか、どっちか選べ」

龍之介は、冷静に様子を窺っていた。高利貸しの男衆は、明らかに堅気の者たちではなかった。恐らく、雇われて集金を担当しているのだろう。自分の敵では無いと判断したが、ここで刀を抜くような真似をすれば、騒ぎが大きくなり、嫌がらせが酷くなる恐れがあった。

ふと、手前に立っている男が、証文らしきものを持っているのが見えた。龍之介は、男の手首を掴んで捻り上げた。

「な、なにしやがる！」

龍之介は、男の腕を捻ったまま、証文の内容を確認した。

「ほう。こいつにやあ、月末に返済とあるじゃねえか。まだ、三日はあるぞ」

板の間に土足で踏み込んでいた男衆の頭と思われる男が、龍之介に気づいて振り返った。

「何だてめえは」

龍之介は、掴んだ腕を離すと同時に、その男の尻を軽く蹴飛ばした。証文を持った男は、よろよろと前に、進んだかと思えば、土間にへたり込んだ。

「俺か。今日から雇われた用心棒よ」

その男は、腰巻きから短刀を取り出して、龍之介に凄んだ。

「うちの親分が、金が入り用なんだ。そっちの都合なんざ知らねえな！」

そう言い終わらないうちに、その男は短刀を、腰だめに構えると、至近距離から襲いかかってきた。

龍之介は、ため息をつくとき、ほんの僅かに左に避けた。男は、勢い余って龍之介の脇を走り抜けて行くこうとしていた。龍之介は、その首筋に軽く手刀を振り下ろした。

男はその一撃で、その場に倒れ込んで気を失った。

「あ、兄貴！」

倒れた男衆の頭の元に、男たちが駆け寄った。

「お、覚えてやがれ！」

そう言い残すと、倒れた男の肩を抱えて、彼ら借金取りは、慌てて店を出ていった。

「やれやれ」

大黒屋の主人は、龍之介に駆け寄ると、大きく頭を下げた。

「勝野殿。助かった。礼を言わせてもらうよ」

主人は、傍に呆然と立ちすくんでいた、お房を呼び寄せて、一緒に、頭を下げさせた。

「礼などいらぬ。それよりも、本当に今日から雇ってもらえるのだな？」

主人は、頭を上げると、笑顔で言った。

「もちろんですとも」

龍之介は、気になっていたことを、少し言いよどみつつ、確認をした。

「そのう。なんだ。借金があるのだろうか？ 俺の給金は、そのう、大丈夫なのか？」

「それならば、さつきあやつらに話していた通り、月末の集金が済めば、まとまった金が入りますので」

龍之介は、ほっとしていた。およねにたんかを切ってやって来たからには、おいそれと駄目だった、と言うことは出来なかった。

「あのう。もし」

お房と呼ばれていた女が、龍之介に話しかけてきた。

「もしや、およねちゃんの兄様の龍之介殿ではございませぬか？」

龍之介は、少し驚いて娘の顔を見た。確かに、歳の頃は、妹のおよねと同じくらいか、と彼は見てとっていた。

「いかにも。あんたは？」

女は、改めて礼をした。

「房江と申します。およねちゃんとは、前の勤め先で知り合って。前に一度、お家にも遊びに行ったことがありますよ」

龍之介は、お房の顔をまじまじと見ると、こんな器量の良い娘を忘れるとは、と首を捻った。

「そうだったか。面目無い。すっかり忘れてしまったようだ」

先程のような立ち回りを見せた彼の間の抜けた一言に、大黒屋の主人とお房が笑い出していた。

「で、なんでまた、あんな高利貸しから金を借りたりしたんだ？」

大黒屋の客室に通された龍之介は、刀を畳の上に置くと、早速先程のことを主人に質問していた。

大黒屋の主人は、少し表情を曇らせた。

「実は……」

ほんのふた月程前のこと。大黒屋では、蔵で出火があった。火は蔵を焼き尽くす程に燃え上がり、蔵に保管していた商品の着物の生地が、全て燃えてしまったのだ。

幸いにも、怪我人も無く、商売も上手くいっていた事から、商いを立て直す為にも、何処からか金を借りる必要があった。たまたま、知人に紹介された金貸しから金を借りることで、店を畳まずに済んだのだった。しかし、ひと月程前に、金貸しの主人が失踪したかと思えば、先程取り立てにやって来た男衆が、証文を譲り受けたと言って、毎日のように押し掛けるようになったのだ。

稼ぎは問題が無いものの、あのような輩が店に頻繁に顔を出すようなら、商いにも影響が出てしまう。

火事についても、火元となる物が無く、不審火という疑いが強かった。

主人は、物騒な事件が起きる前に、店を守る用心棒が必要だと考えるようになったのだ。

「奉行所は何やってやがんだ？」

大黒屋の主人は、首を振った。

「火事の後、すぐに火盗改が来てくれました」

龍之介は、それには驚いていた。

「何とまあ。そうかい。火付盗賊改が目をかけてくれるなら、安心だな」

「勝野殿。そりゃあ、そうなんですがね。悪く言えば、凶悪犯が、うちを狙ってるってことですよ」

龍之介は、それを聞いて考え込んだ。

「そんだけ、貯め込んでるって、思われてんだな？」

「冗談じゃありませんよ。実際、火事のお陰で、今は大変な時で」

本郷の町は、火事が多かった。そして最近では、儲かっていると噂される商店を狙った火付盗賊の被害も、今年になってから、数回起きていた。賊に入られた店は、家族や丁稚を含めた全員が殺害され、金品を強奪され、彼らは火を放って去って行くのだ。

そのような、凶悪な犯罪が起きるたび、商人は打つ手がこれと言つてなく、用心棒を雇い入れることが多かった。

火盜改も活躍していて、事件が未然に防がれることもあったが、江戸は広く、十分な警備が出来る訳も無かった。そうになると、商人たちは、自衛するしか無かったのである。

「じゃあ、今夜から寝ずの番をすりゃあいんだよな？」

大黒屋の主人は、大きく頷いた。

「旦那、それじゃあ、お願いしますね」

「あー。給金のことだが……」

大黒屋は、にっこりと笑った。

「わかってますよ。すぐに月末ですから、最初の給金は日割りで出せますよ」

龍之介は、目を輝かせて自分の胸を拳で叩いた。

「わかった。任せてくれ」

その夜、龍之介は、皆が寝静まった後も、一人起きていた。かと言って、何もなければただ起きているだけで、特にやることは無く、しごく退屈だった。

彼は、大きなあくびをしていた。そして、真夜中に厠に行きたくなって、住居の外の庭に出た。厠は、家から少し離れた塀の傍にあった。

ふと、物陰に何かしらの気配を感じた。不思議そうに彼は、周囲を見回すが、何も見つけることは出来なかった。

その日、初めての給金を受け取った龍之介は、三日ぶりに勇んで家路についていた。真夏の真つ盛りだったが、夜勤明けで朝早く、まだ外は涼しかった。

龍之介は長屋に帰るなり、妹のおよねに大声で言った。

「およね！ 金を受け取って来たぞ。今日はこれで美味しいものでも食べよう」

およねは、土間で龍之介の為に朝食ならぬ夕食を用意しているところだった。

龍之介は、乱雑に金を渡すと、それをおよねは両手で大切そうに受け取った。

「まだ働いて三日だっていうのに、こんなに？ 兄様、本当にお疲れ様でした」

龍之介は豪快に笑った。

「何の。ただ夜中に起きているだけだ」

およねは、少し考え込んでいた。

「兄様、このお金は大事に使いましょ。美味しいものは、次のお給金までとっておきましょう？」

龍之介は頭をかいた。

「そ、そうか？ いいんだぞ。今日ぐらい」

「じゃあ、少しだけ。今日は、これでお米を買ってきますから」

「おう、頼んだぞ！」

粗末な食事を食べながら、およねは龍之介に聞いた。

「大黒屋にお房さんが？ 兄様、お房さんは、私の命の恩人ですよ」

漬物を口に入れながら、龍之介は思い出すように言った。

「うん？ 彼女がそうだったのか。何も話してくれなかったがな」

およねは少しだけ嬉しそうな表情をしていた。

「前にお勤めしていたお店、賊が入って大変な事になったでしょう？ お房さんが逃してくれなかったら、私もどうなっていたことか。あの後、お房さんに会えなくなってしまうって、生きているのかどうかさえ、わからなかったから」

それを聞いた龍之介は、その時の事を思い出していた。

一年前のことだった。

およねが勤めていた店に、盗賊が入ったのだ。同じ店で働いていたお房が、それにいち早く気づき、およねを逃してくれたのだ。その際に、一家や丁稚たちは殺害され、店は火を放たれて焼失してしまった。生き残ったのは、およねを含めて数人しかいなかった。およねは、しばらくの間お房を探していたが、見つからず、一家とともに亡くなったのだらうと考えて諦めていたのだ。

「あのお房さんがお前を助けてくれたとはなあ。言ってくれりやあいいのになあ」

「兄様、私も一度大黒屋に行ってもいいかな。お房さんにお礼を言いたい」

龍之介は頷いた。

「いいんじゃないか？ きつと、喜ぶだろう」

およねは、笑顔で頷いた。

「ありがとう、兄様。今日にでも行ってみようかな」

龍之介は、昨夜大黒屋の主人から聞いた話を思い出した。

「そういやあ、今日は、暇をあげたって聞いたな。明日以降の方がいいんじゃないかな」

「あら、そうでしたか。残念……。じゃあ、明日伺いますね」

龍之介が、食事を食べ終えて眠りについた頃、大黒屋では、お房が外出しようとしていた。

「旦那様。それじゃあ、すいませんが、今日は、暇を頂きます」

「お房、気をつけてな。あまり遅くなるんじゃないよ。実家のお父上にも宜しく言っとくれ」

大黒屋の主人に深々とお辞儀をして、お房は店を後にした。彼女は、真夏の日差しを眩しそうに見上げてから、実家の方へと歩みを進めた。

お房の実家は、浅草の方にあった。途中、不忍池付近の団子屋で、お房は早い休憩をとっていた。

お房が店先で茶を飲んでいると、つい昨日まで大黒屋にやって来ていた高利貸しの男衆が通り掛かった。既に、大黒屋は借金を全額返済

していたので、彼らとの関わりは、終わったはずだった。

彼らは、お房の前で立ち止まると、顎でついてくるように示した。男衆が、不忍池の方に向かったので、お房は少し後からその後を追った。

「姐さん、それでいつ決行で？」

男衆の頭が、腰を低くしてお房に尋ねていた。

お房は、男衆を蔑んだ冷たい目で睨んだ。

「今夜がいい。用心棒も、お前たちとの縁が切れたことで今なら油断しているはずだ。父上はなんとやっている？」

「へい。いつでもやれると。準備は整っておりやす。既に、別の盗賊仲間とも合流して、頭数も十分で」

お房は頷いた。

「わかった。今夜、丑三つ時に決行と伝えてくれ。裏木戸を開けておく」

男衆は、うやうやしく頷いた。

「わかりやした。すぐに盗人宿に戻って伝えてきやす」

「頼んだぞ」

お房は、急ぎ足で去って行く男衆の背中を見送った。

「後は、あの用心棒をどうするか、だな」

お房は、池をのんびりと泳ぐ鴨を眺めながら、龍之介の始末の方法を考えていた。

だが、彼女にも、一つ気がかりがあった。

お房は、およねのことを思うと、兄の龍之介の始末をどうするか、迷っていた。

お房は、盗賊の首領の子として生まれ、数年前から、本格的に手伝いを行っていた。表向きは、堅気の商売をしている事になっていた為、一家が盗賊であることは当然知られていない。大黒屋の主人とも、堅気の商人同士として、以前から父との付き合いがあった。お房は、この縁をきっかけとして、丁稚奉公として店に入り込んだのだ。彼女は、中の様子を探り、時が来たら仲間を引き込む役目を負っていた。

約二年前、初めてその役目を受け持った時に、同じ店で働くおよねと出会った。お房にとつては、初めて出来た同年代の友人だった。本来なら、本気で友情など感じてはいけな立場だったが、お房は若かった。そして、友人を死なせるようなことが、どうしても出来なかつた為、迷った挙句、仲間を侵入させる直前になって、密かにおよねを逃したのだった。

そして、今回が二度目のおつとめである。にもかかわらず、またしてもおよねに関係のある人物が店にいることになってしまった。

何かの因縁なのか、それともただの偶然なのか。

今度こそ非情に徹すると心に誓って、今回の役目を引き受けたからには、邪魔者は消すしかない。

お房は、落ちていた小石を拾って、池に浮かぶ鴨に向かつて投げつけた。池に、落ちた小石の波紋が広がると、鴨は少しだけばたばたとその場を離れたが、少し離れたところで再び池に落ち着いた。

お房の心のさざ波はといえば、一向に晴れることはなかった。

日が落ちる頃になって、お房は大黒屋に戻っていた。

「只今戻りました」

そう言つて暖簾をくぐると、土間には龍之介が立っていた。彼は、たつた今出勤してきたところだった。

龍之介は、お房の方を向くと、破顔して言った。

「お房さんか。丁度良かった。明日な、うちのおよねが、お前さんを訪ねて来たいと言つてるんだが。迷惑じやなきや、ぜひ会つてやつてくれないか。前に、命を助けてくれたことの礼を言いたいそうだ」

お房は、およねが来ると聞いて複雑な気持ちになった。

そう。明日になればこの店はもう存在しない。そして、自分自身も、この地にはもう戻らない。

すると、龍之介が、深く頭を下げた。

「俺からも礼を言わせてくれ。あんたは大事な妹の命の恩人だ。すぐに礼を言えずにすまなかつた」

お房は、恐縮した様子で頭を振ってから言った。

「お気になさらないで。私もおよねちゃんには会いたいから、大歓迎

ですよ」

お房は、作り笑顔で龍之介に答えるのが精一杯だった。

「勝野殿。それでは、今日もお願いしますね」

「おう。任せておけ」

大黒屋は、店を締めたあとの後片付けに追われていた。番頭や手代、そして丁稚らが、商品の着物の生地を運んで元の場所にしまおうとしていた。大黒屋の主人はというと、そろばんを弾きながら、今日の商いの売上を帳面に筆で書き込んでいた。

特にやることも無い龍之介は、邪魔にならないように隅の方に座ってその様子を眺めていた。

「そっういや、勝野殿。妹さんがいるって言ってましたね。良かったら、うちの生地で着物を作ってやったらどうです？ きつと、喜ぶと思いますよ」

「考えとくよ」

さすがに、そんな金はない。

仕事が順調だったら、いつか考えてもいいな、と龍之介は思っていた。

龍之介は、ふと周りを見回した。お房の姿が見えない。多分、夕食の支度に借り出されているのだろう。

龍之介は、家を出る前に、早い夕食をおよねと二人で食べて来たので、ご相伴にあずかるつもりも無い。

今日からまた、定休日まで泊まり込んで、長屋には帰れない。食事を浮かすいい機会だったが、およねと過ごす時間の方を大切にしていた。

龍之介は、ここに居ても邪魔かと思い、与えられた客室に引っ込んだ。後は、皆が寝静まった後に、賊がやって来ないか寝ずの番をするだけだ。

このまま、単に夜中に起きているだけで済めば、楽な商売なんだが、と彼は思っていた。

やがて深夜になり、龍之介は客室で正座して気を鎮めていた。こうしていると、僅かな物音にもすぐに反応できるのだ。

同じ頃。お房も起きていた。

周りを見渡すと、彼女と同じ様に丁稚奉公でこの店に住込みで働く同僚の女たちが、川の字になって寝ていた。夏の暑い夜のため、皆布団を剥いで寝ている。

お房は、彼女たちが間もなく命を落とす事を知っていた。平和そうな寝顔を見ると、非情になろうとする決意が揺らいでしまう。前回のおつとめの時、仲間が店の者たちを寝たまま殺害したり、逃げ惑う者を斬り殺すのを目撃した。返り血を浴びたお房は、不覚にも茫然自失となり、仲間に抱き抱えられて店を脱出したのだ。

隠れ家に集まった際に、父に叱責され、折檻されたのを今でも思い出す。

二度と、あのような無様は晒すまいと、心に誓って非情になろうと努力してきた。

それでも。

およねの兄、龍之介の姿を見た時から、心の動揺をひた隠しにしていた。彼が初めて店に現れた時、何も言わなければ気付かれなかっただろうに、およねのその後のことがつい気になり、余計な事を喋ってしまった。

彼が疑問を抱く前に、事を進めるしかなかった。

それにしても、今宵のおつとめで、彼が邪魔なのは明白だった。

お房は、龍之介をどのように始末するか迷っていた。

先だって、借金取りに扮した盗賊仲間の男衆を、軽くあしらった龍之介の実力はわかつている。正攻法では、お房自身の力では絶対に敵わない。しかし、彼にもしもの事があれば、およねが悲しむだろうことは、容易に想像がついた。それを思うと、どうにも気持ちの動揺を抑えることが出来ない。そして、ここ数日、彼の様子を窺っていたが、心優しい良い人なのは十分にわかつていた。

本当に、彼を始末出来るのだろうか。

仲間がここに入った後、彼に全員がやられることはないだろうが、それなりの被害がこちら側にも出ることが予想される。それを考えると、やはり油断している時に、不意を付くのが良いはずだ。

お房は、しばらくの間、布団の上に座り、店の中の物音に注意を払った。龍之介が油断なく見張っているはずなので、まだ迂闊な動きは出来ない。

龍之介は、急に厠に行きたくなって、小さく震えた。

脇に置いてあつた刀を掴むと、立ち上がつて厠に向かった。龍之介は、鼻歌を歌いながら、ゆっくりとした足取りで廊下を進んでいった。

お房は、誰かの足音がしているのに気が付いた。

彼女は、龍之介に違い無いと確信した。足音が遠ざかつて行くのを確認し、彼女も立ち上がつて、足音のする方へと足を忍ばせた。

どうやら、厠に行こうとしているらしい。

その時お房は、土間の台所を通りかかり、そこにあつた少し小さ目の漬物石が目に入った。これなら、自分の細腕でも持てるだろう。そして彼女は、咄嗟に龍之介を始末する方法を思い付いた。

龍之介は、鼻歌混じりに裏庭に出て、縁側に置いてあつた下駄をつっかけた。そして、裏庭をのんびりと歩くと、厠に入って扉を閉めた。汲み取り式の厠は、酷い匂いがしていたが、龍之介は特に気にすることもなく、小便をした。用をたし終わり、ぶるつと震えた彼は、かなり警戒心が薄くなっていた。

龍之介は、突然、背後に人の気配を感じて、後ろを振り向こうとした。

そこには、お房が立っていた。

龍之介は驚愕して、何か言おうとした矢先に、何か固いものを後頭部に叩きつけられた。龍之介は、突然のことに対処出来ずに、厠の中で倒れ込むと、そのまま意識を失った。

お房は、彼が、意識を失うのを見て、ほつと胸を撫で下ろした。

お房は、龍之介の頭に投げつけた漬物石で、彼が命を落とすかも知れないと恐れていた。だが、それなら、それでもいい。兎にも角にも、これで邪魔者を排除することが出来たのだ。

お房は、厠の戸を閉じると、急ぎ裏庭の堀沿いに走った。そして、途中にあつた裏木戸を開けた。

既に、盗人仲間たちが外に待機しており、静かに彼らが続々と入っ

て来た。

しばらくすると、ほっかむりをしたお房の父も中に入って来た。

「お房。ご苦労だった」

裏木戸の傍に立っていたお房は、黙って会釈した。

「用心棒はどうした」

「既に、わたくしが始末しました。邪魔される事はありません」

お房の父は頷いた。

「よくやった」

裏庭に集まった、総勢三十名程の盗人たちは、無言で頷き合い、母屋の中に侵入して行った。

お房は、その様子を見送ると、途端に激しい後悔に包まれた。

私は、なんと言う事を。

本当に、これで良かったの？

懸命に自問自答しても、答えは出ない。

流れに身を任せ、自らの意思で、ここまで手伝ったのだから。

お房は、その場でうずくまると、目を閉じて耳を塞いだ。これから起こる恐ろしいことを、何も見たくないし、聞きたくなかった。

「起きろ」

龍之介は、誰かに体を揺すられていた。

目を開けると、目の前に同心と思しき人物が立っていた。

そういえば、厠でお房に襲われたのだと、龍之介は思い出していた。

痛む後頭部に触れると、大きなコブが出来ていた。

周囲には、厠の強烈な悪臭よりも強く、ものが焦げたような匂いが漂っていた。

はっとした龍之介は、飛び起きて走り出そうとした。

しかし、彼は既に大黒屋の母屋が火事で全焼し、瓦礫と化しているのを目撃した。

「そ、そんな……！」

龍之介は、膝から崩れると、その場にへたり込んだ。

そこでは、同心や与力たちが、現場検証を行っているようだった。

龍之介を起こした同心は、申し訳無きそんな表情で言った。

「俺たちは、火付盗賊改の者だ。お前、雇われてた用心棒だな？」

龍之介は、茫然としたまま頷いた。

「ひでえことしやがるな。どうやら、生き残ったのは、お前さん一人のようだ。すまねえが、詳しく話を聞かせてもらいてえんだが」

龍之介は、その声が、とても遠くに聞こえていた。

そういえば、お房は、どうなったのだろう。

彼女が、大黒屋に火を放った盗賊を引き入れたであろうことは、容易に想像がついた。

龍之介にとって唯一の救いは、今日訪れる予定だった妹が、巻き込まれずに済んだことだけだった。

それから、一月が過ぎた。

龍之介は、再び傘張りの仕事をしていた。

彼は、手を止めて、一緒に傘張りをしているおよねの顔をぼんやりと見ていた。

「どうしたの？ 兄様。手が止まっていますよ」

「あ、ああ。すまん」

およねは、思い出したように言った。

「私ね。何だか、またお房さんには、いつか会える気がするの」
「ほう」

「そんな気がするの」

龍之介は、暫し考えた。

彼女が、盗賊の一味だったことは、妹には話せなかった。だが、あの娘が本当に悪人だったのかどうか、彼にも疑問が残っていた。

「うむ。どういう訳か、俺もそんな気がする」

二人は、微笑み合って、仕事に精を出した。

続く：

遙か彼方の永劫を超えて3 少女の内なる絶望

私には、好きな人がいる。

高校一年生の時から、クラスメイトだった人。

名前は、氷室裕介。

一年生の時から、バスケットボール部で活躍していた。

切れ長の瞳と、揺れる髪。躍動する体と、流れる汗。

部活を遠目で見た私は、うっとり見つめてしまう。

彼は、クラスでも人気者で、男子だけでなく、女子にもいつも囲まれていた。

そして私の名前は、佐藤優子。

ありふれた名前。何処にでもある名前。きつと、日本中に、同姓同名の人がたくさんいるに違いない。

私は、目立たない存在だった。

教室にいる時も、いつも本ばかり読んでいた。でも、本当は、本を読むふりをして、彼の動きを追っていた。

でも、ただそれだけ。

私は、別に可愛くもないし、至って普通。

彼と私の間には、とつても広い川が流れている。いいえ、きつと、海よりも、宇宙よりも広い空間が存在しているに違いない。彼と私の人生が、交わるはずも無い。

こうやって、ずっと見てるだけなんだ。

そう、思っていた。

二年生に進級した時、また彼と同じクラスになった。とても嬉しかった。

今日も相変わらず、本を読むふりをしながら、彼が、楽しそうに誰かと話すのを眺めている。でも、女子と楽しそうに話しているのを見ると、少しだけ胸が痛かった。

夏休み明け、学校に行く途中で彼を見かけた。後ろを歩いているだけで、少しだけ、どきどきした。

途中で、いつもクラスで彼と話をしている女子がやって来て、二人

で一緒に歩き始めた。何だか、とても楽しそうに話している。

私の中で、嫉妬心が微かにうごめいた。

だから、何だというの。私と彼の間には、何の接点も無い。何の努力もしなかったくせに。

嫉妬する自分が悲しかった。

でも、学校に行くと、その子と彼が、夏休みの間に付き合い始めたことが明らかになった。どうやって、わかったかと言えば。それを知った誰かの黒板への落書きだった。二人は、冷やかされて恥ずかしそうにしていたけど、幸せそうだった。私は、絶望というのが、こういう感覚だというのを、その日初めて知った。

その日は、具合が悪いと言って、一日中保健室で過ごした。本当に、吐き気がして、気持ちが悪かった。布団を被って考えないようにとしても、あの子の姿が浮かんで来る。

ああ、もう、考えないようにすることも、許されないんだな。

ある日、彼は部活の大会に出場する為、部員を乗せたバスで、どこかへいなくなっていた。

教室に彼がいなくて寂しい気もしたけど、あの子と楽しそうに話す姿を見なくて済むのが、唯一よかったことだった。

その日、あの事故があった。

部員を載せたバスに、対向車線から飛び出してきたトラックが衝突し、大勢の部員が重軽傷を負う、大きな事故があった。

私は、家において、お風呂上がりにつけたテレビで、そのニュースを知った。

私には、何も出来なかった。ただ、震えてその事実を受け入れるだけだった。そして、せめて、彼が無事でありますようにと、祈るだけだった。

その日はなかなか寝付けず、翌日は寝不足で学校に行くことになった。父と母は、私のことを心配するより、身近に起きた恐ろしい事件を着に、長々と話し合っていた。私の気も知らないで。

翌日から、彼は学校に来なかった。先生の話によれば、重症を負っているらしい。

彼と付き合ったあの子はというと、ずっと泣いていた。彼女は、友達の女子に囲まれて、慰められているようだった。

私も、泣きたかった。でも、何にも関係が無いのに、泣いてたら変だよ。

それから、三ヶ月以上過ぎた頃、彼はやっと学校に戻ってきた。季節は、もう十二月になっていた。

教室に担任と一緒に遅れて入って来た彼。

彼の顔を久しぶりに見れた私は、涙が出そうな位嬉しかった。

でも、その彼をよく見ると、足を引きずっていて、杖もついていた。前のような明るさや、爽やかさは影を潜めていた。暗い目をした彼は、まるで何者も近付け無いようなオーラをまとっていた。

休み時間になると、以前のように、彼の周りには大勢の男子や女子が集まっていた。皆は、口々に心配していたことを彼に語りかけていた。

でも、その彼は、一言も喋らず無表情だった。

誰かが、彼の背中を叩いて話し掛けた時、突然、彼は険しい表情で怒鳴った。

うるさいとか、ほつといてくれとか、そんなことを言っていたと思う。私も、そんな彼を見るのが初めてで、思わず持っていた本を、落としてしまった。

私は、開いた口が塞がらなかった。

何で？ あの、明るくて爽やかを絵に書いたような彼が？ どうして？

私は、どんな顔をしていたんだろう。きっと、いつものように、何の感情もない顔をしていたに違いない。

そう。それが、誰からも愛されない私の処世術。

それなのに。

つい、涙が溢れてしまった。

私が、教室で突然ぼろぼろと涙を流し始めたことで、それに気が付いたクラスメートの一人が、怪訝な表情で見ている。普段、誰とも話さず、存在感が皆無だった私の変化に、意外と思っているのだろう。

居たたまれなくなった私は、落とした本を拾って、慌てて席を立てて教室から逃げ出した。

背後では、裕介の突然の変化に、集まっていたクラスメートの非難の声が最後に聞こえていた。

心配してやってたのに……といった声が聞こえた。

聞くに耐えないと思った私は、耳を塞いで廊下を小走りに走っていった。

かなり走って、気が付くと、校舎の端っこまで来ていた。

息を整えながら、さっきのことを考えてしまう。彼の変わり様を思い出しただけで、涙が止まらなかった。

涙が枯れるまで泣いた私は、途方に暮れた。もう授業も始まっているし、今から、戻る気にもなれなかった。仕方なく、結局また保健室に行くことにした。

とぼとぼと、保健室の前まで来た私は、扉を恐る恐る開けた。中を覗くと、保健室の先生がいつもの席にいなかった。

室内に入って周りを見回すと、ベッドのカーテンを開けて、中から保健室の先生が現れた。

私に気が付いた先生は、特に驚きもせず、私を迎え入れてくれた。

どうしたの、とか、どこか具合が悪いの？ と聞かれた私は、気分が悪い事を伝えた。

先生は、二つあるベッドのうちの一つを使って休んで行くように言ってくれた。保健室の先生は、いつも優しい。何も言わずに受け入れてくれるのが、本当に嬉しかった。

でも、もう一つのベッドは、カーテンで仕切られていて、誰かが使っているようだった。誰にも会いたく無いな、と思った私は、やっぱり早退したいと言う事にした。

ふと、カーテンの隙間から、そこにいる生徒の姿が見えた。

私は息が止まりそうになった。

彼が、いる。

彼が、どうしたのか、どうしても気になった。

私は、そつと保健室の先生に近付いて耳打ちをした。

すると、保健室の先生は、私を部屋の隅に連れ出して、小声で話をしてくれた。

彼は、足の怪我のことで酷く落ち込んでいることと、そつとしてあげて欲しいということを教えてくれた。私は、うんうんと頷いて、もう一つのベッドへと音を立てないように潜り込んだ。

彼の小さな寝息が聞こえてくる。

カーテンの敷居はあるけど、彼がそばで寝ていると思うと、とてもどきどきした。

でも、同時に物凄く心配にもなった。

どうして、こんな事になってしまったんだろう。

考えれば、考える程に理不尽だと思った。

枯れたはずの涙が、まだ目の奥にあつたみたい。

私は、彼が、幸せであることを祈っていた。私には何の関係も無い人だけど、せめて笑顔が見られるだけで、私もささやかな幸せがあったから。

それからしばらくして、私も寝てしまつたらしい。

気が付くと、夕日が窓から見えていた。

隣のベッドは、いつの間にかカーテンが開いていた。彼は、ベッドに腰掛けて窓から見える夕日をぼんやりと眺めていた。窓の外からは、校庭で部活動をしている生徒たちの声が聞こえていた。

保健室の先生は、席を外していて、今は居なかった。

二人つきりだと思うと、胸がまたどきどきとしていた。

私は、何か彼に話しかけたいと思った。

勇気を振り絞って声をかけようと思ったが、中々言葉が出ない。

やっとの思いで、口から出たのは、あの、だけだった。

背を向けていた彼は、私の言葉にゆっくりと振り返った。多分、彼と真つ直ぐに目を合わせたのは、これが初めてだった。

私は何か喋ろうとした。

でも、何を？

大丈夫？とか。

元気出して、とか？

考えてみると、どんな言葉も、今の彼には相応しく無い気がした。そうやって、躊躇している間に、多分三十秒ぐらいの間があつたと思う。このままじゃ失礼だと思つた私は、傍に合つた今日読んでいた本を掴むと慌てて言った。

「た、退屈だつたら、これ読んで！ 凄く、面白いから！」

私は、本を差し出した体勢で、下を向いていた。顔から火が出ているかと思うぐらい熱かつた。耳の先まで、体中が熱くなっていた。

私は、何をやってるんだろう。

消えてしまいたいと思つていた。

ふと、差し出した本が手から離れていった。

顔を上げると、私の本を受け取つた彼は、体を私のベッドの方に向けて座つていた。そして、無言で手に持つた本のページをめくり始めた。彼は、本のページをぱらぱらとめくると、口元が緩んでいた。

どうしたんだろう、と私は不思議に思つたけど、すぐに原因がわかつた。

「ご、ごめんなさい！ きよ、興味……無いよね」

でも、彼は明らかに笑顔になつた。

「こんな難しそうな本、読んでたんだ」

ブックカバーがされているので、彼は中のタイトルページを私に見せてきた。

科学技術の発展と人類の未来

と書いてある。

私は、しまった、と思つていた。

今日持つて来たのは、普通の小説とかじゃなかつたのを思い出して、また体が火が出るように熱くなつた。何か弁明をしないと、と焦つた私は、いろいろと口走つていた。

「わ、私、SF小説が好きで、最近読んでいる本に関係することがそれに書いてあつて、その……ご、ごめんなさい！」

彼は、私に笑顔を向けると、その本の最初の章を黙って読み始めた。「俺も、SFは好きだよ。と、言つても、そんなに詳しい訳じゃ無いけど」

私は、それを聞いて少し驚いて、ページをめくる彼の様子を黙って窺った。彼は、本を閉じると言った。

「俺も、実はこういうの興味あるんだ。これ、本当に借りてもいいの？」

私は、驚きのあまり、彼の顔をまじまじと眺めていた。はつとした私は、大きく頷いた。

「よ、よかったら、読んで！」

「ありがとう」

彼の笑顔が眩しかった。

私は、彼よりも先に保健室を後にして、家路に急いだ。さつき起こった奇跡のような出来事に、私は、心の中の叫び声を抑えるのに必死だった。顔がほころぶのが止まらず、きつと通りかかった人が私を見たら、にやにや一人で笑っていて、気持ち悪いと思ったに違いない。

私は、幸せを噛み締めながら、家路を急いだ。

あれから、私は彼と、とても仲良くなった。

本当に、奇跡のような偶然。

彼は未来の技術に興味があったみたい。

今まで知っていた彼のイメージからは程遠いものだったから、最初はからかわれているのかな、と疑った時もあった。でも、彼のその後の様子を窺う限り、そんなことは無かった。

私は、大好きなSF小説で、こんな未来像が書かれていたよ、と彼に紹介すると、ぜひ読んでみたい、と言ってくれる。もちろん私は、内心小躍りして、すぐに本を貸してあげた。

そんな日々が続く、彼の表情も少しだけ明るくなった。

あれから、彼は、彼を取り巻いていたクラスメイトと触れ合うことは無くなってしまっていた。

そして、彼の彼女になったはずのあの子にも、冷たくしているみたいだった。

それが、何でなのか、私は怖くて聞けなかった。

聞けば、私の今の幸せが、逃げて行ってしまいそうだったから。多分、彼が私と仲良くなったのは、以前の彼に戻って欲しいと、私だけが言わないからだ。当たっているか、わからないけど、何となくそう感じていた。

仲良くなつてから、彼が教えてくれた所によれば、彼の足は奇跡でも起きなければ、一生杖が必要なんだそう。今は諦めずに、リハビリで週に何度か病院に通っている。

私は、その事を聞くと胸が苦しくなった。

彼も、その事を話す時、とても暗い表情になった。

それに、それだけじゃ無く、部活の殆どの彼の友達が、酷い怪我を負っていて、まだ退院出来ない重症の人もいた。退院出来たとしても、彼と同じ様に体に障害を抱えてしまった人も何人もいた。軽傷で済んだ人もいたそうだけど、精神的な問題で、前と同じ様に振る舞える人は、居なくなったらしい。

彼の気持ちを思うと、本当に居たたまれなくなる。

主要な部員がこのような状態となった為、うちの学校のバスケットボール部は、無期限活動停止になっていた。

年末が近づいて、明日から冬休みという日、教室で、彼が貸していた本を返してくれた。

「これ、面白かったよ」

「良かった」

私も、本を受け取って笑顔でそれに答える。

彼も、にっこりと笑う。

そして、小説の内容の解釈について、議論するのが最近の楽しみだった。

その日、彼との楽しい会話が、それで最後になるなんて、私は思いもしなかった。

「あんたさあ、ちよつといい気になってんじゃない？」

私は、トイレにいたところを、同じクラスの数名の女子に囲まれていた。

「そ、そんなこと……」

私は、中でも一番背の高い女子に、平手で思い切り叩かれた。叩かれた勢いで、私は跳ね飛ばされて、洗面所の角に、額を打ち付けた。叩かれた頬と、打ち付けた頭の痛みで、私は、トイレの床にうずくまって痛みに耐えた。

「あーごめん、ごめん。虫が止まってたからさ」

「だいたいさあ、あんたみたいなの本オタクが、どうして裕介と話をしてるの？ 釣り合わないって、どうしてわかんないかなあ？」

「彩夏も、言いたいことあるでしょ。言ってやんなよ」

そんな暴言を私に言ってきた女子たちが彩夏と呼ぶ人は、彼の彼女だった。

それまで黙っていた彼女が、うずくまっている私に話しかけた。

「ねえ。どうして、泥棒みたいな真似するの？」

私は――。

私は、泥棒……？

「彼の傍にいなぎやいけないのは、私なの！ ずっと、彼の為に尽くしてきて、やっと振り向いてもらったの。それなのに。それなのに、彼が、落ち込んでいる隙に割り込んで来て、あり得ない！」

そうか。

そうだったんだ。

私は、彼女を傷付けていたんだね。誰にも愛されない私は、誰にも関わらないようにしてきたのに。人との関わりを持ったばかりに、いつの間にか、彼女を傷付けていたんだね。

ちよつとだけ、私は自分が幸せになる夢をみてしまっていた。

だって、あんな奇跡のようなことがあって。どうしても、それを手放したくなかったんだよ……。

女子たちは、私の鞆の中身を漁り始めた。

そして、今日、彼から返してもらった本を取り出すと、トイレの便器に投げ込んだ。

「二度と、彼に近づかないで」

そう言い残すと、彼女たちはトイレを出ていった。

私は、彼女たちがいなくなった後も、トイレの床にうずくまってい

た。

涙が、後から後から溢れていた。

しばらくして、私はよろよろと立ち上がった。

トイレの床に散乱していた教科書やペンケースの中身を集めて鞆に入れた。

そして、トイレの便器に投げ込まれた本を取り出したものの、トイレの水が滴るどうそれをどうすべきか悩んだ。彼との思い出もあるそれを見ると、悔しくてまた涙が溢れた。そのまま捨てることが出来なかった私は、洗面台の水を流して、せめてトイレの中の水を洗い流そうとした。本が、ぼろぼろになったのを見て、私は、声を出して泣いた。

洗面台の鏡を見ると、額を切ってしまったようで、額の腫れ上がった部分の切り傷から血が出ていた。

髪は乱れ、頬は腫れ、涙の跡で情け無い姿だった。

そうだね。

私のくせに、ちよつといい気になってたんだ。

家に帰ってくると、母が私の姿を見て驚いていたけど、転んだと嘘をついた。そのまま、部屋に逃げ込んで、ベッドに潜り込んでまた泣いた。

冬休みは長かった。

何もやる気が出ず、日々ぼうつとして過ごした。

額の傷は、思ったより深かったみたいで、なかなか治らなかった。

その間、携帯の通知が時々出ていた。彼が私にメッセージを送ってくれていた。アプリを開くと、既読マークがついてしまうので、私は、開かずに通知の表示だけを眺めていた。

彼は、初詣に私を誘ってくれていた。

行きたい。

彼と一緒に、初詣に行くなんて、ずっと妄想の中の事だと思ってた。それが、せつかく現実になったのに。

私は、彼女のことを思い出すと、どうしても体が動かなかった。

「悔つこよ」

また、涙が溢れて来た。

彼と仲良くなつてから、私は、いろんな夢を、描いていた。

彼と、初詣。

彼と、一緒に映画。初めてのデート。

彼と、お祭りに行つて、

一緒に、花火を見て、手を繋いで。

そして――。

そんな、私の淡い夢が、手の中から、さらさらと砂のように零れ落ちていった。

冬休み明け、私の額の傷は、まだ治っていないかった。

私は、額に絆創膏を貼つて、学校に向かった。

その途中、彼に、ばつたりと出会つてしまった。

彼は、私の額の絆創膏を見ると、心配して言った。

「どうしたの？ それ」

私は、黙つて答えなかった。

そのまま、二人でしばらく並んで歩いた。そうやって、一緒に歩いていると、もう一度、彼と仲良く過ごす道はないかな、と考えたりもした。

そこで、黙っていた彼が急に喋り出した。

「あのさ」

彼は、そこで言いにくそうに再び黙つた。私が、彼を見ると、彼は意を決したのか、再び口を開いた。

「実はさ。俺、この冬休みの間に、彩夏と仲直りしたんだ」

私は、心の中で驚いていたが、表面上は、無表情なふりをした。

「彩夏がさ。他の女と仲良くするのは嫌だって言うんだ。俺、佐藤さんとは、もつと、もつと話したかったんだけど。彼女の気持ちも大切にしたいと思つて……」

彼は、とても言いにくそうに言葉を選んでいるようだった。

もう、何が言いたいのかはわかつていた。別に、私と彼は、付き合い合っていた訳でも無い。私が一人で、舞い上がっていただけだったんだから。

私は、踵を返すと、学校とは逆の方へ走り出していた。彼が何か叫んでいたが、私は、振り返らずに、一目散に走った。

すごく長い距離を走った私は、いつの間にか踏切の遮断機の前で息を切らしていた。

目の前の踏切を、凄い勢いで電車が走り抜けた。

ああ。

あれに飛び込んだら、もう悩まなくていいんだよね。

そう思っていると、今度は反対側から、別の電車が、走ってくるのが見えた。

私は、ふらふらと、遮断機の下を潜った。

電車が走り抜ける轟音が辺りに響いていた。

列車が通り過ぎると、遮断機が開き、待っていた人や車が線路を横切り始めた。

私は、隅の方でうずくまって、一人で笑っていた。

死ぬことも出来ないんだね。

私は、なんて臆病なのかな。

そう。

今まで通りに戻るだけ。

今まで、ずっとそうしてきたの。

何も変わらない。

よろよろと起き上がった私は、再び学校の方角に向かって、とぼとぼと歩き出した。

続く：

遙か彼方の永劫を超えて4 月面の遺物

ドリルジャンボが、月面の裏側に穴を開けていた。

四つの高速に回転する掘削ドリルが、硬い岩盤に穴を幾つも開けようとしていた。大気があるなら、恐ろしい軋む音が響いていただろう。

「ユミ、まずいぞ。このまま、掘削を続けると、エンジンが焼き切れる！」

無線でユミと呼ばれた女は、足下のペダルを思い切り踏み込んだまま、正面のドリルが火花を散らす様子を睨み付けていた。ドリルジャンボは、まるで巨大な蜘蛛のような六本の足を月面に固定し、その中央のコックピットは、地面に向けて逆さまにぶら下がっていた。コックピットの脇から伸びる四本の油圧式のシャフトが、先端に取り付けられた強力なドリルを月面に突き立てている。

「やつと傷がついたところなんだ。もうちよいやらせてくれ！」

ドリルジャンボのコックピットでは、エンジンとドリルの凄まじい轟音が鳴り響いていた。

「だめだ。止めるー！」

「まだまだー！」

地面に突き立てられたドリルが当たった場所は、次第に白熱し始めていた。

すると突然、ドリルの先端が砕けて、四散した。

粉々に飛び散ったドリルだった金属が、辺り一面に広がった。強力な投光機の光で照らされたそこは、ドリルの破片がきらきらと輝きを放って漂っていた。

ユミは、コックピットの窓の強化ガラスを思い切り蹴飛ばした。

「畜生ー！」

コーヒーの入ったカップから、湯気が立ちのぼっている。ユミは、それを掴むと、立ったまま、熱そうに一口すすった。彼女は、そばにあった椅子を引っ張り出すと、そこに腰掛けた。そして、テーブルの上に無造作に置かれた無線機に向かって話し掛けていた。

「もっと、硬度の高いドリルがいる」

無線機からは、少し雑音がしていたが、やがて先程彼女に声をかけていた男の声で返答が来た。

「さっき、地球に連絡して、新型の掘削用ドリルを送るように頼んでおいたよ」

ユミは、そばにあったタバコの箱を掴むと、不満そうに言った。

「それよりも、もっと強力な機材を運んでくれよ。最近では、原子力エンジン積んだ工作機械があるだろう」

「予算が無い」

ユミは、あからさまにがっかりとした表情をしていたが、顔の見えない無線機の向こうの男には伝わらないだろう。

仕方なく、タバコに火を付けると、思い切り空気を肺に取り込んだ。そして、ゆっくりと煙を吐き出すと、狭い月面の居住区画一杯に濁った空気が広がった。

「ユミ。今、タバコ吸ってるだろう？ 貴重な空気を、そんなもので汚すとは、正気な人間のやることじゃ無い。何度言えばわかってくれるんだ？」

ユミは、バカにしたような表情になると、暫くの間、無言でタバコを吸い続けた。

「センサーの表示によれば、君の居住区画の酸素量が危険な状態だと出ている」

ユミは、それを聞いて嘘つけ、と思ったが、手元のタバコをじっと見つめた。そして、諦めたように無線機の手前に置いてあった灰皿に、それを押し付けた。

「これでいいかい」

「結構」

ユミは、小さくため息を漏らした。

「ダニエル。あれはいったい何なんだ？」

無線機が、再び雑音しか音がしなくなった。向こうもタバコを吸い始めたのか、とユミが疑い始めた頃になって返事が返ってきた。

「俺たちは、クライアントの指示に従って、あれに穴を開ける。それだ

けだ。あれが何かなんて、俺だって知らない」

数週間後、ユミは、地球から届いた新型の掘削用ドリルを、ドリルジャンボに装着し、再び月の裏面の岩盤に挑んでいた。

コックピット内では、今回も激しい轟音が鳴り響いていた。月面に突き刺したドリルは、高速回転しながら、徐々に徐々に硬い岩盤をえぐり始めていた。

「やったぞー！ダニエル、やったぞー！」

じわじわと、ドリルは岩盤の内部に潜り始めていた。岩盤を削り取った破片が、砂のようにきらめきながら漂っていた。

ユミは、深く踏みこんだアクセルを徐々に緩め、今回はエンジンが焼き切れないように気を使っていた。この調子なら、回転数を落とすでも大丈夫だろうという経験的な判断だった。

それから、一時間ぐらい経過しただろうか。ドリルの先端は、完全に地面に埋没し、四本の油圧式シャフトが、限界まで地面に潜り込んでいた。

ユミは、突然感覚が薄くなるのを感じていた。先程までのような、無理矢理こじ開けて行く感覚が、急に消えたのだ。彼女はアクセルから足を離し、エンジンがアイドリングし始めた。そして、コックピットに無数にあるスイッチを操作し、ドリルの先端に取り付けられたセンサーの感度を上げた。

センサーの表示を見たユミは、体をぶら下げていたハーネスを取り外し、コックピットの中を宙返りした。ふわふわと、コックピットの窓に着地した彼女は、思わず置いてあったタバコの箱を掴んで、おもむろに一本取り出して火を着けた。

煙を思い切り吸い込んだ彼女は、満足そうに笑いだした。

「ユミ、どうした？」

センサーでモニターし続ける彼には、彼女の様子は常に筒抜けだった。

「ダニエル、とうとうやったぞ。硬い岩盤の貫通に成功した！」

無線機の向こうの彼は、暫くの間沈黙していた。

やがて、彼の方でもセンサーのデータを確認したのか、少しだけ感

情を込めた声が聞こえてきた。

「よくやった。ミッションクリアだ。すぐにクライアントに報告しておくよ」

ユミの返事が無いため、ダニエルは、聞いたかどうかわからなかった。

「ユミ？」

その彼女は、宇宙服のヘルメットを装着して、船外活動の準備を始めていた。ドリルジャンボの後部のハッチを通れば、月面に降り立つことが可能だった。

「ユミ！ 何をやっているー！」

「ちよつと、空いた穴の中を見てみるだけさ」

ユミの声は、既に宇宙服のヘルメットの内部に装着された無線機のマイクを通じて、ダニエルに届いていた。

「それは必要ない。俺たちの契約は、穴を貫通させるところまでだ。依頼人の意向に逆らうことになる。やめてくれ」

「ちよつとぐらいいいだろう。どうせわかりやしない。ちよつと下がどうなってるか、気になるんだよ。せつかく開けた穴だからな」

ダニエルの声は、悲痛さを伴っていた。

「やめるんだ、ユミ。危険だ」

ユミは、既に月面に降り立っていた。自ら開けた穴に、ドリルジャンボのシャフトが食い込んでいた。その隙間に、人が通れるくらい穴が開いていた。ユミは、ザイルをシャフトに括り付けると、宇宙服の金具にも通した。固定されたことを確認すると、おもむろに体を、穴に押し込んだ。

宇宙服のヘルメットのライトを点灯させると、ザイルを徐々に緩ませて、下へと降りていった。下を見ても、そこは果てしない暗闇が広がっていた。ヘルメットのライトの光量では、最下層まで照らすのは困難だった。

ユミは、シャフトの隙間を降りながら、目を輝かせていた。この下に、一体何があるのか？ この契約を結んだ時から、何が目的なのかずっと気になっていた。ささやかな好奇心を満たすべく、彼女はどん

どん下に降りて行った。

ヘルメットの無線機がひっきりなしにダニエルの警告の言葉が響いてた為、彼女は途中から音声を切った。

やがて、ドリルの先端が見えて来た。その下を覗くと、意外な光景が広がっていた。

どうやら、下は空洞になっているらしかった。ヘルメットの光は、空洞の内部を照らそうとしていたが、思ったよりも、中は広そうだった。

「ダニエル。こいつはヤバそうだ」

暗闇の中で、狂気じみた彼女の目が、ただ輝きを放っていた。

ダニエルは、月の裏側のユミとは遠く離れた月面都市のオフィスにいた。各種のセンサーで彼女の装備の状態をモニタリングし、適切なアドバイスをして、彼女の安全を守っていた。

そのユミが、自ら連絡を絶った事に彼は驚きを隠せなかった。さすがにそのような無茶をすると考えていなかった彼の焦燥は激しく、何から手をつけるべきか正常な判断が出来なくなっていた。

そんな状態で彼は各所に連絡を始めた。

最初に、月面都市のレスキュー隊に連絡をとって確認したところ、月面都市内の救急活動しか行っていない、という回答だった。そもそも、月の裏側まで部隊を派遣する装備を持っていなかった。彼は、通信に出た担当者を怒鳴りつけると、向こうが話している最中に通信を切断した。

一瞬、宇宙軍に助けを求めることも考えたが、あそこで採掘しようとしている物が何か、軍に説明する必要がある。そこで初めて冷静になったダニエルは、それは最後の手段、と頭の中で再確認した。

自身で移動手段があればよかったのだが、あいにく、そのような装備を買う予算がなかった。ユミをあそこに派遣する装備だけで、今期の会社の予算は使い切ったのだ。会社の経営を支援させているAIにも、輸送船のような高価なものを購入するなら、利益を今の五倍に上げる必要があるとアドバイスされていた。

経営者の立場では、AIの言うことに従わない理由は無い。時に、

迷惑に感じることもあるが、これが今時の会社経営のあり方だった。そうして、いくつかの思い付く連絡先にあたってみるが、中々良い答えは返って来ない。そこで、観光業者にもあたってみると、やつとこのことで月の裏側まで行ってくれるという奇特な業者を見つけた。

ダニエルは、特急料金を出すと云って、緊急で観光用宇宙船を飛ばすことに合意させた。

ダニエルは、取るものもとりにあえず、月面都市の道路や回廊を大急ぎで走り、宇宙港へ向かった。

そこでは、胡散臭い観光業者お抱えのパイロットの中年の男が待っていた。しかし、どういう訳か、すぐに船に乗せようとしなない。特急料金と言ったはずなのに、ダニエルは苛立った。

ふと、男のみすぼらしい服装を見て、これはチップを望んでいるのだな、ということに気が付いた。

仕方なく、このような場合に何時も持っている少額の紙幣を数枚握ませると、やつとのこと乗船を許可された。電子マネーで決済することが当たり前この時代でも、口座を持ってない貧しい者がいるのだ。

しばらくすると、ようやく観光業者の宇宙船は、宇宙港を飛び立った。一応観光船だったので、旅客席もあったが、ダニエルは副操縦士席に無理矢理座っていた。

観光船は、高度を上げると、小型のスラスターを噴射して、月の裏側へと真っ直ぐに進んだ。

「おい、月の裏なんて、何の用があるんだ」

パイロットの中年の男が、無遠慮に尋ねて来た。

ダニエルは、眉をひそめて言った。

「我が社は業務委託を受けて、資源採掘をしている。社員が連絡を絶ったので緊急事態の可能性がある」

「わざわざこんな辺ぴな所で、ご苦労なこつた」

男が納得したようなので、ダニエルは手に持っていた携帯端末を確認した。

相変わらず、ユミからの連絡がない。それに、ユミの居住コンテナ

にも、ドリルジャンボにも、生体反応が無い。ユミは、まだ船外活動をしているのは間違いない。しかし、残存酸素の量はそろそろ危険な状態になっていると推測される。

「急いでくれ」

「無理言うな。この船は遊覧船でロケットじゃない」

ダニエルは気ばかり焦っていたが、こればかりはどうしようもない。

月面の裏側でユミに行わせている掘削作業は、本当は業務委託などではなかった。ユミにも秘密にしていた為、これを知るのはダニエルだけだった。

ダニエルの会社は、十数年前に月面都市の大規模な再開発を受注し、その時から月に根付いていた。社員数こそ少ないが、外注の土木作業を請負う複数の企業と提携し、その中抜きをすることで利益を得てきた。昔勤めていた官公庁で培った人脈とコネが、独立して起業してから大いに役立っていた。そこで儲けた利益を元手に、自身のポケットマネーも投じて、月の裏側の掘削作業に勤しんでいた。

何故、誰も見向きもしない月の裏側の掘削作業などしていたかと言えば、あまり大きな声で言えない理由だった。

ダニエルには、子供の時から見てきた夢があった。言葉通りの意味の将来の夢では無く、文字通りの意味での夢だ。最初は、臆気ないメージでしか無く、見た夢も覚えていなかったが、繰り返し同じ夢を見た事で、徐々に内容がはっきりとしてきた。

大人になってからも、思い出したように、その夢を見た。そしていつしか、夢の中でこれは夢だと認識するようになった。その夢の中でダニエルは、月面である発見をしていた。途方もない発見だということとは分かるが、肝心な所がはっきりしない。

月面都市の再開発を受注した時に、彼は確信した。自分は月に来る運命だったのだと。そしてこれは天啓に違い無い。それから彼は、積極的にそのチャンスを狙おうとした。

そんな時に最近会社の面接で出会ったのがユミだった。少々言う事を聞かない所に問題はあったものの、根っからの好奇心と危険を顧

みない行動力は、彼の目的を達成するのに必要な要素だった。理由はそれだけで無く、彼女が自分と同じ貧民街で育ったということに、大いに親近感が湧いた。この時代の人間は、通常、人工子宮で誕生するものだったが、二人は違った。貧しい暮らしをする彼らの母親が、自分で妊娠して生まれた子供だったのだ。彼は、彼女との出会いにも、運命のようなものを感じていた。

彼は、会社の金だけで無く、この時の為に貯めていた金を、移動居住車両と、掘削用重機につき込み、彼女にそれを託したのだ。本当は、自身で行きたいと思っていたが、会社の経営もあり、自由気ままに旅に出る訳にはいかなかった。

こうして、数カ月を渡って、彼女には資源採掘の業務委託と偽って、夢で見た何処かの場所を捜索させた。そして遂に、夢とそっくりな、硬い岩盤に覆われた月の裏側の場所を発見したのである。

この発見に、ダニエルは狂喜したが、ユミに対しては、気付かれないうように、至って冷静に振る舞っていた。この数カ月、彼女とは通信だけの付き合いではあったものの、次第に気心も知れ、大切なパートナーと思うようになっていた。

今回の事で、よもや自分が、このように心配することになるとは思ってもみなかった。彼女は、自分の夢を実現する自身の一部のようなものになっていた。

彼女が掘り抜いたそこは、既にセンサーのデータによって、異常な状態であることが観測されていた。そして、非常に危険なのは確かだった。にもかかわらず、彼女は言うことを聞かず、その危険に飛び込んでしまった。ダニエルは、苛立ちと不安と心配とが入り混じった感情を抑えることが出来ず、自然と足がカタカタと床を踏みならすのを止められなかった。

しばらくすると、ようやく観光船は、上空からユミの居住コンテナを捉えた。移動居住車両のコンテナを展開して、月面に居住区画を設置したものだ。

そこから、月面にキヤタピラが残した跡が続いていた。掘削用重機を移動させた跡だろう。

ダニエルは、パイロットの男に、キャタピラの跡を追うように指示した。

ほんの少し離れた所に巨大なクレーターがあり、キャタピラの跡は、その中に続いていった。ダニエルは、観光船をクレーターの傍に下ろすように命じると、席を立って船外活動の準備を始めた。

ダニエルが、月面に降り立つと、観光船は勝手に飛び立って行った。ダニエルは憤慨したが、観光船は、通信にも応答せず、あつと言う間に見えなくなってしまった。

仕方なく、ともかくユミに急いで追いつくのが先だと、彼は歩みを早めた。

自分の酸素タンクは、まだ数時間もつが、ユミの方はもう殆ど残っていないはずだった。

ダニエルは、月の低重力を利用して大きく跳ねながら進み、クレーターの下へと飛び込んで行った。

クレーターの中を急いで進むと、途中で転んでしまった。そうして砂を舞い上げて転げ落ちながら、クレーターの最下層にやつとのことと辿り着いた。

砂だらけになったが、とにかく追いつこうと、懸命に立ち上がって先を急いだ。

やがて、掘削用重機のドリルジャンボの姿が見えると、急ぎ足でそこに向かった。ドリルジャンボは、月面に固定するため、キャタピラのある車両側面から固定用のアウトリガーが伸びて、地面に突き刺さっていた。

そして、車体からクレーンのように大きく付き出したコックピットは、地面に向けて下にぶら下がっていた。車体から伸びたコックピットの側面から、四本のアームのような油圧式のシャフトが伸び、地面に深く突き刺さっている。

そのシャフトの傍に近づくと、ちょうど人が通れる程の大きさの穴が空いている。四本のシャフトのうちの一本に、ロープが結ばれており、ユミがそこから穴の中に入ったのは明白だった。

「ユミ！ 応答してくれ」

彼は通信で呼びかけるが、応答は無かった。

意を決したダニエルは、ユミが使ったと思われるロープを、自身の宇宙服のフックに括り付けると、穴の中に降りて行った。

彼女の無事を祈りつつも、自身の長年の謎でもあったその場所に、彼は大いに期待を膨らませるのだった。

下まで降りると、そこは、空洞になっていた。宇宙帽のライトが下まで届かず、とても広い空間があるのが想像出来た。ゆっくりとロープを緩めて更に内部へと入ると、そこは何故か重力が逆さまに働いていた。空洞の中に入ったばかりの場所で、重力の均衡が取れているらしく、それ以上、下に降りることは出来なかった。

ダニエルは、穴の脇の天井に足を伸ばし、そこに足をついた。天井を踏みしめた彼は、恐る恐るロープを手放した。そして、ゆっくりと天井を歩き始めた。

「一体、どうなっているんだ？」

宇宙帽のライトで周囲を照らすと、そこは思ったより狭かった。せいぜい三十平方メートル程度の空間だった。その足元の四カ所に、ドリルジャンボがこじ開けた穴が空いていた。壁や地面は、滑らかで、まるで磨いたように表面がつるつるとしていた。上を見上げると、光の届かない漆黒の闇が広がっており、かなり天井が高いと思われた。

その空間の隅に、人が入れる程の窪みが三つあった。

「ユミー！」

その真ん中の窪みには、探していたユミが横たわっていた。その彼女が脱ぎ捨てた宇宙服が、すぐ傍に転がっている。ダニエルは、真っ青になってユミに駆け寄った。彼女の様子を見ると、胸が静かに上下していて、息をしているのが見て取れた。

「どういうことだ？」

ダニエルは、疑問の追求を後回しにして、彼女を揺り起こした。

「ユミ、ユミ！起きてくれ」

ユミは、うつすらと目を開いた。

「……ダニエル？」

「そうだ。俺だ」

ユミは、ゆっくりと体を起こすと、両腕を持ち上げて、大きく伸びをした。

「なんで起こすんだよ。いいところだったのに」
彼女は悪態をついた。

「何を言っている？」

ユミは、おもむろにダニエルの宇宙帽を掴むと、無理矢理外そうとし始めた。

「おいばか、やめろ！」

「ばかとは失礼な。大丈夫だ。ちゃんと呼吸出来る」

そう言いながら、結局、無理矢理宇宙帽は取り外されてしまった。

ダニエルは、焦って呼吸を止めたが、ユミがにやにやして、彼を見ているので、仕方なく深呼吸することにした。

「確かに呼吸は出来るようだ。だが、この空気の成分にもどんな危険があるかわからないというのに、君という奴は……！」

ユミは、大笑いを始めた。

「な、何が可笑しい」

彼女は、しばらく笑い転げていたが、やっと真面目な顔をして言った。

「あのさあ。あたしの宇宙服の酸素残量は、もう殆ど無い。ここで呼吸出来なきや、とつくに死んでる」

ダニエルは、大きいため息をついた。

「全く、君って奴は」

「いい女だろ？」

「そういう話はしていない」

「さては、あたしのことが心配だったんだろう？」

「従業員の心配をするのは、当然のことだ」

「ふうん。あつそ」

ユミは、突然立ち上がると、ダニエルの腕を掴んで目を輝かせた。

「ダニエル、ここに寝てみる！」

ダニエルは、ユミが寝ていた窪みを凝視した。

「どうして」

「寝てみりゃ、わかるさ」

ユミは、ダニエルの腕を強く引いて、窪みへと誘った。

彼は、渋々と、そして恐る恐るそこに横たわった。

すると、脳裏に何か薄っすらと見えてきた。

「これは……何だ？」

それは、白昼夢を見ているようだった。

ダニエルは、異国の地でサムライになっていた。かと思えば、未来の宇宙の何処かで、懸命に何かの作業を行っていた。

見えたものは、はつきりとはしていないが、何か尋常では無いものが垣間見えたのは間違いが無い。

驚いたダニエルは、慌てて立ち上がって、窪みから離れた。すると、白昼夢もあつさり見えなくなった。

「ユミ！」

そのユミは、突然彼に顔を寄せると、目を見開いて狂喜じみた表情で見つめた。

「お前も、見えたんだな？」

「あれは一体何なんだ？」

「わからない。だけど、面白いだろ？」

ユミは、子供のような期待に満ちた表情になっていた。

ダニエルは、そんなユミを無視して、頭の中を整理した。

ここは、小さな頃から夢で見た場所だ。何かに導かれるように、彼はここへやってきた。そして、何か重大な発見をした、ということまでは、夢で何度も見て来たことだった。

既に、センサーによつて、重力異常などのデータを収集していた。それと、先程見えた何か。あれが恐らく、ここで発見すべき何かだったのだろう、とダニエルは考えた。

「君は、今まで何を見たんだ？」

彼は、先行して、それを体験した彼女に尋ねた。

「あらゆる人の人生を体験した。それから、未来で人類がゆつくりと滅んでいくのを見た」

それを聞いたダニエルは考えた。

「なるほど。確かにそんなようなものを、俺も見た気がする」

彼は、宇宙服の腰につけた端末を取り出すと、センサーで内部をもっと詳しく調べてみることにした。

しばらく端末を弄っていたが、大したことはわからなかった。逆さまに働く重力は、人工的な装置によるものか、壁面や床を調べてみたが、特に何も見つからなかった。また、窪みの中に端末を近付けると、画面の表示が正常に行われなくなった。しばらく調査を続けると、どうやら、時間の進み方に異常があるのがわかった。

しかし、これ以上は、今の機材では十分な調査が行えるとは思えなかった。万全の準備をしてここに戻り、徹底的に調べる必要がある。そんなダニエルに、ユミが言った。

「なあ、ダニエル。あたしたちがここに来たのには、何か意味があるのかも」

そう言われて、ダニエルは、調査の手を止めた。そして、背後に立っているユミにそつと言った。

「確かにそうかも知れない。実は、君に黙っていたことがある」

ダニエルは、小さな頃から見ていた夢と、今回の調査の件をユミに打ち明けた。

それを聞いたユミは、暗い天井を見上げて何か考えているようだった。

「ここで寝てみて、いろんな人の人生を見て来た。そこで、ある人に頼まれたんだ。『人類を救って欲しい』って」

ダニエルは、その話に目を丸くした。

「誰に？」

「よくわからない。でも、あたしは、未来で人類が緩慢な死を迎える様子を見た。あたしたちが、今この場所で、何かすることで、人類を救えるのかも知れない」

「どうやって？」

ユミは、にやりと笑った。

「人の人生にほんの少し干渉出来るみたい。少し試してみたんだ」

ダニエルは、彼女の無鉄砲さに呆れた。それでも、何が起こったの

か、聞かすにはいらなかった。

「それで？」

ユミは、得意げに頷いた。

「その人の人生の流れが変化した。これって、未来をあたしたちが変えられるってことでしょ？」

ダニエルは、そんなことが可能なのか大いに疑問を持った。

「さて。ここで見たものは、本当にただの夢なのかも知れない。誇大妄想だよ、そんなもの。それに、そんな未来の人類が減ぶとか、俺たちがここで暮らすのに何の関係も無いじゃないか」

ユミは、いたずらっ子のような顔で、ダニエルに顔を寄せた。

「ふうん。それなのに、あんたはここまでやって来た。それは、ここで何か凄い事が起こるんじゃないか、と夢見て来たからじゃないの？」

「お、俺は、ここで何か金儲けできる何かを見つけると思ってた……」

ユミの瞳は、疑いに満ちていた。

「それ、嘘っぽい。そうは、見えないな」

そう言われて、ダニエルは何も言えなくなった。

確かにその通りだ。

彼は、ここで何か大切なことを成し遂げるのではないかと、長い間夢見て来たのだ。

子供の頃から、ずっと。

その大切だけど何かよくわからないものに、私財も投げ売ってきた。

そうやって、長いこと考えてきたことを、どうしてこの娘は、いとも簡単に受け入れているのだろうか？

ダニエルは、何だか無性に笑いたくなくなった。

彼は、にやりと笑ってユミを見つめた。

「わかった。面白そうだ。俺も試してみよう」

「そう来なくっちゃー！」

ダニエルは、ユミと同じように、宇宙服を脱ぎ捨て、端の窪みに横たわった。何故か、寒さも感じず、温度は快適だった。真ん中の窪みには、再びユミが横たわる。

二人は、どちらからともなく、手を伸ばした。そして互いの手を絡み合わせた。

「じゃあ、行こうか」

ユミの微笑にダニエルも笑顔で返した。

「行こう」

続く…

遙か彼方の永劫を超えて5 江戸の大火

龍之介は、恐ろしい夢から目覚めた。

身体中から、酷い寝汗をかいていた。龍之介は体を起こすと、土間で朝食を作っているおよねの元に近付いた。

「兄様、まだ寝てていいのに」

「ん？ ああ、いいんだ。何だか、酷い夢を見ちまってな」

およねは、につこりと笑って龍之介に言った。

「兄様の朝食も用意しますね。少し待っていて」

龍之介は、沢庵を口に放り込んでぼりぼりと食べていた。向かいに座るおよねが、龍之介に話しかけた。

「兄様、今日は大黒屋さんに夕刻から行く予定でしょ。食べたなら、もうひと眠りしてね」

龍之介は、驚いて沢庵を噛み砕くのを止めた。

「何だって？」

およねは、箸を進める手を止めて、不思議そうに兄を見つめた。

「だから、今日から用心棒のお仕事でしょう？」

驚愕した龍之介は、思わずおよねに何か言おうとした。

「だ、だってな。大黒屋は……」

「呉服問屋ですってね。綺麗な着物の生地が沢山あるんですってね。私も、今度行ってもいいですか？」

龍之介は、口の中の沢庵をごくりと飲み込んだ。

「あ、ああ」

龍之介は、大黒屋に向かうにはまだ早い時間だったが、出掛けることにしていた。

「およね。じゃあ、行ってくるぞ」

およねは、傘張りの仕事を続けながら、出掛けようとする彼に声をかけた。

「兄様、期待してるよ。頑張ってね」

およねの笑顔に見送られ、龍之介は、本郷の町を歩き始めた。まだ午前中だというのに、太陽は高く、日差しが強かった。龍之介は、手

で目を避けるようにかざしたが、あつという間に、汗が吹き出した。手拭いで汗を拭いながら、彼は大黒屋へと歩みを早めた。

龍之介は、道中考えを整理しようとしていた。

大黒屋に賊が入った上、放火で焼失したことは、どうやら夢だったらしい。

それにしても――。

龍之介は、その夢を振り返った。

あまりにも現実的だった。

およねのあの様子からすれば、彼の方が夢と現実を混同しているのは間違い無さそうである。龍之介は、本当に大黒屋が存在しているか確かめたくて、居ても立っても居られず、長屋を飛び出して来たのだ。そうこうしているうちに、ちょうど昼頃には、大黒屋の前に着いていた。

龍之介は、あ然と大黒屋を見つめた。店は、そこに存在し、何も変わった様子は無かった。

やはり、夢だったか。

龍之介は、苦笑して、その場を立ち去ろうとした。まだ大黒屋に入るには、早い時間だったので、その辺の蕎麦屋で酒でも呑んで、時間を潰そうと思っていた。

すると、大黒屋の番頭が店先に現れた。まだ顔を合わせたことの無いはずの番頭の顔を、龍之介は良く知っていた。

不思議に思っつてその男の姿を見ていると、後ろからあの、お房が姿を見せたのだ。龍之介は驚いて、慌てて向かいの店先に姿を隠した。夢で見た彼女は、龍之介の顔を知っていたからだ。龍之介は、お房の顔を軒先から良く見てみた。夢で見た彼女に間違いなかった。だが、龍之介は、彼女の顔を知らないはずだった。

彼女は、何処かに出掛けようとしているようだった。恐らく、お使いを頼まれたのであろう。

お房が、番頭の男にお辞儀をして、何処かへと歩きだしたので、こっそりと後をつけることにした。

お房はゆつくりとした足取りで、本郷の町を後にし、浅草の方へ足

を進めていた。

距離をとつて後をつけた龍之介は、考えずにいられなかった。

あの夢は正夢に違いない、と。

番頭やお房の顔は、大黒屋に初めて訪れた時は、彼は知らなかったはずだった。大黒屋の主人だけにしか、彼はまだ会っていないからだ。にもかかわらず、彼らは、夢で見たそのままの顔だった。

後をつけること、四半刻程経つただろうか。お房は、上野の不忍池の近くまで来ていた。

お房は、池の近くの茶屋でひと休みしようとしていたので、龍之介は、別の茶屋に足を踏み入れて、少し離れた場所から彼女の様子を窺った。

お房が茶を飲んでいる様子を観察していると、龍之介にも茶が運ばれて来た。仕方なく龍之介は、団子を一串注文した。懐のなけなしの金を払うと、彼は運ばれて来た団子をほお張った。

そうしていると、向かいの茶屋に、龍之介も見たことのある連中が現れた。大黒屋で借金取りに来ていた男たちだった。だが、その男たちにも、龍之介はまだ会っていないはずだった。

男たちは、お房に何か合図をすると、不忍池の方へ向かった。後から少し遅れて立ち上がったお房が、彼らの方へと歩いて行つたので、龍之介は、慌てて団子を全てほお張った。

龍之介が後をつけて行くと、彼らとお房は、池の畔で何か話し合っていた。龍之介は、雑草に身を隠して彼らの会話を聞こうと近付いた。

「今日、用心棒の男が、店にやって来る。どんな男かは私も知らぬ。お前たちには、奴の実力を確認して貰いたい」

お房は、男たちに命令をしていた。

「へい。そいつが来る頃に、借金取りに向かいやす。適当に難癖をつけて、奴に襲いかかってみやす」

「姐さん、俺たちが、その場で使い物にならなくしてやりやすよ」

お房は、厳しい表情で、男たちを諭した。

「馬鹿を言うんじゃない。用心棒を請け負うということは、それなり

の手練のはずだ。実力がわかれば充分だ」

男たちは、お房に頭を下げている。

龍之介は、その様子を見て、確信した。

そうか。あれは、正夢だ。

ならば、お房らは盗賊の一味ということ間違いが無い。彼らの計画を、どうにか阻止しなければ、夢で見た悲劇が現実になってしまうのだ。

しばらくすると、男たちは、不忍池を去って行った。お房は、一人その場に佇んでいる。

龍之介は思案した。彼女をどうすべきか。たった今、彼女の本当の姿を見た後でも、どうしても合点がいかなかった。彼女が本当に悪党なのかどうか。

お房は、不忍池に石を放っていた。鴨たちが、放られた石を避ける為、ばたばたと暴れていたが、すぐに別の場所に、落ち着いて再び池に浮いていた。

龍之介は、そつと彼女に距離を置いて、静かに不忍池から立ち去った。

大黒屋に向かうにはまだ早い時間だったが、龍之介は店に入り、主人に挨拶をした。

「これは、これは勝野殿。良く来てくれました。今夜から、お世話になりますから、よろしくお願いしますね」

龍之介は、挨拶もそこそこに、主人に言わなければならなかった。

「ところで、旦那。借金取りに困ってるんだよな？」

大黒屋の主人は驚いていた。

「どうしてそれを？」

龍之介は、照れたように笑った。

「ま、まあ、下調べをさせてもらったんだ」

主人は、感心した様子で頷いた。

「なるほど、そうでしたか。さすがは勝野殿」

龍之介は、一つ試してみることにした。大黒屋の主人に顔を寄せ、耳打ちした。

「え？ どうして、そんな嘘を？」

「まあ、やってみてくれ。近くで見てるから、危なくなれば、助けに入るからよ」

「わ、わかりました。そんなことでいいのなら」

半信半疑の大黒屋の主人を置いて、龍之介は店を出ていった。

やがて、借金取りの男衆が、大黒屋を訪れて、ひとしきりくだを巻き始めた。

「おうおう、今すぐ借金を返しな。うちの親分がもう待てないって言ってるんだ」

大黒屋の主人は、ひれ伏して彼らに話しかけた。

「月末には返せますから、今日は、どうぞお引き取りを」

男たちは主人に凄んでみせた。

「親分の気が変わったんだよ。今すぐ、耳を揃えて返しやがれ」

大黒屋の主人は、そこで打ち合わせた通りに言った。

「ああ、こんなことなら、用心棒に今日から来て貰えばよかった」

男衆は、その一言を聞き逃さなかった。

「んだと。おい、用心棒を雇ったのか」

「あ、明日から来ることに……」

男たちは、それを聞いて、店の土間で集まって何やら話を始めた。

「話が違うな。どうする？」

「奴がないんじや、意味ねえな」

「じゃあ、引き上げるか」

男たちは、先程までの様子と打って変わって、急に勢いが無くなった。

「仕方ねえ。おい、大黒屋。明日、また来るからな」

そう言い残した男たちは、店を出ていった。

呆気にとられた大黒屋の主人は、彼らの後ろ姿を目で追った。

「勝野殿に言われた通りにしたただけなんだが……何故だ？」

龍之介は、店の影に隠れて、男たちが出て行くのを見守った。夢で見た通りなら、そろそろお房が店に戻るはずだ。

龍之介が見守る中、そのお房が、お使いから戻って来た。

店に入ったお房は、まだいるはずの男たちがいないことに少し驚いていた。

大黒屋の主人は、事も無げに、お房に声をかけてきた。

「お房かい。お帰り」

「は、はい。ただいま戻りました」

お房は、きよろきよろと辺りを見回した。

「俺をお探しかい」

振り返ったお房は、店先に立っている龍之介の姿を確認して、はつと驚いていた。

真つ青になった彼女は、主人に具合が悪いと言うと、店の奥に早足で逃げ込んだ。

その様子を見た龍之介は、違和感を感じた。暫し考えた彼は、一つの結論に達した。彼女も同じ夢を見て、これから起こることを知っているのではないかと。

その夜、龍之介は大黒屋で夕食のご相伴に預かっていた。給仕をするお房の様子を眺めつつ、出来るだけ彼女には敢えて接触しなかった。彼女も、龍之介には接触して来なかったので、彼はしばらく様子を見ることにした。

しかし、ちらちらと視線を感じていたので、彼女が龍之介を意識しているのは間違い無さそうだった。

龍之介は、大黒屋の主人や番頭と談笑しながら、いつもより少しだけ豪勢な食事を楽しんでいた。そして、主人に酒をすすめられたが、今夜からの寝ずの番があるからとそれを丁重に断った。

早目に食事を切り上げた龍之介は、与えられた客室に行こうと廊下を歩いて行くと、お勝手の近くを通りかかった。そこでは、主人の家族や番頭たちとは別に、八名程の丁稚奉公らが遅い食事をとっているところだった。

そこには、彼らと一緒に食事をするお房の姿もあった。そのほとんどが女子ばかりで、楽しそうに他の丁稚らと食事をする様子を見た龍之介は、このまま通り過ぎるのも何だと思い、軽く挨拶を試みることにした。

「今日から用心棒として世話になる、勝野龍之介と申す。皆、よろしくな」

龍之介は笑顔を彼らに向けた。

「用心棒つてもっと怖い人かと思つてたよ。随分若いじゃないか。旦那は本当にお強いのかい？」

中でも年長の女が龍之介に軽口を叩いてきたので、龍之介も軽く返した。

「おう。あたぼうよ。若いって言つてくれて嬉しいが、俺ももう三十路だ。何か困つた事があつたら言つてくれ。力になるぞ。ああ、でも金は持つてねえから、そういうのは番頭さんとかに相談してくれ」

女たちの甲高い笑い声が響く。

「あんたも、今日からここの使用人だろう？ 明日はこつちで、一緒に食べないかい？」

「ここは、おなごばかりじゃねえか。俺みてえなむさ苦しいのが一緒でもいいのかい？」

年長の女は大きく頷いた。

「構わないよ。皆もいいだろう？」

女たちが、楽しそうに了承の返事をしているのをみて、龍之介は気を良くした。

「じゃあ、明日の朝飯は、こつちでご相伴に預かるか。よろしくな」

笑顔で立ち去る龍之介に、女たちは口々に待ってるよ、などと言つていた。しかし、龍之介は、お房が目を合わせずに無表情になつているのを見逃さなかつた。

その夜、龍之介は、皆が寝静まつた後、寝ずの番をしていた。時折、廁に行くついでに、庭の様子を確認したりしたが、特に異常はなかつた。

念の為と、丁稚奉公らが眠る部屋もそつと覗いて見たが、肝心のお房はぐっすりと寝ているようだった。

そのお房はと言うと、心中穏やかでは無く、中々眠りにつけずにいた。龍之介が、深夜に自分たちの部屋を覗いている時も起きていて、寝たふりをして誤魔化していたのだ。

何故、あの男がいる？

お房は、龍之介の存在に怯えていた。

お房は、昨日の夜、悪夢を見たのだった。

彼の意識を奪い、仲間を店に引き入れて、店の者たちを惨殺して火を放った。そしてその後、激しい後悔に苛まれ、橋から川に身を投げたのだ。

夢はそこで覚め、彼女は大いに泣いた。周りの丁稚奉公の仲間たちが心配する中、涙が枯れるまで泣いた。理由を尋ねられたが、言えるはずもなかった。

何せ、これから予定している計画通りの出来事なのだから。

気を取り直したお房は、計画を進めようとしていたが、夕刻になって現れた用心棒が、龍之介その人だったのを見て、愕然とした。

あれは、正夢だったのか――？

お房の震えは止まらなかった。

あのような後悔をするのも、正夢だとしたら。

自ら命を絶つのも正夢だとしたら。

お房は、眠れない夜を過ごし、そのまま朝を迎えた。

昨夜の話の通り、龍之介は、朝食を丁稚奉公ら使用人たちと一緒に食べた。女たちにちやほやされた龍之介は、少々鼻の下を伸ばしていたが、お房の様子だけは、注意を払っていた。何やら、彼女は、魂が抜けたような虚ろな表情をしていた。

このままにしておけぬと考えた龍之介は、お房と対峙することに決めた。

龍之介は、食事の後片付けを終えたお房を呼び止め、裏庭に誘った。彼女は、酷く怯えた様子を見せていたので、同じ夢を見たのに違いなと思う彼の確信は、更に強まった。

「な、何かご用でしょうか？」

龍之介は、お房の問いに答えず、裏庭で立ったまま、お房に背を向けていた。

何と云うべきか思案していた龍之介は、決意を固めて言った。

「漬物石ってなあ、女の力でも持てるもんなのか？」

龍之介の言わんとしていることに気づいたお房は、次第に身体が震え出した。

龍之介は、振り返ってお房の様子を確かめた。酷く焦燥しきった様子から彼は更に追い打ちをかけるべく次の言葉を探した。

「おなごでも持てる軽いのもありますので。お話が、それだけでしたら、仕事がありますので」

逃げようとするお房に、龍之介は言った。

「まあ、待ちな。俺は、お前さんの正体を知っている。そいつを、大黒屋のご主人に言いつけてもいいんだぜ」

その一言で、お房は怯えた様子から一転、逆に冷静になり始めていた。

「何を仰っているのか、わかりかねますが」

「ならば、俺の話を聞け」

龍之介は、彼女が逃げられないように、彼女の周りをゆっくりと歩き始めた。

「お前さんは、盗賊の一味だ。引き込み役を果たす為、この店に丁稚奉公として入り込み、店の者たちの信用を得ようとしている。そして、今日から三日後、おつとめを決行する。邪魔な俺は、不意をつけて、厠で用を足している最中に、漬物石で殴って意識を奪うことになる」

お房は、青くなって龍之介が、自分と同じ夢を見たことを悟った。お房は、龍之介に何か言い返そうとしたが、あの悪夢が正夢であることとの確信が増し、どうしても言葉が口から出なかった。

「俺はな、ひとつだけ、わからねえことがあるんだ」

龍之介が、更に続けた。

「俺が意識を失った後、お前さんは、俺を殺すことも出来た。それに、俺を盗賊仲間につき出して、殺させる事だっただけ出来たはずだ。何故、そうしなかったのか。俺は、それが知りてえんだ」

龍之介は、お房に近付いて、彼女の表情を窺った。彼女は、冷静さを保ちながらも、言われた内容に動揺を隠しているように見て取れた。

「俺が思うに、お前さんは、本当は盗賊の手伝いなど望んでいないん

じゃないか？ だから、俺を殺すのにも躊躇した。本当は、殺生など望んでいないと俺は見たんだが、どうだい？ 当たってるんじゃないか？」

お房は、凶星をつかれて、つい、龍之介の顔を見てしまった。

「俺は、これからお前さんを奉行所に突き出して、盗賊仲間の居場所を連中に伝えりやあ、それでひと仕事終わりに出来る。だが、俺はただの浪人で、岡っ引きじゃねえ。お前が悪人じゃねえってことがわかれば、別の方法を考えるだろうよ。何と言っても、妹のおよねが悲しむのは見たくねえからな」

そこまで言って、龍之介は口をつぐんだ。後は、彼女が考えることなのだ。

お房は、震える声で言った。

「およねちゃんは、元気？」

龍之介は、お房の寂しげな顔を見て、少し口元を緩めた。

「ああ。元気だ。年頃だったのに、毎日文句も言わず、大した儲けにもならねえ傘張りに精を出してるぜ」

お房は、微笑して一歩前に進み、龍之介に背を向けた。

空を見上げたお房は、やっと本当のことを話そうと決意した。

「私は、およねちゃんと仲良くなって、初めて他人を大切にする気持ちがわかったんです。そうしたら、盗みや殺生が何をもちたらずのか、初めて恐ろしさを理解出来ました。彼女がいなければ、私は、今もそれを知らないままだったでしょう」

振り返ったお房は、瞳に涙を浮かべていた。

「私は、盗賊の一家に生まれました。父も母も盗人で、私は、彼らの仲間や、親戚に育てられ、両親の愛情など知らずに育ちました。私が大きくなると、両親は私を呼び寄せ、一緒に暮らすようになりました。私は、それが嬉しくて、両親に愛されようと、言われるがままに、盗賊としての教育や、訓練を受けるようになりました。そうやって、前に丁稚奉公で入った店で、最初のおつとめをしました。非情になりきれなかった私は、およねちゃんを逃し、その後、仲間が畜生にも劣る殺生を働くのを見て恐れをなし、私は最後まで仕事をする事が出来

ませんでした。私は、反省をして、今度こそ非情に成り切ろうと心に決めて、ここへやって来ました」

お房は、下を向いて、苦しそうな声で言った。

「ばれてしまったからには仕方ありません。奉行所に突き出すなりして下さって結構です」

龍之介は、お房の肩を叩いた。

「俺が聞いているのは、お前さんが悪党かどうかだよ。後悔してんだろう？ 今までのことをな」

お房は、小さく頷いた。

龍之介は、しばらくどうすべきか悩んだ。

彼女が本当のことを喋っているかどうか、確信した訳ではない。

ならば、それを確認するしかないだろう。

「夕べは、お前さんも、あんまり寝てないみてえだが。お互い様だな。ちよいと一緒に来てくれ。大黒屋の旦那には、俺が話す」

龍之介は、お房を連れて、大黒屋を出掛けて行った。

妹の友人だとわかったので、妹に会わせたいと大黒屋の主人には説明した。すぐ戻ると言い残して、二人は、急ぎ龍之介の長屋へと向かった。

龍之介とお房は、暑い中、龍之介の長屋に向かって歩いていった。龍之介は、手拭いで汗を拭いて、暑そうにしている。

「こりゃあ、今日も暑くなりそうだな」

当初、どこに連れて行く気が疑っていたお房は、本当に龍之介の自宅に向かっているのだと気が付いた。お房は、龍之介が何を考えているか、わからなかった。ただのお人好しなのか、それとも――。

しばらくすると、ようやく、龍之介の住む長屋に着いた。龍之介は、お房について来るように促しながら、自宅の戸を開けた。

「およね！ 俺だ。今帰ったぞ」

龍之介は、大きな声で、家の奥に声をかけた。奥で傘張りの作業を行っていたおよねは、今日は戻らぬはずの兄がいるのに驚いていた。

「兄様、一体どうしましたか？」

およねは、立ち上がって入口の方を見て、そこにいる人物を見て、

持っていた傘を取り落した。

「そ、そこにいるのは、もしかや……」

龍之介の後ろには、お房が立っていた。

「およねちゃん。ご無沙汰だね」

お房は、気恥ずかしそうに龍之介の後ろで小さくなっていた。

「お房さん！」

およねは、勢い良く入口に走り寄った。

「ああ、本当にお房さんなのね。もう、会えないのかと思っていたのに」

龍之介は、後ろに隠れているお房と、妹に話しかけた。

「およね。お房さんはな、大黒屋で丁稚奉公をしていたんだ。お前に会わせたいと思って連れて来た。お房さんも、そんな所に隠れていないで、およねの近くに寄ってやってくれ」

龍之介は、お房の背を押して、およねの前に近寄らせた。およねは、お房の手を取ると、大粒の涙を流した。

「よかった。生きていたのね。あれからずっと、心配してたの」

お房も、感極まっておよねの手を握った。

「ごめんね。心配かけて。およねちゃんも、元気そうで良かった。私も、ずっとどうしているか、気にしてたんだけど」

二人は、互いの手を握り締めて、どれだけ心配していたかを話し合っていた。

龍之介も、これには少し感極まっていた。

「二人とも、良かったな。俺も、連れて来た甲斐があつたつてもんだ」
龍之介は、二人の様子を見て、大黒屋で聞いた告白は、嘘を言っているのでは無いと確信した。

「悪い人に狙われている？」

龍之介の家の中で、三人は膝を突き合わせて座って話をしていた。およねは、龍之介の話に驚いていた。

龍之介は、およねに向かって頷いた。

「そうなんだ。大黒屋は、借金取りがやって来て、商いを妨害している。その上、お房さんを借金の形として、連れて行こうと狙っている

んだ」

「まあ、何て酷い」

その話を聞いたおよねは、憤慨していた。

お房は、二人の会話を、黙って見守っていた。龍之介が、何故このような嘘を言っているのか、計り兼ねた。確かに、そのような芝居を借金取りの男衆にやらせて、油断させようとしていたのは事実だった。

「それでな、今日の所は俺もお房さんも大黒屋に戻るが、雲行きが怪しくなったら、うちで匿ってやりてえんだが、いいか？」

およねは、心配そうな表情で、大きく頷いた。

「もちろんですよ。お房さんがそんな目に合っているのなら、私も心配ですから」

龍之介は、あ然とした表情でお房が自分の方を見ていたので、背を叩いた。

「良かったな。やばそうなら、ここで隠れているといい。大黒屋の旦那には、俺から話してやるから」

お房は、龍之介が目配せしているのに気付き、生返事をした。

「あ、ありがとうございます。およねちゃんにも迷惑かけてしまうけど」

「気にしないで。命の恩人のあなたには、いつか恩返しをしたいと思っていたから」

龍之介は膝を叩いた。

「よし、決まったな。じゃあ、俺たちは、一度大黒屋に戻るから、お房さんを匿うことになったら、よろしく頼む」

「任せて、兄様」

龍之介は立ち上がった、お房にも促した。

「じゃあ、そろそろ大黒屋に戻るぞ」

「兄様、お房さんも、気を付けてね」

こうして、龍之介とお房は、彼の長屋を後にした。お房は、長屋から少し離れた所で、龍之介に聞いた。

「どうして、あのようなことを？」

「大黒屋の襲撃当日、火盗改に通報して、盗賊一味を捕まえてもらおうようにする。お前さんは、引き込みを止めて、ここで隠れていけばいい。だが、お前さんの両親も捕まることになる。それでもいいかい？」

お房は、心底驚いていた。

「何故、そこまでしてくれるんです？ 私は、両親のことは、罪を償うべきだと思っています。たとえば、極刑に科せられるとしても……。でも、私も自分のしたことが許されるとは思っていません。私も、両親と一緒に奉行所に突き出してもらっていいんですよ」

龍之介は、照れくさそうに、頭をかいた。

「俺はな。妹のおよねを悲しませたくねえんだよ。妹の命を救ってくれた恩もある。それに、俺はどうしても、お前さんが悪党だと思えねえんだよ。本当はやりたくもねえことを、無理矢理やらされただけじゃねえか。俺は、何とか助けてやりてえんだよ」

お房は、そんな龍之介の様子を見て、彼は本当のお人好しだと思った。同時に、本当に優しい人なのだ知った。

二人は、急ぎ足で大黒屋に向かって歩みを進めた。

それから、三日後。

大黒屋襲撃の当日の夜を迎えていた。

龍之介は、既にお房を自分の長屋に避難させていた。

火盗改への通報も既に済まし、龍之介は、大黒屋の人々が寝静まった深夜に、一人裏庭で待機していた。

「お月さんが、綺麗じゃねえか。今宵は、いい夜だ」

龍之介は、夜空を見上げて、星の位置を確認すると、時間になったことを悟った。

「頃合いだ」

龍之介は、裏庭の木戸に近付くと、扉を開けて外に出た。

そこには、既に三十名程の盗賊たちが待ち構えていた。お房が裏木戸を開けるのを、待っていたのであろう。

「な、なんだ、てめえは」

龍之介は、左手に持った刀の鞘から、ゆっくりと右手で刀を抜いた。「俺か。俺は、大黒屋の用心棒よ」

「お房の奴がしくじったな？」

盗賊の頭と思われる男が、吐き捨てるように言った。龍之介は、その男の方を見て言った。

「違うな。おめえらがしくじったんだよ」

龍之介は、刀を構えた。

「お前たち！ こいつを始末して、大黒屋に入るぞ」

しかし、盗賊たちの背後から、三方の通りを塞ぐように、多数の提灯が見えた。その提灯には「火盗」と書かれていた。

「火付盗賊改方である。神妙に縛に付け！」

盗賊たちは、騒然となった。

「おい、火盗改だぞ！」

「馬鹿な！」

盗賊たちは、逃げようとばらばらに右往左往し始め、火盗改との斬り合いが始まった。

火盗改の同心たちは、盗賊らと死闘を演じ、次々に斬り倒していった。抵抗しない者は捕縛し、刃を向ける者は、容赦無く斬って捨てた。混乱の中、盗賊の頭と、三人の男たちが、包囲を突破して逃げて行くのが見えた。

「待て！」

龍之介は、男たちを追跡して、背後から一人を斬り倒した。うめき声を聞いた、盗賊の頭と残りの男たち二人は、振り返って龍之介に向かって刀を構えた。

彼らは、暫し刀を構えて睨み合った。

「お前え、用心棒か！ 姐さんをどうしたんだ」

姐さんと聞いた龍之介は、お房のことを言っているのだとすぐにはわかった。

「安全な所で匿っているぜ」

「貴様、お房を拐かしたんだな？」

盗賊の頭が、憎々しげに龍之介に言った。

「拐かしたとは、人聞きが悪いな。同意の上のことだ」
すると、その中の一人の男が、前に進み出た。

「お頭！　ここは、あつしが引き受けやす。逃げて下せい！」

龍之介は、その男が、借金取りの中でも、兄貴と呼ばれた男だったのに気が付いた。

「すまん！」

盗賊の頭と、残った一人が、その場を後退りながら、振り返って一目散に走り出した。

「あ、待ちやがれ！」

「おめえの相手は、この俺だ」

その男は、正面から龍之介に刀を打ち込んで来た。

龍之介は、縦に振り回された刀を、少し身体を横に移動して避けた。そして、自らの刀を上段から鋭く振り下ろし、男の両腕を手首から斬り落とした。

男の両手と持っていた刀が地面に転がると、男は酷い悲鳴を上げて、地面を転げ回った。

龍之介が男に気を取られている間に、盗賊の頭と、もう一人の男の姿は、何処にも見えなくなっていた。

龍之介は、ほっとして、背後を振り返った。夢で見た大黒屋の悲劇は、どうやら回避出来たらしい。しかし、火盜改と盗賊たちの騒ぎは、まだ収まっていなかった。

ふと、龍之介は背筋に悪寒が走り、嫌な予感がした。血相を変えた龍之介は、一路、自宅のある長屋の方へと走って行った。

大急ぎで走って長屋の近くまで戻った龍之介は、信じられないものを目撃した。

長屋から、激しく炎が吹き出し、燃えていたのだ。

真夜中だというのに、辺りは炎の灯りで明るく照らされていた。

慌てた龍之介は、長屋へと真っ直ぐに駆け付けた。火が出て間もないようで、まだ火消しの姿は現れていなかった。しかし、何処かで火災を知らせる鐘の音が鳴っている。

龍之介は、長屋の近くを走りながら、隣家にも大声で叫んだ。

「火事だ！　皆、起きろ！　早く逃げろ！」

龍之介は、やっとのことで、自宅の前まで来たが、激しい炎で、近

付くことが出来なかった。

「およね！ お房！ ああ、なんてこった！」

自分の住まいは、内部が激しく燃えており、妹とお房の安否はわからなかった。

龍之介は、膝をついて、頭を抱えた。

盗賊の頭を逃したせいだと、彼はすぐに気が付いた。恐らく、用心棒として大黒屋に入った龍之介は、身边を調べられていたのだろう。この火災が、彼に対する復讐であろうことは、容易に想像が出来た。

「大黒屋を守ったのはいいが、これじゃあ、あんまりじゃねえか」

龍之介は、涙を流して、呆然と火災を見つめた。

そんな彼に、背後から声が掛けられた。

「兄様！」

驚いた龍之介は、狂喜してその声の方へと、地面を転げながら向かった。

「およね！」

およねは、向かい側の家の軒下にいた。

龍之介は、彼女を強く抱きしめると、安堵の息を吐き出した。

「良かった……！ 無事で」

およねは、龍之介に笑顔を向けた。

「お房さんが火事に気がついて、寝ていた私を起こしてくれたんです」

龍之介が、およねの横を見ると、確かにお房の姿があった。

「お房さんも無事だったか。本当に良かった」

お房は、龍之介を心配そうに見つめた。

「私たちは、大丈夫です。でも、お家が……」

龍之介は、炎を上げる長屋を振り返った。

「なあに。生きてさえいりゃあ、何とかなるさ」

だが――。

龍之介は、逃げた盗賊の頭のことを考えた。

彼が捕まらない限り、安心して暮らすのは、困難ではないか？

龍之介は、お房に耳打ちして、彼女の父が逃げたことを伝えた。お房は、真つ青な顔をしている。龍之介は、その顔を見ながら考えた。

盗賊の頭、つまりお房の父は、捕まったのとは別の仲間と合流し、裏切り者のお房を狙って刺客を放って来るやも知れない。それに、龍之介とおよねも、逆恨みからの暴力的な行為に晒される危険も考えられる。何せ、長屋を放火して、関係のない人たちも巻き添えに焼き殺そうと考える輩なのだ。

奉行所などに相談するにしても、お房の正体が知れることを考えれば、それも出来そうも無い。

八方塞がりとなった龍之介は、一つの結論に達した。

「およね、それからお房さん。ちよつと大変だが、西へ行かないか」

およねとお房は、きよとんとした顔をしている。

「どうやら、俺たちは、悪い奴らに目をつけられちまったようだ。どうせ、家も燃えちまったことだし、すぐにでも江戸を離れて、西へ逃げよう。大坂に知り合いがいるんだ。そいつを頼ってみようと思う」

お房は、複雑な表情をしている。それはそうだろう。自分のせいで、龍之介とおよねが、このような目に合ってしまったのだから。

「お房さん。俺のちっぽけな正義感が起こした事だ。お前さんのせいじゃない。気にしないでくれ」

龍之介は、お房の目を見つめて、真剣な表情で言った。彼は、およねにも申し訳無さそうに言った。

「すまない。およね。こんなことになっちまって」

しかし、その彼女は、いつものように笑顔を龍之介に向けていた。「兄様。お房さんの為になることなんでしょう？ お房さんにこれで恩返し出来るってことだし。私は、兄様の言うことは、いつだって信じていますから」

お房は、手で顔を覆うと、感極まって泣き出した。生まれてこの方、こんなに誰かに優しくしてもらったことがあっただろうか。これもすべて、およねとの出会い、他者を大切にする気持ちを彼女に教わったことだった。

彼ら三人は、着の身着のまま、西へと向かった。

たまたま、昨夜大黒屋に給金をもらったばかりだったので、多少の金は持っていた。どうにかこれで、西へとたどり着き、そこで新たな

生活を始めるのだ。

その後三人は、東海道を何日もかけて歩き続けた。そして、遂に大坂の街にたどり着き、知り合いのつてを頼ってどうにか住処を確保した。

以前と変わらぬ貧乏暮らしに慣れていたおよねは、変わらず明るく暮らしていて、お房を元氣付けていた。

龍之介は、新しく事業を始めることを決意していた。飛脚として、大坂の街のあちらこちらに、荷を届ける商売を始めたのだ。

当初は、三人でその商売を切り盛りしていたが、次第に事業は大きくなり、使用人を雇って京の街や、果ては江戸まで荷を運ぶようになったのである。

風の噂では、江戸でお房の父が捕まったという話が伝わり、龍之介は安堵していた。彼は、そのことをお房にも伝え、複雑な表情をする彼女を支えた。

そして、それから気のおけない関係となった龍之介とお房は、祝言をあげた。およねも、使用人だった男と結婚することになり、益々事業は安泰だった。そのうちに、三人は、貧乏暮らしだった頃を懐かしむ余裕も出来たのだった。

ある時、お房が荷の依頼の帳面を確認していると、興味深い依頼を見つけて、龍之介に伝えに行った。

帳面に書かれていたのは、京から、江戸の大黒屋まで、着物の生地を送り届ける仕事だった。

龍之介は、それを見て大いに笑った。

「大黒屋さんも、益々商売繁盛しているみてえだな」

「これも、龍さんのお陰ですよ」

「何言ってるんだ。お房、お前さんのお陰さ」

お房は、ふと思いついた。

「あの時、二人で同じ夢を見たからじゃありません？ 今でも、あの悪夢を思い出すことがあるんです。悪い未来にならない様に、仏様が導いてくれたんじゃないかって」

龍之介も、その夢のことはよく覚えていた。

忘れるはずもない。
あれは、彼らの運命を変える、奇跡だったと感じるのだ。
続く…

遙か彼方の永劫を超えて6 少女の旅立ち

優子は、悪夢にうなされて目が覚めた。

ベッドの脇に置いてある時計を見ると、まだ朝の五時だった。酷い寝汗をかいていて、気持ちが悪かった。

あの冬の出来事についての夢を見るとは、と思い、優子はがっくりと項垂れた。

そして、そのまま、もう一度寝ようと試みた。

そういえば、今日から春休みが終わって三年生だったな、と思っただけでなく寝付けなくなってしまった。

仕方なく、優子はベッドから這い出ると、大きな欠伸をした。

洗面所に行き、とりあえず顔を洗い、歯を磨く。鏡に映った自分は、酷い寝癖で、寝惚けた顔をしていた。

優子は憂鬱だった。

出来れば、学校に行きたくない。

だって、もう学校には、楽しい事なんてひとつも無いし。

優子は、口をゆすいだ後、懸命に寝癖を直すことになった。

身だしなみを気にする意味って何かあったわけ？

裕介とは、あれから話を一度もしていない。もちろん、他の人ともだ。

彼は、優子の事を気にしているようにも見えたが、無関係な他人だ。元から他人だったが、何の関係も無い、という関係に戻ったのだ。

優子は、リビングにやって来て、テーブルの椅子に座った。まだ朝早いので、父も母も寝ているようだった。テレビのリモコンを手に取ると、朝のニュース番組を映した。

ぼんやりテレビのニュースを眺めていると、何か違和感を時々覚えた。おかしいな、と思いつつ、自分のスマートフォンを取り出すと、ニュースサイトを表示した。

またも、違和感を感じた。

この違和感の原因は、既視感だった。どのニュースも、前に見たことがある気がした。

そう。

去年のちょうど今頃のニュースだった。去年、話題になった芸能人の交際発覚のニュースがトップに出ていて、これは良く覚えていた。その人は、ファンだったので、大いに落胆したものだ。

でも、何で、このニュースが今になってまた出ているのか、彼女は不思議に思っていた。テレビでも、そのニュースはトップで扱われていた。

その時、ふと見たスマートフォン待受画面に表示されていたカレンダーの日付を見て、優子はぽかんとした。表示されている、今日の日付は、ちょうど、一年前のものだった。

焦った優子は、右往左往した後、落ち着こうと、リビングのソファに腰掛けた。そして、クッションを抱えると、考えを巡らせた。

タイムリープした？ などと、ラノベの主人公になったような気持ちに一瞬浸って、にやにやとしてみたが、それも違和感があった。どうやら、先程まで現実にあつたことだと勘違いしていたのは、夢の中の出来事だったらしい、という結論になった。

ということとは？

優子は、頭を整理してみた。

・ 裕介は怪我をしていない

・ 裕介は彼女が出来ていない

・ 裕介は……

優子は、彼のことばかり考えている自分に、赤面して、クッションに顔を埋めると、一人で悶絶した。

そして、あれが夢だとしたら、あんな最悪のことが起きていないということだ。

優子は、決意を固めると、大急ぎで、部屋に戻って学校に行く準備をした。ブレザーの制服に着替えて、鞆を掴んだ。部屋を出ると、ちやうど母親が起きて来た所だった。

「おはよう！ 行ってきます！」

「え？ 優子、朝ごはんは？」

「いらない！」

優子は、母が何か言う前に、急いでドアを出ていった。

「どうしたの。こんな朝早く」

誰もいない玄関に向かって、優子の母は話しかけていた。

優子は、早足で学校に向かい、急いでその門をくぐった。ちようど、早出の先生たちが、新しいクラスの発表をする紙を広げて校舎の入口に貼りだそうとしていた。

「おはよう。佐藤じゃないか。随分と早く来たな」

優子は、大きく息を切らしてせいぜいと、入り口でしゃがみ込んだ。

「お……おはよう、ごございます」

やっと息が整って来たところで、先生たちが二年生のクラスを、貼りだそうとしていた。優子は、固唾を飲んで、その紙を眺めた。それこそ、目を皿のようにして。

すると、優子は自分の名前を見つけた。クラスは、夢でみたのと同じ。優子は、続いて、彼のクラスを確認しようと、同じクラスの男子を目で追った。

あつた。

裕介も、彼女と同じクラスだった。それを見て、心の中で小躍りする優子だった。

しかし、ふと、気になることがあつた。

更に他のクラスメートを探すと、それもあつたのだ。優子をトイレで平手打ちした滝沢玲香と、その取り巻き。そして、裕介の彼女になった瀬上彩夏。

優子は、少しだけ青ざめた。そんなところまで、正夢にならなくてもいいのに。

割り当てられた新しいクラスの教室へ向かい、優子は誰もいない教室でぽつんと座って、皆が登校するのを待った。

やがて、少しづつ新しいクラスメートが、次々に教室に現れ、それぞれが同じクラスになったことを喜びあっていた。優子は、それを尻目にいつものように本を読んでいた。

そして、遂に裕介が登校して来た。教室に入って来た彼は、足を引きずつてもいないし、杖もついていない。優子が、一番素敵だと思っ

ていた時の彼の笑顔も見られて、彼女はちよつとだけ幸せだった。

優子は、本を読むのを止めて、彼の動きを目で追った。いつものように、彼の周りには自然とクラスメートが集まり、相変わらず彼は人気者だった。

しかし、何故か、彼は優子の方を一瞬だけ見た。優子も見えていたのに、完全に目が合ったような気がした。慌てた優子は、目をそらして、手に持つ本に視線を落とす。もう一度、彼の方をちらつと見てみるが、もう視線が合うことはなかった。

自意識過剰なのかな、と彼女は思っていた。

しかし、彼と目が合ったことは、彼女にとっては、小さな幸せだった。

それから、数ヶ月が過ぎ、優子の既視感は、増々強くなっていた。夢で見た出来事が、次から次へと起こっていたからだ。いつしか、本当にタイムリープしたんじゃないかと、彼女は疑うようになっていた。

そんなある日、学校帰りに本屋に寄った彼女は、ある本の前で釘付けになった。

「科学技術の発展と人類の未来」

この本は、夢の中では、十一月の後半頃に買ったものだ。その時読んでいた海外のSF小説で、恒星間航行の技術的な内容を、作者が豊富な知識と調査で書いてあるのに感銘を受け、それを実際の科学者の目線で良くまとまっている本が無いか探して買ったのだ。その元となった小説の方は、確か十一月の初旬に発売されていた。

優子は、これはもう、夢見たとか、デジャヴとかそういうレベルの体験では無いと感じていた。そして、その本は、彼と仲良くなる切っ掛けを作ってくれた本でもある。

そういえば。

優子は、裕介がスポーツだけでなく、勉強の成績もいいのを思い出した。特に、二年の今のクラスは、理系の進学クラスだ。彼が、数学や物理の成績がいいのも、テストの順位発表などで知っていた。

夢の中と同じように、現実でも、彼はこういう本に興味があるのだろうか？

優子は、本を手にとると、表紙を眺めた。学者が書いた本を発行するシリーズで、無味乾燥な幾何学模様がデザインされたものだ。これも、夢の中で見たままだった。優子は、その本を大切そうに抱えて、レジに向かった。

優子は、家に帰って、自分の部屋でその本の第一章を読んでみた。読み進むと、間違いなく、この本は、読んでいたと感じた。

優子は、本を閉じると、ベッドに横になった。

これだけ、夢の中で見たことが現実化するなら、裕介は大丈夫なのだろうかと心配になってきた。バスケの部活の試合に向かったバスが事故に合うのは、夏休みが開けてすぐの九月頃だった。

しかし、考えた所でどうにかなる訳でもない。夢で事故にあうのを見たときと彼に言ったところで、ただでさえクラスで浮いているのに、頭がおかしいと思われるのが関の山だ。

優子は、そこで考えるのを止めた。

七月になったある日、母親が、浴衣が出来たから、受け取りに行こうと誘ってきた。言われて見れば、ひと月程前に、母に連れられて、浴衣の採寸に行ったのを思い出した。

「優ちゃん、サイズが合わなかったら、お直しが必要だから、早めに行った方がいいから」

優子は、面倒だと思っていた。浴衣なんて作っても、一緒に夏のお出かけする相手は、父と母しかいないのに、お金の無駄だと思っていた。それなのに、年頃なんだから、作っておいた方がいいと、母が譲らず、結局作ることになったのだ。既製品でもいいよ、とも言ったのだが、何故か母親は強硬だった。

「わかった。来週でいい？」

「駄目。今日行かないと、夏休みに間に合わなくなったらどうするの」

「その夏休みに、それを着る予定なんて無いし」

「いいから、行きますよ。すぐに支度して頂戴」

優子は、少し呆れていたが、こうなった時の母は、かなりしつこくて面倒なのは知っていた。

「わかったよ。支度するからちよつと待って」

優子は、部屋に戻って着替えをしながら考えた。そういえば、このことは、夢の中では無かった出来事だった。寸分違わず、夢と同じことが起こっている訳では無いのは、先日、本を夢と違うタイミングで買ったことから明らかだ。むしろ、寸分違わなければ、裕介が事故に合ってしまう。そんなことは優子は望んでいなかった。

母親と一緒に電車を乗り継いで向かったのは、都営大江戸線の本郷三丁目駅から、歩いて十分程歩いた場所にある着物屋の大黒屋だった。江戸時代からあるという、歴史ある店舗らしい。優子の母親曰く、昔、父とは違う男性とデートした際に、ここで作った浴衣を着たとのことだった。素敵な男性だったと母は言い、ここで作った浴衣が良かったから上手く行ったと思ったらしい。結局、冴えない父と結婚したのだから、それが役に立ったとは、とても思えなかった。

二人は、暑い中歩いて、やっとのことで、大黒屋と看板を掲げる店に到着した。

「暑いー。疲れた」

「文句ばかり言わないの」

そんな二人が店に入ると、クーラーの冷気が、汗をかいた身体に心地良かった。

「あー。生き返る」

「そうね。ああ涼しい」

店は、歴史ある店舗と言っても、建物も内装も現代的だった。入り口を入ると、店の奥に向かって沢山の生地が棚に陳列されていた。中央には、いくつかの着物や浴衣が美しく展示されていて、高級感があつた。

「佐藤といますますが、前に頼んだ浴衣が出来たと聞いたので受け取りに来ました」

優子の母が、店内にいたスタッフの女性に声をかけた。

「お暑いところようこそ。佐藤優子さんのお着物で間違いありませんか?」

「はい、そうです。この娘の浴衣です」

「お待ちしております。今、ご用意しますので、少々お待ち下さい」

しばらくすると、優子の浴衣が運ばれてきた。

うつすらと青い生地、青い花が散ったデザインだった。優子は、当初興味無さそうにしていたが、その出来栄えにうっとり見つめることになった。

「どうぞ、試着して見て下さい。私がお手伝いしますので、こちらへ。もし、違和感があれば、再度お直ししますので、遠慮なく言ってくださいね」

スタッフの女性に促され、その人と一緒に試着室に入った。服を脱いで浴衣を着てみると、見違えるような自分の姿に優子は照れた。肩まである髪をもう少し直せば、もっと映えるだろうと、優子は鏡の中の自分を評価した。

「良くお似合いですね。よろしければ、私の方で髪をアップにしましょうか。より、お着物に映えると思いますよ」

優子は、少し恥ずかしくなったが、せっかくなのでやってもらおうことにした。

「じゃ、じゃあ。お願いします」

そのスタッフの女性は、手慣れた手付きで優子の髪を弄って、手早く髪を頭の後ろに、まとめて行った。

「あとは、この髪飾りなんてどうですか？ ちょっと付けてみますね」
「あ、はい」

優子は、言われるがまま、青い印象的な少し大き目な髪飾りをつけられた。

「可愛いですよ。本当に良く似合っています」

優子は、鏡の中の自分を見て、初めて自分のことを可愛いと思った。こんな姿で、誰かとデート出来たらなあ、と優子はため息をついた。

「じゃあ、お母様にも、見て頂きましょうか」

優子は、頷いた。

スタッフの女性は、背後のカーテンを開けたので、優子は照れくさそうに、少し下を向いて振り返った。

そこに、何故か母はいなかった。

奥の方から、優子の母の声が聞こえるので、自分の着物を物色して

いるようだった。優子は、褒めてもらおうと思っていたので、少しがっかりしていた。

そんな時、向かい側の試着室が開いたので、何となく優子は、そちらを向いた。一人の男性が出てきて、優子と同じように浴衣を試着していたようである。

下を向いていた優子は、その男性の視線を感じて、顔を上げた。

そこにいたのは、裕介だった。

優子は、驚きのあまり、少し後退った。

裕介はといえば、まるで魅入られたように、優子の姿から視線を外そうとしなかった。

優子は、何と言っているかわからず、目を丸くしたまま、固まっていた。あまりの偶然の出来事に、脳の処理が追いついていないようだった。

先に口を開いたのは、裕介の方だった。

「佐藤さん……だよね」

優子は、こくこくと頷いた。

「何やってんの？　こんなところで」

「何って、その、浴衣を受け取りに……」

裕介は、ぼつが悪そうに頭をかいて目を逸らした。

「そりゃ、そうだな。ああ、俺も、同じ」

優子は、裕介も浴衣を試着しているのを改めて確認した。彼の背丈は、百八十センチぐらいあるだろうか。長身の浴衣姿は、いつもとがらりと雰囲気違っていて、すごく素敵だと彼女は思っ、ついまじまじと見つめてしまっていた。

彼は、少しだけ照れたように言った。

「浴衣、似合ってるよ」

優子は、彼の一言で、顔から火が出るかのような感覚を味わっていた。

もとの服に着替えて、試着室を出ると、優子の母が、裕介の母親と話し込んでいた。裕介も、優子と同じようにして、ここに連れて来られていたのだろう。どうやら、親同士も、この偶然に驚いていたらし

く、何やら楽しそうに話していた。

優子の母親は、裕介の浴衣姿について褒めちぎっていて、彼女はいたたまれない気持ちになっていた。

「恥ずかしい、帰りたいたい、と優子は思っていた。」

試着する前に預けてあった自分のバッグを受け取った優子は、その際に取り落してしまい、中身を床にぶち撒けることになった。

「何やってるの、もう」

優子は、母親に文句を言われつつ、しゃがんで散らばった荷物を拾い集めた。

すると、散らばった荷物を、目の前にいた裕介が、一緒に拾っていた。優子は、恥ずかしいと思いつつも、少しだけ嬉しいと思っていた。

「あ、ありがとう……」

だが、裕介は、バッグの中身の一つを拾った後、何故か動かなくなつた。優子は、顔を上げて、どうしたのか確認した。

裕介が持っていたのは、今日のバッグに入れてあった一冊の本だった。彼は、その本の中身を、何故か確認していた。裕介の表情は、明らかに、驚愕と言っているほど変化していた。

優子も、その反応を見て、息を飲んだ。

この間思わず買った、あの本を今日は持っていたのだ。

「科学技術の発展と人類の未来」

裕介は、本を閉じると、本を持ったまま、何か言いたげにしていた。

優子は、不思議そうに思っただけで彼の目を見つめた。二人は、暫し見詰め合うと、優子は耐えられなくなって目を逸らした。何か言わなければ、と優子は思っていたが、中々言葉が出なかった。そういえば、前にもこんな事があった、と彼女は思っていた。

「あの、さ……」

だが、その時とは違い、先に口を開いたのは、裕介だった。

「俺、実はこういうの興味あるんだ……」

彼らしく無く、とても自信が無さそうに、言葉を繋いだ。優子は、その言葉が、夢の中で彼と最初に交わした、大切な台詞だと気が付いた。

「もしか、彼は優子と同じ夢を見たのだろうか？」

そのような疑念が、彼女の中で、大きく膨らんでいった。その事を、口に出すべきなのか、彼女は大いに迷った。口に出せば、頭のおかしい変わった女子だと思われるかもしれない。しかし、夢で体験した、あの絶望感を味わう前に、勇気を持つべきだと、優子は決意した。

「あ、あのね。何か、こういう事、まっ、前にもあつた気がするんだけど……。デジャヴって言ったらいいかな……」

裕介は、それにすぐに返答をしてきた。

「そ、そう。実はさ、俺も、それ感じるんだ」

二人は、互いの目を見て確信した。

二人とも、同じ夢を見ていると。

二人は、ちよつと話したい事があると、互いの母親に告げた。母親たちは、二人の事を若干冷やかしつつ、素直に言う事を聞いて先に帰って行つた。きつと、帰り道にいい話のネタになっていることだろう。

残された二人は、互いにどうしてよいかわからず、大黒屋の前でしばらく立ち尽くしていた。結局、裕介が、優子を誘つて、ぶらぶらと街を歩いて、お茶をする場所を探す事になった。年頃の女子としてはあり得ない事に、男子とカフェなど入つた事もない優子は、緊張のあまり何も話せなくなっていた。

二人は、帰り道にもなる上野駅の方へ歩いて行つた。途中、不忍池を左手に見ながら歩き、上野駅付近まで歩いた。駅の近くにあつたカフェに入つた二人は、飲み物を持って小さなテーブルに顔を突き合わせて座ることになった。

ここでも、先に話始めたのは裕介だった。

「佐藤さん。ちよつと言いくい話なんだけど」

優子は、裕介が話し難そうに言い淀むのを、上目遣いで眺めた。

「実はさ。俺、二年の新学期が始まつた日に、夢を見たんだ。佐藤さんが出てくる夢」

優子は、それを聞いて驚くと同時に、どんな内容なのか、ちゃんと確かめたかつた。

「俺、夢の中のことなんだけど、事故で足が上手く動かなくなつちやつ

て、落ち込んでた時に、それまで話したこともなかった、佐藤さんと初めて話したんだ。その話す切っ掛けになったのが、さっきの本だったんだよね。すごく、変なこと言ってると思われれるかも知れないけど、こんな偶然あるのか、驚いちゃってさ」

そこまで聞いた優子は、不思議な感覚に襲われていた。

これは、奇跡だ――。

そう思うと、自然と、瞳から涙が溢れてしまっていた。

「ど、どうしたの？」

急に泣き出した優子に、彼が慌てているのが、わかり、優子はハンカチを出して涙を拭った。

「う、うん。ごめんなさい。つい、嬉しくて」

優子は、自分も話さなければ、と勇気を振り絞った。

「氷室くん。あ、あのね。その。私もなの。私も、その夢を見たの」

二人は、それから堰を切ったように、夢で見た内容を、話し合った。そして、全く同じ内容であることを把握したのだった。

「私ね、あの、ラノベの主人公みたいに、タイムリープしたんじゃないかって思ってるんだ」

裕介は、それを聞いて少し考え込んだ。

「確かに、そんな感じだけど……。やっぱり夢だと思うんだよ。どうしてかって言うと、俺たち二人だけが覚えてるって、それこそ作り話みたいでちよつと都合良すぎない？」

優子は、そうかなあと考えていた。

裕介は、そんな優子の表情を見て、笑顔になった。

「まあ、でも、タイムリープでもいいよ。俺さ、もつと佐藤さんと話したいと、思ってたんだ」

優子は、少し顔を赤らめた。

「そ、それって、どういう意味……かな」

裕介は、その理由について話し出した。

「俺さ、本当は、科学とかに昔から興味があつてさ。本気で宇宙旅行とか行きたいって思ってるんだ」

優子は、そのことは、夢の中でも聞いたのを覚えていた。

「そういえば、そんなこと言ってたね」

裕介は頷いた。

「多分、バスケット部で活躍出来るようになってからだと思うんだけど、そういう俺のイメージみたいのが周りで勝手に出来上がったみたいで。宇宙旅行とかの夢を、大真面目で話すと、嘘っぽいつて引かれたりする事があって、俺も言い難くなってさ」

裕介は、テーブルの上に出していた優子の本を取ると言った。

「それで、夢の中でこの本を貸してもらった時に……。こういう話しが合う人かも知れないって、嬉しかったんだ」

優子は、期待したような話しが語られなかったので、少しだけがっかりしたが、それでも十分に嬉しかった。

「そ、そしたらね。今からでも、あの時みたいに、本を貸し借りしたり、いろいろお話ししよつか……?」

優子は、恐る恐る言ってみた。すると裕介は、笑顔でそれに返事をした。

「ありがとう。じゃあ、現実でもよろしく」

優子も、それには笑顔で応えた。

しかし、優子は、肝心なことをまだ言い出せなかった。彼がこれから事故にあつてしまうこと。このタイムリープのような現象は、先を知っていればこそ、これを回避することが出来るはずだ。

「あ、あのね。氷室くんが、事故に合う件なんだけど……」

裕介は、その話にし少し表情が硬くなった。

「あの事件が、起こると思ってる?」

優子は首を振った。

「起こって欲しく無いって思ってる。でも、この数ヶ月、夢で見た通り。起こって欲しく無いって思ってる。あの事故も、これから起こると考えた方がいいと思う。知ったからには、回避出来るように行動すればいいんじゃない?」

裕介は、少し悩んでいるようだった。

「俺も、考えてはいるんだ。でも、そんなに簡単じゃ無いよ」

「どうして? あのね、もし嫌でなければ、バスケット部を辞めるのも選択

肢だよ?」

裕介は、少し悲しげに笑った。

「それ、最初に考えた。でもさ、俺だけ辞めたって、友達が大勢酷い怪我を負うのを止められない。俺だけ助かるのは、ちよつと違うと思つてさ」

優子は、はつとした。彼の事を思うあまり、周りが見えなくなつていた。確かに、それでは不十分だ。

「ごめんなさい」

裕介は首を振った。

「俺のこと心配して考えてくれたんだよね。ありがとう」

優子は、他の案を考えた。

「当日のバスの出発時間を遅らせれば?」

裕介は、それも考えた、と言った。

「タイムリープもののお話しなら、そんなことをしても回避出来ないって、よくあるでしょ? それにね、当日、その時になるまで事故が防げるかどうかわからないなんて、リスクが大き過ぎる思う」

優子は、確かにその危険性は一理あると思つた。

うーんと悩み続ける彼女を見て、裕介は笑つた。

「今は、いい案が思い付かないけど、まだ二ヶ月も先の事だから、それまで一緒に、考えてよ」

優子は、嬉しくなつて大きく頷いた。

十分に話し合つたと思つた二人は、SNSでやり取り出来るように、スマートフォンを取り出して、アドレス交換を行った。優子は、憧れの裕介と通信や通話を直接やり取り出来る事に、内心狂喜乱舞していたが、顔に出ないように努力した。

二人は、店を出て、地元へ帰る為に上野から電車で移動した。地元の駅で降りると、優子は少し名残惜しいと思つていたが、まるで恋人同士のように手を振って別れた。

優子は、帰り道興奮しつつ、家路に着いたのだった。

そんな様子を、これから裕介の彼女になるはずの、瀬上彩夏が目撃していた。彼女は、クラスで誰も友達がない優子が、何故、裕介と

一緒にいるのか訝しんでいた。

あの日から、時折優子と裕介は、学校でも話すようになっていた。本の貸し借りをしていただけで、長い時間話す事は無かったが、二人の急接近を、周囲のクラスメートたちは見逃さなかった。

七月も後半になり、間もなく夏休みに入ろうとしていた。

裕介は、昼休みに友人らと昼食を取っていると、そのうちの一人にそのことを質問されていた。

「お前さあ、最近佐藤と仲良いじゃん」

「んー？ それがどうかしたの？」

「あいつみたいなのと、お前がどうして話してんのか謎だって、皆言ってる」

「あいつみたいって……お前、ちよつと言い過ぎだぞ」

「だってさ、誰とも口聞かずに、もっぱら本が友達の変わりもんって皆思ってるよ。何でまた、急に話すように、なったんだよ」

裕介は、答えに困窮した。確かに、以前までは彼も同じように思っていたからだ。だが、夢で体験したあの怪我の後、精神的な苦痛を癒やしてくれたのが彼女だったことが、彼の中で大きな意味を持っていた。更には、その夢を共有するという不思議な体験は、彼女を特別視することになった原因でもあった。

それだけでは無く、同じ科学という興味の理解者が、周りに彼女しか居なかったのだ。

そして、彼の中では、先日の浴衣の一件で、彼女がとても魅力的だと気付いてしまったのが、決定的な要因でもあった。

裕介は、その友人の顔を見ながら、一体何と説明したものか、と少しだけ悩んだが、それは難しいとすぐに諦めた。

「この間、偶然外で会う機会があつてさ。結構、いい奴だって知ったんだよ」

「まあ、お前は前から誰とでも仲良くなれる奴だから良いんだけどさ……」

その友人は、顔を裕介の耳に近づけると、ひそひそと言った。

「今日、いつものお前の取り巻きの女子が、佐藤の悪口言ってるの聞い

たんだよ。どうやら、お前が彼女と少し話すだけでも気に入らないみたいだ。ちよつと気を付けた方がいいぜ」

裕介は、その話しに少し驚いたが、友人の忠告に感謝した。

「ありがとう。ちよつと気を付けるよ」

確かに、自分を持ち上げ続ける女子たちがいるのは裕介も認識していた。それ自体を嫌だと思った事は無く、寧ろ嬉しいと思ひ、悪い気はしていないかった。

しかし、夢で体験したあの怪我で、辛い思いをしている時に、すぐに良くなるのか、またバスケ頑張つて、とか言われて、とても不快な気持ちになったのを、彼は忘れる事が出来なかった。あの時、ありのままを普通に受け入れてくれた優子が、彼の精神的な癒やしとなったのは、その対比からでもあった。

ふと、裕介は優子の事が気になつて彼女の席の方を見た。いつもなら、自分の席にずっと座つて弁当を食べている姿を見かけたが、何故か今日は居なかった。

その頃、優子はその彼の取り巻きの一人、滝沢玲香らに呼び出しを受けて、体育館の裏に連れて来られていた。

優子は、あの夢で見たトイレでの出来事を思い出して、怯えていた。優子を連れて来たのは、その時の同じメンバーだった。

「あんたさあ。何で呼び出されたか、わかつてる？」

優子は、隅に追い詰められて、目の前の玲香の低い声に恐怖を感じ、下を向いたまま首を小さく小刻みに振った。

その玲香は、ため息をついて、腕組みしていた。

「あたしは、ここに居る彩夏の親友なの」

その、瀬上彩夏は、玲香の後ろで暗い表情で立っていた。

「彩夏はね、一年の時から、裕介に憧れて、ずっと彼の為に尽くしてきたの。バスケ部のマネージャーにもなつて、ずっと彼を支えて来たんだ」

「玲香。私は、大丈夫だから、こんな事止めようよ」

その彩夏が、玲香の袖を掴んで彼女を止めようとしていた。

意外に思った優子は、顔を上げて、その彩夏の顔を思わず見てし

まった。彼女は、苦痛に満ちた表情をして、今にも泣き出しそうだった。

「よくない。こんな奴に、裕介を取られてもいいの?」

「そ、それは、嫌だけど……」

「だったら、ここではつきり言っつてやった方がいい」

玲香は、優子の方を見て手を伸ばした。

また、叩かれる! と思っつた優子は、身体を強張らせた。

しかし、彼女はその手を止めて、自分の手を見つめた。そして、結局手を引つ込めたのだつた。

「今まで、誰とも仲良くなるうとせず、何の努力もして来なかつたあんなが、大切な友達を差し置いて、裕介と仲良くしようつてのが、あたしは許せない」

優子は、玲香が言う事に身体が浮揚するような感覚を感じた。

確かにそうだつた。彼女の言うとおりでつた。

夢で彼女に叩かれた後、酷いとか、理不尽だとか、そう思つて優子は苦しみ、彼女を恐れた。しかし、大切な友達を思うあまりの行動だつた事を、今、ようやく理解出来たのだ。

彼女の言うとおりで、自分は何も努力せず、降つて湧いた幸運を享受しようとしただけだつた。

「だから、これ以上、裕介に近付くのを止めてくれない?」

玲香は、優子の顔を覗き込んだ。その時、彩夏は強い口調で言つた。

「止めて、玲香。こんな私の望んでない!」

「彩夏……」

玲香は、振り返つて彼女の方を見た。

「気持ちには嬉しいけど……。私が、早く、ちゃんと裕介に気持ちを伝えればいいだけだから」

彩夏は、玲香と優子の間に割つて入つて来て、優子に語りかけた。「ごめん。もう二度としない。だからこの事は忘れて」

彩夏は、玲香の背を押してそこから去ろうとしていた。

もう一度振り返つた彩夏は、優子に最後に言つた。

「私、裕介に告白するから」

そう言つて、彼女たちは、優子をその場に残して去っていった。

夢の中の出来事で、彼女たちを恨んだりもした。しかし、決して悪い人たちじゃなかったのだ。あれは、彩夏が告白を成就させた後の出来事で、優子のした事は、確かに泥棒のような行為に彼女たちには映つたのだろう。

優子は、悲劇のヒロインのような気持ちになつていた自分が、何だかとても恥ずかしくなつた。同時にどうしようもない虚しさも感じていた。

夢で起きた通りのことが、これからも起きるなら、裕介は、彼女の告白を受け入れるのが、既にわかっている。

数日後、夏休み前のすべての授業が終わり、家に帰つた優子は、制服のままベッドに寝転んで、ここ最近の出来事を振り返つていた。

あれから、玲香や彩夏に言われたことを気にした優子は、裕介と話すのをやめた。彼は、そつけない彼女の様子に、少しがっかりしているように見えた。

今頃、今日も裕介は部活で汗を流しているに違いない。そして、この間の彩夏の真剣な表情からも、もしかしたら、もう裕介に告白してしまつたかも知れない。

優子は、いつものように、どうせ自分何て、と自らを卑下し、乾いた笑いが口から漏れていた。でも。

優子は、自問自答した。

本当にそれでいいの？ と、誰かに言われたような気がした。

このまま諦めて、またいつものように、誰とも関わらずに、一人で過ごす生活に戻ることが、本当に望んでいることなの？

それとも、もう、そんな生活に戻りたくないの？

自分の気持ちは、どっちなのだろう。

裕介と、もっと話したいと思う？

これからも、ずっと一緒にいたいと思う？

夢を共有するなどという奇跡は、こんな風に無駄に時間を費やす為に起きたことなのだろうか。

あの日、大黒屋で浴衣を受け取りに行った時に起きたことは、偶然なんかじゃないとも感じていた。

彼女は、背中を押されて、勇気を出しなよ、と誰かが言っている気がした。

優子は、いても立つてもいられなくなり、ベッドから起き上がった。優子は、家を飛び出して、再び学校に向かって走った。ベッドで長い時間、考え込んでいたので、すっかり夕方になっていた。普段、運動もろくにしていない身体が、酷く重かったが、彼女は走るのを止めなかった。

優子は、息をぜいぜい言わせて、しばらく校門のところまでへたばっていた。しばらくして、息を整えると、裕介のいるであろう体育館へとゆっくりと歩いて行った。

体育館に着くと、ちょうどバスケット部は練習を終えて、後片付けをしている最中だった。

優子は、体育館の入口の近くに立って、中の様子を窺った。裕介は、バスケのコートの中央で、ボールを集めて、籠に入れているのがすぐに見つかった。

優子が黙って彼を見つめていると、彼も彼女の存在に気付いたようだった。彼は、にっこりと笑顔を向けていた。

優子は、マネージャーをやっている彩夏の姿を探したが、今は居ないようだった。ならば、今こそその時、と彼女は決意を固めた。

裕介は、片付けを終えると、体育館の隅に佇んでいた優子の傍にやって来た。

「佐藤さん、こんな時間にどうしたの？」

優子は、下を向いて、言い淀んだ。先程から、何て言うか繰り返して考えていたので、どの言い方がいいかを悩んでいた。

そして、決意した優子は、彼に気持ちを伝え始めた。

「氷室くん」

「なに？」

「あ、あの……」

裕介は、不思議そうな表情で、優子のことを見ていた。

これは、今から優子が言い出すことを、微塵も想像していない顔だと、彼女は気がついた。

それでも。

もう、後悔ばかりの生き方を変えようと決意したんだから、と彼女は最後の勇気を振り絞った。

「氷室くんに、ちゃんと伝えなきゃと思って……」

裕介の表情は、まだ何の話か気づいていない。

優子は、自分の顔が真っ赤になっているのを自覚したが、そんなことを気にするのを止めた。

「わ、私、ずっと前から、氷室くんのこと……」

裕介の表情は、そこまで聞いて、やっと何を言おうとしているかわかったようだった。とても驚いているのが、表情の変化からもわかった。

優子は、そこで下を向いた。

やっぱり止める？

彼は、想像もしてなかったみたい。

でも、傷ついてもいいと、覚悟を決めて来たんだから、ここで止める訳には……。

優子が、再び顔を上げて続きを言おうとした時、目の前の裕介の後ろに、彩夏が立ち尽くしていた。

優子は、赤くなっていた顔が、急速に青ざめて行くのを感じていた。

彩夏の表情は、あの時の泥棒と優子を呼んだ時の表情に似ていた。

「裕介くん」

彩夏は、裕介に声をかけた。

彼も、それに気づいて後ろを振り返った。

「ずっと、言えなかったことがあるの」

彩夏は、真剣な表情で、裕介の目を真っ直ぐに見ていた。そして、少し顔を赤らめながら、彼女が言わなければならないことを、そこで言った。

「二年生の時から、ずっとあなたが好きでした。よかったら、私と付き合ってください」

裕介は、突然の彩夏の告白にも驚いていたが、それだけでなく、明らかに先に話していた優子も、告白しようとしていた。彼は、彩夏と優子の二人を交互に見て、とても困っているようなのが見てとれた。彩夏は、そんな様子を見て申し訳無さそうに言った。

「裕介くん、ごめんなさい。突然、こんなこと言って、びつくりさせたよね。返事は、急がなくてもいいから、夏休みの間にくれると嬉しいかな」

そう言って、彼女は振り返って、小走りに去って行った。

残された裕介と優子は、ぼつの悪い雰囲気になってしまっていた。

「え、えーつと……」

裕介は、明らかにどうしていいか、わからなくなっているようだった。

「こ、困らせてごめんなさい。わ、私も、同じなの！」

そう言って、優子は駆け出して、一目散にその場を離れて行った。走って校門を駆け抜けて、校外に出た優子は、そこで立ち止まって、切らしていた息を整えようとした。

「ちゃんと、言いたかったのに……最後まで、言えなかった」

優子は、そのことだけが、心残りだった。きつと、彼は今頃、同時に告白してきた二人が、自分を残していなくなったことに、困惑しているに違いない。

一応、気持ちには伝わったかな、と優子は思っていた。

未来は、変えられるのだろうか。

夢の中では、やっていない行動なので、どうなるかはわからない。それでも――。

前よりも少しだけ自分に自信がついたのはわかる。

そう思いながら、彼女は、心も身体も疲れ切った状態で、ゆっくりと家路についた。

それから、夏休みは穏やかに過ぎて行った。

宿題をやるか、好きな読書にふけるかで、淡々と過ぎて行く。

優子は、スマートフォンのお知らせを時々覗く以外は、そんな風に過ごして、特に外出することも無く、のんびりとした日々が過ぎて

行った。

あれから、裕介とSNSでのメッセージのやり取りも、すっかり途切れていたし、自分からもメッセージを送るのが怖くて、通知だけを気にする毎日だった。

一応、告白らしきものをしたので、最初は日々どきどきとスマートフォンを眺めていたものの、十日以上が過ぎた今となっては、諦めの気持ちも湧いて来ていた。

もしかしたら、彩夏にだけ返事をして、自分は放置されているのかもしれないが、確認をする勇気が持てなかった。

少し、自分に自信が持てた気がしたのも、束の間のことだった。

ある日、家でじっとしている優子を見兼ねたのか、母親が地元のお祭りに行こうと誘って来た。退屈だった優子は、二つ返事で了承したが、母は、せっかくなので先日買った浴衣を着なさいと言ってきた。

面倒くさいと思っていた優子は、拒否したが、せっかく買ってあげたのに、と母が悲しげにしているのを見て、やむを得ず言うことを聞く事にした。

当日、母に手伝ってもらって浴衣に着替えた優子は、大黒屋で着付けを手伝ってもらった時に髪をアップにしてもらったのが気に入っていたので、それも、母親にお願いでやってもらおうことにした。

母は、せっかくなので、少し化粧もしようと言いついたので、慣れない手付きで自分でやり始めると、見兼ねた母親が、それも手伝ってくれた。

完成した姿は、いつもとまるで違う、見違えるような姿になっていた。優子は、鏡を眺めながら、心の中で、自分で自分を褒めて悦に入っていた。

そんな時だった。

優子のスマートフォンが、通知を待ち受け画面に表示していた。

優子は、裕介からの連絡を、半ば諦めていたのに、その通知は裕介からのメッセージの受信を示していた。

「えっ? ええっ?」

優子が変な声を出してスマートフォンを眺めていたので、母が画面

を覗いて来た。優子は、母親に背を向けて、隠れるようにロック画面を解除して、メッセージを急いで確認した。

そこには、次のように書かれていた。

「一緒に、お祭りに行かない?」

優子は、告白の返事では無かったので、一瞬落胆したが、良く考えると、これはデートの誘いのようにも見えた。

「……! ……!」

優子が、また変な声を出しているので、母親が聞いてきた。

「どうしたの一体? まさか、男の子から、デートの誘いでも来た?」

優子は、驚きのあまり、母親からスマートフォンを隠した。

「みっ、見たの?」

「見てないけど。あんた……まさか、本当に誘われたの?」

優子は、こくこくと小刻みに頷いた。

母の顔が、驚く程変化し、満面の笑みで言った。

「やったじゃない。誰なの? 母さんの知ってる子?」

そこで、母親は、はっとしたような顔をした。

「もしかして、氷室さん家の息子さんじゃあ……」

「……!」

優子は、顔を手で覆って、声にならない声を出した。

「ちよつと、化粧崩れるよ。そうなのね? やったじゃない! よ

かったね、優ちゃん」

優子は、顔から手を離すと、少し心配になって言った。

「お母さん。あの、出来れば行きたいから、今日一緒に行く約束は……」

優子の母は、思い切り優子の背中を叩いて来た。

「ばかねえ。良いに決まってるでしょ。楽しんで来なさい」

優子は、うん、と頷いた。

「ありがとう、お母さん」

その母も、何か思いついて悦に入っていた。

「あの店の浴衣は、やっぱり効くねえ」

優子は、その後、すぐに返事を返した。急いでいたので、随分と堅

いあつさりした文面になっていた。

「はい、行きます」

ちよつと、あつさりし過ぎて、冷たい感じだったろうかなどと、優子が悩み始めると、すぐに返事が来た。

「よかつた。待ち合わせ場所と時間は……」

優子は、跳び上がって喜びたい気持ちを抑えて、出掛ける準備をした。

優子は、待ち合わせ時間よりも、三十分も早く待ち合わせ場所に着いていた。そこは、お祭りの会場となっている神社の入口だった。大勢の人がごつた返しており、裕介が来ても、すぐに自分に気付くか心配になった。

そわそわと、時計を眺めて、裕介の到着を待っていた優子は、だんだんと不安な気持ちになっていた。そして、ありがちな最悪のパターンなどを想像し始めていた。

・裕介のメッセージには、一人で来るとは一言も書いていなかった。クラスメートが複数名一緒に来てしまい、浴衣を着ているのが優子だけで浮く。

・裕介は、彩夏を伴って来て、この場で振られる。

・裕介が現れない。そして、優子がめかし込んでいるのを影から見られていて、後日笑いにされる。

・玲香らのグループがやって来て、浴衣を汚されたり、酷い目に合わされる。

優子は、頭を振って、嫌な予感を振り払おうとした。こんな事で悩むなら、こんなにも早く来るんじゃないかと後悔をした。

すると、優子のすぐ隣に、背の高い誰かが立ち止まった。優子が、横を向いて見上げると、そこには、浴衣姿の裕介が立っていた。

「氷室くん……」

優子は、笑顔を浮かべるが、まさかと思って周囲を確認した。心配していたようなことなどなかったらしい。裕介を疑った自分が恥ずかしくなった。

「どうしたの？」

「な、何でも……ないよ」

二人は、そこで、始めて、互いの姿を正面から確認した。

優子は、改めて裕介の浴衣姿を見て、あの時見た通り、とても素敵だなと思っていた。

「あの時の浴衣……だよね」

「あ、ああ。佐藤さん、もだね」

裕介は、薄化粧をした優子の浴衣姿に、釘付けになっていた。

「あの、すごく、可愛い……と思うよ」

裕介が、とても恥ずかしそうにしながら、優子の姿を褒めた。それを聞いた優子は、気が遠くなりそうになった。

「あ、ありがとう……氷室くんも、格好良いよ」

「う、うん。ありがとう。えーと、じゃ、じゃあ、行こうか」

裕介は、優子を伴って神社の中へと入っていった。

二人は、神社のお祭りの屋台を巡ってゆっくりと歩いて行った。

屋台の食べ物を食べ、射的をやったり、金魚すくいに挑戦したり、ごく当たり前の恋人同士のように過ごした。楽しそうに笑い合い、子供の頃の思い出を話し合ったり、楽しい時間はあつという間に過ぎて行った。

裕介は、優子にちよつと休もうと言って、神社の比較的人が少ない、隅にあったベンチに座った。

二人は、横に並んで座ったまま、しばらくの間無言になった。

優子は、心の中で、とても楽しいと感じていた。もしかしたら、一生分の運を使い切ったのではないか。こんなに幸せでいいのか、ななど考えていた。

でも、結局この間の答えはもらえるのだろうか、少し不安に思っていた。

裕介は、優子の方を向いて、頭を下げた。

「ごめん」

優子は、とても驚いた。

頭を上げない彼の姿を見て、あれっと思っていた。

もしかして、これって答え……なの？

足もとが波打つような感覚を優子は覚えた。

頭を上げた彼は、優子の顔が蒼白になっっているのに気が付いた。

「ち、違うんだ。俺が謝りたかったのは、すぐに返事をしなかったこと」

優子は、次に彼が何を言うのか恐れた。

「それって……どういふこと？」

裕介は、少し言い淀みながら、次の言葉を探した。

「実は、あれから、部活は夏休みも毎日やってたから、彩夏とは、あれから何度か話をした」

裕介は、自分の行動を振り返って、説明を続けた。

「彼女には、付き合えないってちゃんと話したんだ。でも、中々納得出来なかつたみたいで、少し話し合うのに時間がかかってしまったんだ」

彼は、優子の顔を真っ直ぐに見て言った。

「答えが遅くなってごめん。俺は、佐藤さんと一緒にいたい。気持ちが変わっていなければ、ぜひ、俺と、付き合ってください」

彼は、再び頭を下げた。

優子は、彼が言った言葉が、信じられなかった。疑っていた訳じゃない。ただ、こんな風に、ずっと夢見てた事が現実起こったのが、それこそ夢の中の出来事のように感じて、自らの頬をつねりたい気分だった。

頭を下げ続ける彼に、優子は、この間ちゃんと言えなかった事を、自分の口から言わなきゃ、と思つて口を開いた。

「ありがとう、氷室くん。私、ずっと前から、本当はあなたが大好きでした。こんな私でよかつたら、お付き合いして下さい。お願いします」

優子は、ちゃんとと言えた自分にほっとしていた。

裕介はというと、頭を上げた彼は眩しい笑顔をしていた。

「よかつた。じゃあ、これからは……」

「そ、そうだね。こ、恋人同士……っていうことだよね」

二人は、ぎこちなく隣に座ったまま、しばらくそのまま余韻に

浸っていた。

裕介は、その後、彩夏のことについて、少し教えてくれた。

「あの夢では、彼女は俺と付き合ってから、マネージャーを辞めた。彼女を好きだった他の部員がいて、ぎくしゃくしてしまって、それが原因だった。でも、それで彼女はあの事故にも遭わずに済んだ。今回も、結局彼女は、辞めると言い出した。もし、あの事故が起きるなら、そのままの方がいいかも知れないと思ってる」

優子は、彩夏のことを聞くと、いろいろな不安が頭をよぎったが、裕介がそれを払拭してくれた。

「彼女、最後に佐藤さんに悪いことをしたって、謝ってた。玲香が嫌がらせをしたって聞いたよ。そういうことはもうさせないって言うておいて欲しいって」

優子は、やっぱり彼女は、悪い子なんかではなかったのを知った。あらゆる事が夢の出来事から好転している。

優子は、残った一番大きなあの事故の問題を、どうにしましなきゃいけないと思っていた。しかし、あれから、あまり特にいい案は浮かんでいなかった。

「氷室くん、あのね」

裕介は、そこで話を遮って言った。

「あの、さ。よかつたら、名前で呼び合わない？」

優子はびっくりした。

でも、優子も、そう呼び合いたいってずっと思っていたことだ。

「じゃ、じゃあ、裕介くん……。は、恥ずかしいかな」

「優子ちゃん。そ、そうだね。照れるね」

二人は、見つめ合って笑いあった。

「えーと、裕介くん、あのね。あの時の事故のことで、何か覚えていることってない？」

「事故のことで、か。例えばどんなこと？」

「例えば、事故が起こった時間だったり、どんな事故だったのか、とか」

裕介は、少し、夢の記憶を探っていた。

「時間は、ちょうど十一時ぐらいだったな。事故は、走行中に、反対車

線のトラックが突っ込んできたから起きた」

優子は、少しその情報を考えていた。

「相手のトラックのことって、何か覚えていることある？」

裕介は、暫し考えていた。

「確か、運送会社のトラックで、事故を起こした原因は、整備不良でブレーキが効かなくなっただけって聞いたと思う。会社名は……西川運輸って名前だったと思う。大阪にある会社だったかな」

優子は、スマートフォンを取り出して、検索してみた。ホームページが見つかり、会社は実在していた。

優子は、裕介に見えるように、スマートフォン画面をみせた。「見て。詳しい場所とか書いてあるから」

裕介は、優子に寄り添って、画面を覗き込んだ。

優子は、思い付いた考えを、彼に話した。

「ここに、行ってみない？」

裕介は、とても驚いていた。

「ここ、大阪だよ？」

優子は頷いた。

「今のままじゃ、事故は回避できるかわからない。行って、確かめて見ようよ。もう、残り時間は一ヶ月ぐらいしかないから、行ってみるなら、この夏休みの間しかないよ」

裕介は、うーんと考えていた。

「新幹線って幾らかかるか調べようか」

二人は、東海道新幹線の、東京から大阪までの往復の運賃を確認した。

「結構するね……でも、何とか出せるかな」

「俺も、大丈夫だと思う」

二人は、何だか宿泊する旅行の予定を決めているような気になっていた。

「ひっ、日帰りだと、現地であんまり長い調査の時間はとれないね。でも、何かやらなきゃ、あの事故は回避出来ない気がするの」

「わかった、次の部活の休みは、来週の水曜日の予定なんだけど、その

「日でどう?」

優子は、にっこりと笑った。

「じゃあ、決まりだね」

裕介も、笑顔を返した。

優子は、ぽつりと言った。

「そのうち、ちゃんと旅行に行けると、いいなあ」

その時、頭上で大きな破裂音が鳴った。二人が夜空を見上げると、花火が打ち上がっていた。

「花火! あれ、すごい綺麗!」

優子が指差す先を裕介も見上げた。

「本当だ」

次々に打ち上がる花火を、二人は、しばらく、黙ったまま見上げた。その時、手が一瞬触れ合ったかと思うと、突然裕介が優子の手をそつと握って来たので、彼女はとても驚いた。彼は、優子の方を向いて照れたように笑っていた。彼女も、彼の手を握り返し、いつまでも花火が続けばいいのに、と思っていた。

あれから、一週間が過ぎた。

優子と裕介は、東京駅を早朝に出た東海道新幹線に乗り、新横浜を通過して、ちようど富士山が見える辺りを、通過していた。

お弁当を広げて朝ごはんを食べていた二人は、車窓から現れた富士山に感嘆していた。

「裕介くん、見て!」

「おおー、いい眺めだなあ」

二人は、あの日から大阪への日帰り旅行の準備を始めていた。優子にとって何よりも難関だったのは、父親に、何しに行くのか、誰と行くのかといったことを説得することだった。

当初、優子は、女子の友達と遊びに行くと言おうと考えていたが、裕介に、何にも悪い事していないのに、嘘をつく事は無いんじゃないかと諭され、本当のことを話す事にしたのである。

確かに、優子に友達がいないことは、ここ数年の両親の悩みであり、急に女子の友人の話をするのは、すぐに嘘だとばれたであろう。既

に、先だつてのお祭りで、裕介と恋人同士になった事が母親に知れていたことから、彼女の母親は、父親にそのことを嬉しそうに話してしまっていた。それによって、ただでさえ、悪い男に騙されてないかなどと、余計な心配を彼女の父親はすることになっていたところに、大阪への旅の話は、追い打ちをかけることとなった。

更には、何でそんな遠い所に行くのか尋ねられて、それだけは本当の話と言う訳にも行かず、かなり苦しい言い訳をすることになってしまった。

しかし、この窮地を救ってくれたのは、優子の母親だった。彼女は、強力な援軍として優子の味方をし、この機会を逃したら、優子は一生独りぼっちかもしれないなどと、とても失礼な説得を父に行い、無理矢理了承させたのだ。

新大阪駅に到着した優子と裕介は、大阪市内へ移動する為、慣れないローカル線に右往左往しながら乗り換えた。

電車を乗り継ぎ、JR大阪環状線の大正駅に降り立った二人は、スマートフォンを頼りに、この旅の目的地である運送会社へ向かった。

「優子ちゃん、そっちじゃなくて、こっちだと思う」

あらぬ方角へと進み出そうとする優子を、裕介が呼び止めた。

「あれ？ でも、でも、ほらマップだどこっちだよ」

二人は、寄り添って同じスマートフォンの画面を見た。

「これね、北がこっちでしょ。だから、こっちの方角が正しいよ」

優子は、方向音痴だった。自覚がない彼女は、不満を口にしつつ、裕介の言う方角に移動した。

「あれ……ほんとだ。裕介くんの言ってるのが正しいみたい」

裕介は、苦笑して言った。

「じゃあ、俺に着いてきてくれる？」

裕介は、手を優子に伸ばした。

「はい」

優子は、笑いながら裕介の手を掴み、そのまま手を繋いで歩き始めた。

二人は、十五分程歩いて、ようやく今回の目的地の西川運輸の前にやって来た。

「やっと着いた!」

「さすがに、遠かったね」

「あれ? 何か、変じやない?」

その敷地に、十トントラックが十台程並んでいた。しかし、入口の門は閉鎖されており、敷地内にある事務所の建物にも、人の気配がなかった。

「お休み……なのかな?」

裕介は、入口に近付いて、背伸びして中の様子を、窺った。

「事務所の中が見えたんだけど……机も何も無い」

「ええーっ」

裕介は、その場でどういふことか考えた。

「この会社のトラックのデザインとか、事故後に見せられた写真と同じもので間違いないよ。俺の記憶違いじゃないって断言出来る」

「この会社潰れちゃったのかな……。もう、夢と同じじゃないってことだね。未来が変わったのかな?」

「確信は持てないけど……そう、なのかも」

二人は、しばらくその場で立ち尽くしていた。

「裕介くん」

「優子ちゃん?」

優子は、納得がいけないという顔をしている。

「私ね、やっぱりこのままじゃ、本当に大丈夫って言えないと思う」

裕介は、腕組みをして、一緒に考えた。

「確かにそうだね。でも、どうしたらいいか……」

そこに、通りかかった中年の男性が彼らに声をかけてきた。

「あんたら、西川さんに用か?」

優子と裕介は、不思議そうな顔でその男性の方を見た。

「は、はい。あのう、この会社って、潰れちゃったんでしょうか?」

優子は、男性に質問を試してみた。

その男性は、少し訝しげな表情をしたが、親切に回答してくれた。

「先月、西川社長に、会社畳むって聞いてなあ。せやけど、会社を買ってもらえることになったらしいんや」

「西川運輸の社長さん、どちらにいらっしやるかご存知ですか？」

男性は、裕介に向かって手を振った。

「ご近所さんなんで、たまに話してただけやから、そういうのは知らんなあ」

「そうですか……」

「あんたら、学生さんか？ 何の用だか知らんが、まだトラックとかの財産が残つとるやろ？ うろちよろしとると、泥棒やと思われるで」
そう言つて、その男性は、向かい側のビルに入つて行った。

優子と裕介は、互いの顔を見合わせた。

「どうしようか？」

その時、優子のお腹が鳴った。優子は赤くなつてお腹を抑えた。裕介は、優子の顔を見て笑顔になった。

「お腹すいたよね。取り敢えず、お昼ごはんにして、どうするか考えようか」

「そ、そうだね……」

優子は、恥ずかしいと思いつつ、頷いた。

二人は、大正駅まで戻り、近くにあつたたこ焼き屋に入った。

テーブルに向かい合つて座つた二人は、黙々とたこ焼きを食べていた。

「うーん。これ、美味しいね」

「本場だもんね」

食べ終えた二人は、これからどうするか話し合うことにした。

「さっきの人に聞いたことで、気になる事があるんだよね」

優子は、さっきから考えていたことを口にした。

「どんなこと？」

「トラックとかの財産が、つて言つてたじゃない？」

「うん」

「あれつて、会社を買つたつていう別の会社のものになつたつてことじゃない？」

「そうか！ 問題は、あのトラックのどれかが、整備不良ってことだから……。買い取った会社の人に、トラックの状態を確認させればいいね」

「そんなに上手く行くかわからないけど、そうならば、安心出来るよね」

二人は、互いにスマートフォンを取り出して、買い取った会社がどうすればわかるか調べ始めた。

しばらくスマートフォンを弄っていた裕介は、何かを思い付いて、優子に画面を見せて来た。

「法務局って所で、会社の履歴が調べられるみたいだ。これで、誰が会社を買ったのかわかると思う」

「これって、電車で三十分ぐらいの場所だね。すぐに行こっか」「そうしよう！」

二人は、再びローカル線を乗り継いで、今度は御堂筋線の淀屋橋駅に降り立った。

法務局北出張所に到着した二人は、窓口で事情を説明して、どの書類を取得すればよいかを教えてもらった。訝しげな顔をしていた窓口の男性には、夏休みの自由研究だと言って誤魔化した。そして、ようやく西川運輸の証明書を取得した二人は、そこに記載されている内容を確認した。

「これじゃない？」

「株式会社フィールドウィンって書いてあるね」

「取り敢えず、行ってみよう！」

二人は、またも電車に乗ると、フィールドウィンへと急いだ。四つ橋線の玉出駅まで移動した二人は、会社のある場所に向かった。既に、時間は十五時になっていた。優子も裕介も、さすがにもう時間が無いと感じて、焦りの色が見えていた。

やっとの思いでその会社に辿り着いた二人は、会社の様子を見て、呆然とした。そこは、広大な敷地の凄く大きな会社であることを知ったのである。

呆気に取られた優子は、口を開けて、巨大な施設を眺めた。

「私、そういえばこの会社のCM見たことあるかも」

裕介も、あ然としたまま頷いた。

「俺も。何ですぐに気が付かなかったんだろう」

これでは、まず会社の責任者に会うことなど、到底不可能だろう。そして、誰かもわからない学生が、トラックを調べてくれと言っても、門前払いされるのが落ちだろう。

二人は、もう一步の所まで来て、途方に暮れることになった。

「どないしたんや」

二人の後ろには、いつの間にか、汚れた作業服を着た長身で筋肉質の中年の男性が立っていた。

優子は、落胆しつつ言った。

「この会社の偉い人に会おうと思って来たんだけど、こんなに大きな会社だと思わなくて」

「偉い人になあ。良かったら、事情を聞かせてくれへんか？」

裕介は、少し悩んだが、諦めの気持ちもあって、ありのままを話し始めた。

「おかしな事を言っていると思われるかも知れませんが、実は……」

裕介は、西川運輸のトラックで、自分も含む大勢が重軽傷を負う夢を見たことを、簡潔に語った。その間、優子は、裕介の話は、客観的に見てさすがにおかしな事を言っているなあ、と思っていた。

黙って裕介の話を聞いたその男性は、おもむろに笑い始めた。そして、裕介の肩をぱんぱんと叩いた。

「話はわかった。一緒に来なさい」

その男性は、突然ずんずんと歩き始めると、フィールドウインのゲートの中に入って行った。入口のセキュリティ担当者に挨拶して、そのまま敷地内に入って行った。そこで振り返った彼は、大きく手を振って、二人を呼んだ。

優子と裕介は、顔を見合わせて、小走りでその人に着いて行った。

その男性は、敷地内に建っていた大きな建物に入ると、受付も素通りして、どんどん奥へと入って行き、エレベーターに乗った。何が何だかわからぬまま、二人もエレベーターに乗り階上へと上がっていつ

た。

最上階に到着したエレベーターを出ると、更に奥にあった部屋に入った。

部屋の隅にはデスクがあり、中央にソファが配置されたその部屋は、明らかに偉い人の執務室だった。

「あつ、あのう……。おじさんは、いったい？」

優子は、恐る恐る聞いた。

「まあ、座んな」

その男性に促されて、三人は、向かい合ってソファに座った。

「名乗るのが遅れてすまん。俺の名前は、勝野龍太郎。この会社の代表取締役をやつとる」

優子と裕介は、あまりの都合の良い展開に仰天していた。

「驚くのも無理あらへん。俺だつて驚いてるんやから」

社長の勝野は、にこやかに事情を語った。

「つい、一週間前のことや。俺は夢を見た。二人の高校生の男女がうちを訪れて、トラックを調べて欲しいと頼まれる。俺も、変な夢を見たなあと思つとつたんや。そうしたら、あんたらが来た」

それを聞いた優子と裕介は、更に驚かされていた。

「そ、そんなことつて……」

「信じられない……」

勝野は、嬉しそうに語った。

「これも、何かの縁や。もう少し詳しく教えてくれれば、力になるで」

優子と裕介は、見つめ合つて頷き合つた。

「は、はい。それでは……」

裕介は、これまでの事の詳細を、全て話した。

「なるほどな。わかつた」

勝野は、二人の話を疑うことなく、大きく頷いた。そして、おもむろにデスクに移動すると、何処かへ電話をかけた。

「先日買い取った、西川運輸のトラックがあるやろ。今すぐ、整備担当者数名派遣してくれんか。そうや。整備不良車が混じつとる可能性がある。そう。急いでくれ」

優子と裕介は、あまりの急展開に、呆気に取られていた。

「これでええやろ。でも、確認には、数時間はかかるから、何処ぞでゆっくり休んでくれるか」

裕介は、立ち上がって勝野に深くお辞儀をした。慌てて、優子も一緒に立って、同じようにお辞儀した。

「ありがとうございますー！」

勝野は、ゆっくりと首を振った。

「かまへんかまへん」

勝野は、西川運輸を買い取った経緯を話した。

「あそこはな、俺の親父の知り合いの会社でな、それが縁で会社を買い取った。西川さんは、もともと年齢的な問題で会社を畳もうとしていたんやが、会社を買い取ってくれるところが無うてな。買収を申し出たら、喜んでたで」

それから、三時間後、すっかり暗くなってから、勝野に連絡があった。別室で待っていた優子と裕介にも、その知らせが来たのだった。「お二人さん。見つけたで。一台、ブレーキに不具合がある車両があったで。これで、あんたらのお陰で、事故起こさんと済むやろ」

優子と裕介は、顔を見合わせて喜びあった。

「やったね、裕介くん」

「ああ、これなら、大丈夫だな」

「うちのトラックは、定期的に検査しとるから、他の車両を心配する必要はないで。安心しいや」

「ありがとうございますー！」

二人は、大きく頭を下げた。

「ところで、あんたら今日は、どないするんや？ どっか泊まる所はあるんか？」

裕介が時計を見ると、既に十九時を回っていた。

「優子ちゃん、不味い。早く移動しないと、帰れなくなる」

優子は、出発間際の父の形相を思い出した。帰れないなどと言ったら、夜通し車を走らせてでも、迎えにやって来るかも知れない。

「裕介くん、行こう！」

二人は、何度か勝野に頭を下げてから、大急ぎで会社を出た。別れ際、勝野は笑顔で「仲良うな！」と言っていた。

電車を乗り継いで、大急ぎで新大阪駅に着いた二人は、新幹線乗り場へと走って行った。裕介は、転びそうになった優子の手を掴んで、手を繋いだまま走った。

こうして、東京行き最終の新幹線に乗った二人は、息を切らせて、ようやく安堵していた。

「ま、間に合った……」

「何とか、なったね」

ゆっくりと動き出した新幹線は、徐々に速度を上げて行った。

優子は、裕介の顔を見て、少し不安そうにした。

「未来、変わったと思う？」

「そう思う。だけど、本当に大丈夫かは、当日にならないと、わからないなあ」

心配する優子の手を、裕介はそっと握った。

「信じよう。俺たち、あの夢のおかげでこうやって一緒にいれるように、運命が変わった。事故の件も、必ず変わる。そう信じようよ」

優子は、裕介の顔を見て、頷いた。

夏休みが終わり、九月になった。

夏休み明けには、二人が付き合い始めたことは、皆に知れることになった。どうやら、二人でお祭りに行っていた時に、誰かに目撃されていたようである。

それまで、友達すらいない優子と、何でそうなったのか、周囲はその点が意外で、裕介は質問攻めにあっていた。困った彼は、宇宙旅行の夢などを正直に話し、そういう話をちゃんとわかってくれたから、という説明をしていた。

クラスメートでもある、彩夏や玲香は、その様子を遠巻きに見ていた。寂しそうな顔をしている彩夏を、玲香は励ましたりしているようだった。

そうして、あつという間に、バスケット部がバスで遠征する運命の日が訪れた。

優子は、そのバスの見送りに行ったが、裕介に不安な顔を見せぬよう、無理して笑顔で送った。その日は、一日中、何も手につかず、嫌な予感を振り払うのに必死だった。しかし、結局、何事も起こらず、夕方遅くなって、バスは戻って来たのだった。裕介と再会した優子は、そこで初めて泣き出して、心配でたまらなかったことを彼に伝えた。

その後、優子と裕介は、フィールドウインの勝野社長に連名で手紙を書いた。何事も起こらなかったことを、感謝する内容だ。手紙を投函した後、二人は、フィールドウインについての考察を行った。

ホームページの会社の沿革を見ると、勝野社長の父は、戦後になってすぐに会社を興していた。どうやら、自らの先祖が、江戸時代に飛脚をやっていたことを知り、戦後の混乱期の辛い時期に、先祖に倣って運送業を始めることにしたらしい。その会社を興した社長の父は、今は会長になっていた。

優子は、少し疑問に思っていた事を裕介に話した。

「記憶が定かじゃないんだけど、夢では、あの会社のCM、見たことない気がするの」

「うーん、どうだったかなあ」

裕介は、記憶を辿ろうとするが、既に、夢と現実が重なり合い、前はどうかだったか、細部を思い出すのは難しくなっていた。

「私も、自信がある訳じゃないんだけど……」

優子は、分岐点となった出来事について考えを話した。

「大きな分かれ道が、二つあったと思う。一つは、浴衣を買いに行ったこと。夢ではやらなかったことだから」

「そうだね。あれがなければ、話すようになってなかったかも知れない」

「で、もう一つが、あの事故だと思う。あれは、裕介くんだけでなく、多くの人の運命を変えた事件」

裕介は、不思議に思ったことを呟いた。

「勝野社長が、俺たちが会いに行くのを夢で見たって言ってたけど、ちよつと、出来過ぎだよなあ」

優子は、それについても、考えがあった。

「私ね、全部、何かに導かれたってというか、そうなるように、誰かが手伝ってくれたんじゃないかって……そんな気がするの」

「それ、俺も思ってた。何かさ、時々、誰かに背中を押されるような感じがしたんだよな」

優子も、それは時々感じていたが、裕介がどうだったのか、知りたくなかった。

「裕介くんは、どんな時に感じたの？」

裕介は、少し恥ずかしそうにして、苦笑いをした。

「えーと……。一番は、お祭りに誘うメッセージを送る時、かな」

優子は、それに少し驚かされた。あのメッセージは、凄く自然に感じていたのに、その裏で、彼の苦労があったらしい。

「あれを送るってことは、俺も告白しなきゃいけないから、送ったら、もう後戻り出来ないって、緊張してたんだ。あの時、やらなきゃ後悔するぞ、って誰かに言われた気がしたんだよ」

裕介は、ほんの一月前のことを懐かしそうに思い出していた。優子も、あの告白をする時、同じように感じたのを、思い出した。

「誰か見てるのかなあ」

「それは、それでちよっと困る」

「どうして？」

「見られたくない時だつてあるよ」

「例えば？」

裕介は、本当は優子とキスをしたかと思っていたが、そんなところを誰かに見られるのはごめんだ。それに、どういう時に、そういう雰囲気になるのかが、彼にはわからなかった。急にそんなことをしたら、凄く驚かれそうだし、もしかしたら嫌われてしまうかも知れない。

裕介は、苦笑いをして言った。

「えーと、今は内緒」

「えー？ 気になるよー」

「内緒だつてば」

優子は、頬を膨らませていた。

裕介は、そんな彼女を本当に愛しいと思っていた。

裕介と付き合うようになってからの優子は、徐々に人と話せるようになっていった。自分に自信が持てなくて、人と話すのを放棄してきた彼女だったが、大切な人のお陰で、随分自信がついたのだ。

三年生になる頃には、少ないが、普通に話せる女子の友人も出来ていた。そして、受験も控えていたことから、恋に、勉強にと忙しい毎日を送るようになっていた。裕介は、部活を続けていたが、受験のことを考えると、どこかで引退する必要性も感じていた。

そして、二人は、理工系の同じ大学を目指して勉強に取り組んでいた。裕介の夢は、宇宙飛行士か、何か宇宙に関われる職業だった。優子はと言えば、まだ目標は定まっていなかったが、同じように科学の分野で何か世の中の役に立ちたいと思っていた。

ある日、だいぶ後になってから、勝野社長から手紙が届いていた。二人で手紙を読むと、不思議なことに、一言だけ、こう書かれていた。「頑張れよ」

ずっと二人の背中を押してくれたのは、もしかしたらこの人だったのだろうか。

またいつか大阪に行つて、彼に会いに行こう――。

二人は、そう約束を交わした。

時は流れ、二人の卒業式の日を迎えていた。

卒業証書を片手に抱え、彼らは寄り添って学校を後にした。

これから続く人生を思い、二人はその長い道のりに、足を踏み出した。

続く：

遙か彼方の永劫を超えて7 彼方への旅立ち

遙か彼方の何処かで

時空を精神が飛ぶ感覚は、とても新鮮だった。

あらゆる時間に好きなように移動し、そこで起こる人の人生を、短い時間で理解することが出来る。

すぐ傍に漂うダニエルの精神は、ユミに追いつこうと必死なようだ。

「ダニエル、サムライの人生を見てどうだった？」

「不思議な感覚だ。彼らの人生や、彼らの子孫の運命まで、ほんの少しの干渉で大きく変わってしまった。だが、これが人類を救うことに、どう繋がるんだ？」

「あたしは、先を見てきたからさ。バタフライエフェクトって、良く出来た言葉だと思うよ」

「こんな何百年も昔の変化が、遠い未来に繋がると？」

「そう。でも、もうちよっとだけ、手伝いがいるかな」

「そうなのか？」

「人の性格まででは変えられない。あたしたちが出来るのは、ほんの少しの勇気を持つてもらえるようにすることだけ。失敗しても、試行錯誤をする時間はたっぷりとある」

ユミの精神は、ダニエルを置き去りにして、遙か彼方に飛び去った。「待ってくれ！ ユミ、これは神の領域だ。こんなことが、本当に俺たち人間に許されるのか？」

ダニエルの精神は、無鉄砲な彼女を追って飛んだ。

「あんたが望んで、ここに来たんだろ……」

遙か時空の彼方から、微かにユミの言葉が彼に届いた。

長い旅の始まり

二十一世紀最後の年――。

国立宇宙科学研究所、略称I S A Sは、神奈川県相模原市にあった。

そこで、タイジは、ある決意を固めていた。

「アユーシ、俺は行くよ。もう決めたんだ」

インド人の父と日本人の母を持つアユーシは、その端正な美しい顔が、悲痛に歪んでいた。

「タイジ」

その日タイジは、ちょうど三十五歳の誕生日を迎えていた。研究に協力してくれている大学院生らにサプライズパーティーを開かれ、タイジは少し酔っていた。

「決めたんだ。年内に旅立つ。準備は、順調に進んでいる」

タイジは、研究室の窓際の壁に寄っかかって、グラスのスパークリングワインを飲み干した。

研究室の中央のデスクでは、学生たちがわいわいと騒いでいる。誕生日パーティーに気を良くしたタイジが、今日は無礼講だと宣言してから、歓声を上げた学生らは酒を飲み交わしつつ、交友を深めていた。一頻り学生らと騒いだタイジは、少し離れた窓際で、学生らの様子を見ながら、ワインボトルを抱えて一人で飲んでいた。

タイジの研究室の同僚アユーシは、同じように学生から距離を置き、彼の傍で一緒に飲もうとした最中に、この話をされていた。

「諦めたと思ってた」

アユーシは、寂しそうに下を向いた。

タイジは、夢を実現しようとする少年のような目をしている。もはや、彼女の言葉は、届きそうも無かった。

「俺は、きつとこの旅に行く為に生まれて来た。今ならわかる」

アユーシは、すぐ隣にいるタイジの顔をじっと見つめた。タイジの目は、遠い所を見ていて、アユーシの姿が見えていないようだった。

「じゃあ、お別れなんだね」

「そうだな」

「もう、会えないんだね」

「そう、だな」

「置いて行かれる、私はどうすればいいの?」

「君は、君の人生を歩んでくれよ。俺は、最初から、いなかったと思っ

て欲しい」

「酷いこと言うのね」

「そんなこと無いさ。君は優秀だ。俺のような世捨て人のような男のことは、早く忘れるべきだ」

「ひっぱたいてもいい?」

タイジは、やっとアユーシの方を見た。

アユーシは、タイジにそっと顔を近づけ、躊躇無く口づけをした。すぐに離れたアユーシは、タイジを一瞥すると、怒ったように肩を怒らせて、そのまま研究室を出ていった。

目ざとく、今の光景を認めた学生の一人が、何か騒いでいたが、タイジはいなくなったアユーシがいた場所を、表情を失ったまま眺めていた。

「そういうの、ずるいじゃないか——」

タイジは、グラスを置いて、ワインボトルから直接飲み始めた。

「教授、冷却材の注入が終わりました」

タイジは、学生たちに教授、と呼ばれていた。正確には、ISSASの職員なのでそのような呼称は誤りだ。しかし、タイジは甘んじてその呼び名を受け入れていた。

「生体維持に関する準備はほぼ完了だな。装置の保守点検の準備の方は順調か?」

大学院生のイチロウは、タイジの質問に答えを窮していた。

「まだ問題があります。教授の求める水準には達していません」

タイジはため息をついた。

「原因は、やはりAI?」

「はい。長期の保守の実現には、AIによる自己分析機能を拡張する必要がありますが、私たちの入力が上手く反映出来ません」

AIは、アユーシの専門分野だ。彼女の協力が必要だが、先日の一件から、彼女は何処かへ出掛けたまま、しばらく顔を合わせていなかった。

「アユーシを見かけたら教えてくれ」

「わかりました」

その学生は、I S A Sの地下施設から出て行った。彼が出ていった後、タイジは、大切そうに人工冬眠装置、H S Pの本体を撫でた。

ある日、タイジがI S A Sのキャンパスの外のベンチで休んでいると、かれこれ一ヶ月ぶりアユーシの姿を見かけた。

「アユーシー！」

タイジに気が付いた彼女は、彼が駆け寄って来るのを、立ち止まって待っていた。

「君に頼みが……」

「タイジ」

アユーシは、彼の話の話を遮って話し始めた。

「I S A Sを辞めることにした」

タイジは、驚いて、持っていた書類を、落としてしまっていた。

「え……？」

「しばらく、転職活動をさせてもらった。来月から民間の製薬会社に行くことになったから」

アユーシは、事も無げに語った。そして、驚いたままの彼に、彼女は追い打ちをかけた。

「あなたが、旅立つ決意をしたと言うのなら、もう私はここに留まる理由が無くなった。お別れね、タイジ」

タイジは、自分のしたことを、身を持って理解した。置いて行くつもりだった彼女に、逆に見捨てられたのだ。彼は、最後は彼女に見送ってもらおうと、都合のいいことを考えていた。

「俺は……」

「今さら気にして無い。あなたも、心置きなく旅立ってるし、お互いこの方がいいでしょう。もう、終わったの」

タイジは、最後の最後で、失敗したことを悟った。しかし、気付くのが遅かった。滑稽な自分自身を呪いながらも、彼にはやらねばならない事があった。

「じゃあ、さよなら」

踵を返して、先へ行こうとする彼女を、タイジは必死に呼び止めた。

「待ってくれ」

アユーシは、思わず立ち止まったが、すぐに後悔することになる。「君にしか頼めないことがある」

アユーシは、どんな頼みかおおよそ予想がついていた。小さくため息を付き、彼の方を見ずに言った。

「何？」

「装置の保守を司るAIの調整が上手くいってないんだ。すまないが見て欲しい。これが、最後の頼みだ」

タイジは、深々と頭を下げている。アユーシは、しばらく動かなかった。タイジも、頭を下げたまま、じっとしている。

アユーシは、「もう！」と一言怒りを漏らすと、振り返った。

「これで、最後だから」

アユーシは、ISSの地下施設で作業を行っていた。コンピューターシステムの端末に向かい、ひたすらキーボードを叩き続けた。

その横で、タイジは、時々彼女の様子を窺いながら、端末の画面を眺めていた。何やら、別の場所から何かファイルをコピーしている。不思議そうに見る彼に、アユーシは説明をした。

「これは、シンギュラリティ以前の旧式のAIプログラム。これに入れ替える」

タイジは、アユーシの言っていることに、驚きを隠せなかった。

「今のAIじゃ駄目なのか？」

アユーシは、キーボードの打鍵を続けながら、彼に解説した。

「今のAIには、私は決定的な欠陥があると考えている。いいえ。この言い方は適切じゃない。今のAIは、人間の知能を超える程優秀だけど、経済活動や政治を行うのに特化し過ぎている。あなたが望んでいるシステムは、はつきり言えば、AIにとっては無駄以外の何者でも無い。だから、期待する機能を反映出来ない」

「確かに、政府のAIはそう判断したようだが。末端のシステムは無関係ではないのか？」

アユーシは、手を少し止めてから言った。

「そんなことは無い。今のAIのベースになっているものは、根本は

全て同じコードをそれぞれの分野に適用しているに過ぎない。そこで、ベースを変え、ネットワークから切り離す。そうすれば、この呪縛から抜け出せる」

タイジは、不満そうな顔をしていたが、アユーシは、更に話を続けた。

「あなたの祖父母がここで開発し、実用化一歩手前まで実現したこの画期的なテクノロジーは、政府のAIの決定によって研究が放棄された。あなたが医療用と政府に偽って、再び予算を獲得するまでは」

「それは知っている。だが、この技術には、人類の未来がかかっているというのに」

「理由は簡単。効率と利益。それに反するから。ハイパースリープポッド、HSPは、遠い宇宙へ旅する為の技術。効率と利益を、短い時間で最大限得ることを最優先にAIは追求する。恒星間航行なんて、利益を得られるのに数十年、数百年、もしかしたら、もっと先かも知れない。しかも、それだけ待っても、どんな成果が出るかも実際にはわからない。だから、AIには、無駄なものに見えている」

「君も、そう思っているのか？」

「この事実は、AIを扱う技術者の間でも、問題になっているし、一般論として、こういった技術が無駄とは言わない。けれど、私個人としては、もっと身近な幸せの方を優先したい。そういう意味では、AIの考えに近いのかもね」

アユーシは、暗い表情で、タイジの目を見つめた。

「あなたは、違うようだけど」

そう言われて、彼は、しばらく黙ってしまった。

アユーシは、再び端末に向かい、打鍵を始めた。

しばらくして、タイジは、独り言のように呟いた。

「俺の祖父母は、人類の未来を常に考えていた。とても、優秀な科学者だった。祖父は、宇宙飛行士の夢を諦めてまで、恒星間航行の要となる、人工冬眠技術の開発に、生涯を捧げた。祖母も、一緒にそれを支えた。孫の俺が、これを完成させ、やり遂げるのは運命だよ」

アユーシは、ひととき大きな音でキーを叩いた。

「終わった。月末までは、ここにいるから、その間に調整が上手く行かないなら、言つて。それで、私も心残りを残さずにすむから」

タイジは、少し寂しそうに言った。

「ありがとう……」

アユーシは、デスクから立ち上がった、去り際に彼に言った。

「あなたが旅に出る決意のきっかけになったもの。前に話してくれた、夢で見てきたつていうもの。これを作ったあなたの祖父のヒムロ夫妻。これらのことは、自分の意思で無い何かに導かれているように私には見える。残念だけど、あなたの気持ちを、もう理解出来そうもない」

踵を返して去って行く彼女を、タイジは黙って見送るしかなかった。

タイジは、小さな頃から、ある夢を見ていた。

それは、遠い未来で、人類が緩慢な死を迎えて行く様子だった。繰り返し、その夢を見たタイジは、いつしか、現実を起こる事なのではないかと考えるようになった。父母は、この話を悪い夢だと言つて取り合ってくれなかったが、何故か祖父母は、真剣にこの話を聞いてくれた。

特に祖母は、笑顔で、幼い彼に優しい言葉で語った。

「きつとね、誰かがあなたを見守っているんだよ。絶対に忘れずに、その記憶を大切にしておね」

そう言つて頭を撫でてくれた祖母の表情を、タイジは今でも時々思い出すことがあった。祖母は、何かを知っていたのかも知れない。

そのようなことがあったからなのか、タイジはおばあちゃん子で、幼い頃から祖父母の行っている科学実験に興味を持つようになった。

その祖父母は、ちょうどその頃、冷凍冬眠実験で大きな成果を収めていた。既に、チンパンジーによる実験を成功させ、人間による実験も成功していた。その後、何人もの人が、人体実験に参加するようになっていた。一度も失敗することなく、遂に十年間の冷凍冬眠からの生還を成功させ、実験の最長記録を達成していた。

その技術は、完全に実用化したように見えた。

しかし、その頃の世の中は、シンギュラリティに夢中になっていた。遂にAIが人類を超えたと宣言され、まだAIを採用していない企業や国家が、こぞつてこの流行にのつた。そして、日本でも、AIが政治家の支援をするようになると、不正を働くような政治家よりも、AIの方が優秀だと評価され、次第にAIが様々な政策を考え、実行されて行くようになったのだ。

祖父母が引退する頃には、既に国家予算の決定にも関わっていた。そんな時に、人工冬眠実験への予算がおりなくなつたのだ。既に、十分な成果を上げており、今後の宇宙探査計画の立案と共に、再度研究を再開する、という理由だった。

恐らく、アユーシの言うとおり、国家の目の前の利益に繋がらない、無駄なものと判断されたのだろう。

その頃には、研究に生涯を捧げた祖父母は、既に亡くなつていたので、その悲報を聞くことが無かつたのは、唯一の救いだった。

幼い頃から祖父母の実験に感銘を受けていたタイジが、ISSに入ろうと考えたのは、必然でもあつた。そして、何とか実験を続けて、祖父母の夢だったという、恒星間の宇宙探査を実現させたいと思つていた。

それから、大人になつたタイジは、祖父母の意思を継ごうとISSに入った。相模原キャンパスの地下施設に放棄されていた、このHSPの元になつた人工冬眠装置を発見するのは、それからすぐのことだった。

こうして、医療用という名目で、装置の研究費を勝ち取つたタイジは、数百年もの長時間に耐えられるように、装置の本格的な改良に取り組んだ。人工冬眠そのものは祖父母が完成させていたが、それ以外の周辺機能を充実させ、長時間の自己メンテナンス機構を完成させて、初めて本当の意味での実用化と言えるだろうと、様々な研究を続けた。

HSPのメンテナンスを行う極小ロボットなどの自己修復機能、冷却材などの材料の生成、電源のフェイルセーフ機構、自動覚醒機能など、恒星間航行中に想定され得るあらゆる機能を検討して、実際に組

み込んで行った。

アユーシとは、その過程で初めて出会い、一緒に研究や実験に取り組んでいった。若い二人が急速に接近して、男女の仲となるには、それほど長い時間を要しなかった。

それから、十年ほどかけて、様々な機能を拡張したHSPに、タイジは自分自身が乗り込んで、最終的な実験を行った。

その一年後に、自動覚醒機能によって計画通り生還した彼は、アユーシと実験の成功を祝ったが、この時の実験が、彼らの運命を変えることになった。

実験中は、当然、タイジの意識は無かったが、彼は夢を見ていた。それは、長い、長い夢だった。

彼が幼い頃に見た未来の光景を、再び見てしまったのだ。そして、それだけでなく、様々な場所や時間の出来事を見たり体験し、まるで現実かのような記憶が残っていた。

何故、遠い未来に人類は滅んでしまうのだろうか？ と彼は疑問を感じていた。あれが、本当に未来の記憶ならば、何か重要な意味がある、と彼は考えるようになった。タイジは、祖母が言っていた「絶対に忘れずに、その記憶を大切にしてくれ」という言葉を思い出すと、その記憶の意味や、運命のようなものを考えるようになっていった。

その夢を見ている時に、何者かの意味にも出会っていた。

彼らはタイジに、こう言ったのだ。

「人類を救って欲しい」と。

それが、どういう意味か、最初はタイジはわからなかった。

だが、タイジは気づいてしまった。

この完成したHSPを使えば、未来に旅立てるのではないか——？
タイジは、運命の歯車が、静かに音をたてているのを感じた。何かわからない、とてつもなく大いなる意志が、タイジを誘っているかのようだった。

未来に行き、人類を救うことが自らの使命なのか？

日増しに、そのような思いに囚われた彼は、本当にそれを実行しよう、と決意を固めるまで、長くはかからなかった。

「教授」

もの思いにふけついていたタイジは、研究を手伝っている大学院生のイチロウに声をかけられて我に返った。

「どうした？」

HSPのチエックをしていたイチロウは、不思議そうな表情で、タイジに尋ねた。

「AIを古いバージョンに入れ替えましたね？ アユーシさんがやっただと思えますが、何故ですか？」

タイジは、彼にアユーシの言っていたことを話し思い出しながら話した。

「最新のAIは、長期メンテナンスの自己分析を途中で止めてしまわない。AIの基本的な効率と利益を求める機能が、無駄な事をしていないと判断してしまうことが原因らしい」

「そんなことが？」

イチロウは、何か考え込んでいた。彼の専門は、生命科学だったため、AIはそれほど詳しくはない。

「もしかしたら、これは、欠陥なんじゃないでしょうか？」

「そうかも知れない。AIを開発したのは人間だ。誰かが改良して、いつかもっと良いものになるさ」

「教授、このHSPの研究に必要な予算を止めたのは、政府を支援するAIでした。これは、AIが無駄と判断すると、お金が出ないということの意味します。こういうビジネスに直結しない研究には、国が予算を割く必要があります。でも、お金が出なければ、研究開発は進められません。それなのに、一方では、AIが決めた人工子宮の研究開発が進められています。世間では、奴隷製造機なんて、揶揄する言葉もあるぐらいのものです。AIは、このままでは、効率だけを求める世界を作って行くんじゃないでしょうか？ 僕らの間では、時々議論になることがあります」

タイジは、それを聞いて考えにふけた。それが、そのまま口をついて出てしまった。

「……人類を救うには、AIを止める必要がある？」

人類を救うと聞いて、タイジが言っていることに、イチロウは少し首をひねった。

「AIは、これからの時代、人類の発展に不可欠なものでしょう。でも、皆、心配しています」

イチロウは、HSPのチェックを終えると、彼に言った。

「教授、準備が出来ました。いつでも使えます。教授が行ってしまうと寂しくなりますよ」

タイジは、彼の肩を叩いて言った。

「引き続き、研究は続けて欲しい。俺の実験データは、大いに役立つだろう。俺は、まずは、百年後に目覚める。その時代のISASの連中に、HSPが間違いない役に立つことを証明するよ。そこから、更に何百年か先の時代まで行き、これが正常に機能することを証明するさ。そうすれば、いつか、銀河の果てまでだって、人類は行けるようになるだろう」

タイジは、それからしばらくISASに休暇をもらい、日本のいくつかの場所を尋ねていた。実家、卒業した学校。旅行で訪ねた思い出の場所。そんなところを、いくつか巡り、たった一人でこの時代との決別をした。実家で、両親に泣かれたのが、一番辛かったことだが、決意を変えるつもりは無かった。

最後に、祖父母の墓参りにも行った。そこでタイジは、二人への感謝を改めて伝え、祈りを捧げた。

「行ってくる」

HSPで旅立つと決めた日、タイジは休暇から戻っていた。しかし、既にアユーシは居なくなっていた。彼女のデスクなど見て回ったが、もう、何もない。

彼女と過ごした日々を思うと、切なかった。本当に、自分の最後の態度は馬鹿だったな、と後悔したが、既に遅かった。だが、考えようによっては、早く思いを絶ち切ることで、旅立った後の悲しむ時間が互いに少なくて済むというものだ。

ISASの地下施設には、大勢の職員と、彼の研究を手伝った学生らが訪れていた。皆、タイジの旅立ちを見送りに来ていたのだ。

彼らは、タイジと握手したりして、最後の別れを惜しんだ。そして、彼の上司に促され、彼は最後の挨拶をおこなった。

「皆さん、私の為に集まってくれたことに感謝します。私は、皆さんご存知の偉大な科学者、ヒムロ夫妻の孫です。二人の意志を継ぎ、恒星間航行が必要となる、この人工冬眠技術の実用化を目指しました。しかし、世はまだそのような時代では無く、私は未来へと旅立つことにしました。未来では、いつか実際に、宇宙船で遠い宇宙の何処かへ出掛ける時代が来るでしょう。この技術が、本当に役立つか、私は身を持ってそれを証明し、そして出来れば、祖父母が叶えられなかった宇宙旅行の夢を、実現したいと思っています。それでは、行って参ります」

タイジは、そこで礼をすると、集まった人々が大きな拍手をしてくれた。

今、タイジが皆に語った事は、あの夢が現実では無かった時に果たす目的だ。だが、あの夢で見たことが、現実になるのなら、そのような未来になる前に、人類は緩慢な死を迎えていることになる。

どちらにせよ、もう決めたことだ。

そこに到達する必然、運命のようなものを、彼は感じていた。

彼は、HSPのハッチを開き、身体を中に入れた。狭いポッドの中に寝そべると、冷却材を体内に取り込む為のマスクを脇から取り出し、それを鼻と口を覆うようにはめた。

内部のボタン操作でハッチが閉じると、小さな窓から外で見守ってくれている皆の顔が、入れ違いに覗いた。別れを惜しんでくれる彼らに、タイジは心の底から感謝した。それでも、彼にとっては、アユージが、そこに居ないのが、最後の心残りだ。

タイジは、冷凍冬眠を開始するボタンに手を触れた。

お婆ちゃん、行ってくるよ。

それから、アユージ。

本当に、すまなかった――。

タイジがボタンを押すと、HSP起動時の小さな唸り声のような音が響いた。しばらくすると、冷却材が彼の鼻と口から吹き込まれ、彼

の意識は、遠くなつていった。

現れた希望

ユミは、意識が漂うままに任せていた。

ここが、いつで、どこなのかもわからなかった。

何処かではぐれたダニエルが、何処かに存在しているのは感じる。

でも、助けてあげない――。

彼女は、まるで悪いことをしているかのように、笑っていた。

「もうすぐかな」

何かが起こるのを、ユミは感じていた。

そして、それは突然やって来た。

「やっと来たね」

ユミは、やって来た存在に語りかけた。

その存在の意識は、まだ幼い少年だった。

何が起きているかもわからず、当惑しているようだった。

「困るよね。そりゃそうだ。でも、あたしにも、よくわかんないんだ。

でもね、あんたは、あんたの時間軸でいう、過去に存在した、いろん

な人々に生かされて、ここまでやって来た。あたしも、ほんの少し手

伝ったからわかる。あんたという存在は、この宇宙で特別なんだ」

その存在は、言っていることの意味がわからないようだった。

ユミは、その存在の意識に向かって、大切な、魔法の言葉をささや

いた。

だから、お願い。

人類を、救って――。

続く…

遙か彼方の永劫を超えて8 途中下車Part 1

二十二世紀最後の日――。

タイジは、HSPの覚醒機能によって、予め設定したこの日に目覚めた。

解凍されて目覚める時の感覚は、非常に不快なものだった。彼は、身体の硬直が解けるまで、ポッド内で横たわったまま、じっとしていることにした。

タイジが事前に予想した通り、人工冬眠で意識が無い間に、またあの夢を見ていた。夢の記憶は、以前よりもかなり鮮明になって来ている。今度の夢では、何故かタイジは月にいた。そこには、何か重要な物が埋まっており、人知れず、誰かがそこにいて、何か重要なことをやっていた。どういう意味か、タイジはわからなかった。今は気にしないことにした。

タイジは、十分に身体が動くようになったか、腕を動かして確認した。

これなら、動けそうだ。

タイジは、HSPのハッチを開くボタンを押した。

ハッチが開いて、起き上がると、そこには、誰かが彼を見守っていた。

「氷室泰司さんですね？」

タイジは、まだぼうつとした頭で、話しかけてきた人物を眺めた。端正な顔立ちをしたその人物は、まだ若い男性で、胸にISSAのセキユリティカードをぶら下げていた。

タイジは、頷いてから、その男に話しかけようとした。しかし、上手く言葉が出ない。人工冬眠からの覚醒が、まだ身体の自由を奪っている。

「無理しないで下さい。私は、ISSAの職員です。あなたが、この日、この時間に目覚めると聞いていたので、ここで待っていました」

男は、タイジに手を貸して、彼がHSPのポッドから出てくるのを手伝った。

男が用意した椅子に倒れるように座ったタイジは、一息ついてもう一度喋ろうと試みた。

「……い、今は、二二〇〇年かい？」

男は頷いた。

「はい。ようこそ、二十二世紀へ。と、言っても、もうすぐ二十三世紀ですけどね」

タイジは、あれから正確に百年経過し、装置が正常に動作したことに安堵した。

「申し遅れました。私は、サトシ2といいます」

タイジは、違和感を覚えて、男の顔をまじまじと見た。

「気にされているのは、私の名前の数字の事ですよ？ ご存知無いでしょうか、ご説明しましょう。あなたが、冬眠している間に、政府は、少子化対策として、人工子宮を開発しました。厚生労働省の管轄で、国で人工的に子供を産み、育てる機関が運営されています。私は、そこで誕生しました。同一の精子と卵子を交配して子供を誕生させた場合、AIが決めた名前と、誕生順にナンバリングが行われます。この番号は、ある精子と卵子の組み合わせで生まれた子供の二番目であることを意味します」

タイジは、出発前に計画段階だった人工子宮が、既に実用化され、運用されていたことに、隔世の感があった。

「番号とは、随分酷いじゃないか。君は、嫌じゃないのかい？」

サトシ2は、にこやかに答えた。

「ご存知ないでしょうから、仕方ありませんね。先進国では、自然分娩で子供が誕生することは、だいぶ減って来ています。約七割方、人工子宮で子供は産まれます。今では、名前に番号が付いている人の方が多いんですよ」

タイジは、この時代の男女が、どのような恋愛や結婚生活を送っているのか、更なる疑問が湧いてきた。だが、この調子で話していると、彼を質問攻めにするようになってしまおうだろう。

「それは、失礼した。よければ、少し案内してもらって、そういった歴史を調べる為の端末を用意してくれると、君を煩わせずに済みそう

だ」

サトシ2は、笑顔で言った。

「もちろんです。立ってますか?」

ISSASの建物は、様変わりしていた。HSPが設置されていた地下施設こそ、百年前と変わりなかったが、全く新しい建物へと生まれ変わっていた。

窓の外を眺めると、外の様子はそれほど変わっていないなかったことに、タイジはほっとしていた。

「この役割も、百年前とは大きく変わっています。具体的な宇宙開発の計画が推進されていますので、それに必要となる研究開発が行われています。月には、政府主導の基地が建設され、資源開発を行っています。今は、月面での土木建築の重機の研究開発が、盛んですね」

タイジは、聞くこと全てが驚きの連続だった。

「月に、普通の人が訪れて行けるようになったのか?」

「それはこれからですね。二十二世紀は、そういう過渡期になりました。二十三世紀は、本格的に宇宙進出が行われるでしょう。ISSASの役割は、昔より随分重要になりました」

タイジとサトシ2は、エレベーターで最上階へと移動した。案内された会議室で、タイジは待っているように伝えられ、そこで椅子に座っていた。サトシ2が部屋を出ていってしまったので、タイジは落ち着かない様子で、そこで一人で待つことになった。

しばらくして、サトシ2が戻って来ると、一緒に年配の男性数名が部屋に入ってきた。

「氷室泰司さんですね。私は、宇宙科学研究所所長のケン7です」

タイジは、所長のケン7と握手を交わした。何故、名字を名乗らないのだろうか、と疑問に思ったが、きりがないので、ここでは控えることにした。

会議室の椅子に全員が腰掛けると、所長のケン7が最初に話し始めた。

「あのHSPとあなたの存在は、長い間、歴代のISSASの所長も気にかけていました。こうして、実際に百年前の生き証人である、あなた

に会えて光栄です」

「ありがとうございます。この建物も、建て替えが行われたようですが、地下施設を維持して下さったようで、私としても感謝しています」

所長は、笑顔で、首を振った。

「とんでもない。我々にとつても、あなたの研究は大切なものです。これからも、維持して行くので、ご安心下さい」

タイジは、いろいろな意味で安堵した。所長もナンバリングがあるので、人工子宮で誕生した人間なのだろうが、好意的だったこと、そして、I S A Sの地下施設の維持を約束してくれたことに、大いに感謝した。

「私の時代では、政府のA Iは、恒星間航行用の人工冬眠装置の開発に消極的でした。私は、医療用という建前で、あれの研究開発の予算を政府から頂いて進めました。今は、その辺りはどうなっていますか？」

所長のケン7は、大きく頷いた。

「懸念は、ごもつともです。現在、政府は太陽系内の資源開発に積極的に取り組んでいます。しかし、太陽系外の宇宙探査は、中々承認されませんね。あのN A S Aでさえも、今世紀中に探査が承認されて飛ばした探査機は、一機だけでした。あなたの研究の場合、当初の目的通り、医療用の装置として報告している為、予算の獲得に問題はありません」

「それは、本当に良かった。私は、再びあれに乗り、もつと先の時代まで行くつもりですから」

所長とは、別の職員が口を開いた。

「今は、民間の病院で、あのH S Pを元にした、医療用人工冬眠装置が、何処にでもあります。あなたの研究は、大いに世の中の役立っています」

「ありがとうございます。確かに、実用化にこぎつけたのは私のチームでしたが、そう言って頂けると、基礎技術を完成させた祖父母も喜ぶでしょう」

「そういえば、あの氷室夫妻のお孫さんでしたね。彼らの功績は、この

時代でも、語り継がれていますよ」

「そうですか。私は、祖父母のことを誇りに思っているのです、そう言っ
て頂けると、自分の事のように嬉しいですね」

彼らは、タイジの功績を労い、互いに感謝しあった。

「それで、またすぐに、旅立たれますか？」

「そうですね。一休みしたらと思っ
ています。可能なら、この時代の
ことや、百年間に何があったか知
ってから行こうと思っています。そ
ういったことが可能なインターネッ
トに接続可能な端末があればお
借りしたいのですが」

「どうぞ、自由にお使い下さい。サトシ2、氷室さんを案内してあげて
くれ」

サトシ2は頷くと、タイジを手招きした。

「こちらへどうぞ」

タイジは、案内されたISAS内の別の階の会議室に通され、サト
シ2が持ってきた携帯端末を渡された。

「使い方がわからなければ、仰つて下さい。私は近くに待機していま
すので」

「何から何まで、ありがとうございます」

サトシ2が部屋を出ていったので、タイジは再び一人になった。端
末の電源を入れると、画面が表示された。昔使っていた端末と、それ
程違いは無いようだ。

タイジは、ブラウザを起動して、インターネット上の情報を幾つか
検索した。

検索キーワード：AI 政治

検索結果：五百三十二万八千七百五十一件

タイジは、検索結果上位に表示された記事のうち、気になる内容を
確認した。

記事タイトル：各国政府が導入したAIにより、国境が無くなる日
が訪れる

記事本文：二十一世紀後半に、技術的特異点（シンギュラリティ）を
迎え、本格的なAIの運用が始まってから一世紀以上、世界は、大き

な変化を迎えようとしている。二十二世紀は、世界中の国家の合併や併合が大いに進んだ。AIによる政策、政権運営を積極的に推進した先進国間で、国家同士のお見合い、そして合併や併合をする国が増加している。それまでは、イデオロギーや、宗教の違いを乗り越えられず、不可能と思われていたことである。その壁を乗り越えた大きな要因は、二つある。

・ 政府に導入されたAI

政府が導入したAIによって、国家間の違いが希薄化した。似たような方針の政策が取られることによって、国家間の違いが以前に比べると、大幅に少なくなった。

・ 人工子宮による人の誕生

先進国では、少子化が進んだ二十一世紀の問題を解決する為、人工子宮の運用が始まった。これによって、政府のAIが運営する人工授精児たちの育児や教育が進められると、イデオロギーや宗教等の違いを生むような影響下に置かれずに育つという。そういった教育を受けて成長した子供たちが、政治や経済の分野で活躍するようになったことが、関係している。

以上の理由によって、多くの国民の間で、国家を超えた共通意識が芽生え、合併をし易い環境が出来たのである。そして、戦争やテロという過去の忌まわしい記憶から逃れられず、数世紀を経ても、憎しみや葛藤を抱える人々は、現代では少数派となった。今後、更にこの状況は先進国だけで無く、中小規模の国家にも影響を与えることになるだろう。世界が一つになる日も遠い未来では無いかも知れない。

タイジは、記事を読んでしばらく考えを巡らせた。

出発前に、AIが人類が滅びる原因ではないかとも考えていたが、それは間違いだったようである。この記事に書かれていることは、人類が長い間望んでいた世界平和とも言うべきことが、実現しようとしているのでは無いだろうか。少なくとも、これを妨げる理由は無いららば、何故人類は、滅びようとしているのか？

タイジは、夢で見た人類の緩慢な死に至る情景は、現実には起こらないのではないかと考えた。

検索キーワード：宇宙開発

検索結果：三万四千九十一件

再び、タイジは気になった記事を開いた。

記事タイトル：月面都市建設計画

記事本文：日本政府は、新たな月面開発計画を発表した。既に、米
国やEU連合と共同で、月面基地を設けて資源開発を行っているが、
今回の発表は、普通の人々が住めるようする、月面都市建設計画であ
る。今後、二十四世紀までの百年間をかけて、月面に都市建設をする
という。これにより、月面の資源採掘を容易にすると共に、火星や金
星等の地球に近い惑星にも、資源開発の手が広げられる。今後、月面
都市建設に必要な機材の研究開発や、都市建設の為の新たな公共事業
に、多くの企業が参加する事が予想されるだろう。また、将来、これ
らの惑星や衛星から採掘される資源により、更なる文明の発展が期待
されるだろう。

タイジは、今回の冬眠中に夢で見た光景を頭の中で描いた。確か
に、月面に都市があつたのをタイジは目撃していた。何か、大事なこ
とをやっているのを見たと思うのだが、これは、どう考えれば良いだ
ろうか？

こういう時は、祖母の言葉を振り返ってみる。

絶対に忘れずに、その記憶を大切にしていね——。

タイジの祖母の言葉を思うと、気持ちを落ち着かせることが出来
た。

お婆ちゃん。大切な記憶なら、行って確かめてみるよ。

その後、それ以外にも、いくつか気になったキーワードを検索した
タイジは、もう十分と思い、端末の電源を落とそうとした。

ふと、タイジは思い留まり、端末に次のキーワードを入れた。

検索キーワード：アユーシ I S A S

そこまで入力して、タイジの手が止まった。

そんなことを調べてどうする？ 彼女は、既に亡くなっている。だ
が、あの後、彼女は、どういう人生を送ったのだろうか——。

タイジは、もう、意味が無いことだと、自分自身に言い聞かせ、静

かに端末の電源を落とした。

タイジは、立ち上がって部屋から出ると、サトシ2を呼んだ。
次の旅に出る為だ。

続く…

遙か彼方の永劫を超えて9 途中下車Part 2

時に、時代は二十四世紀初頭――。

貧民街で廃材を漁っていた少女は、目ぼしいものが見つからず、悪態をついて辺りに落ちていている物に当たり散らした。静かな貧民街で、けたたましい音が響く。

仕方無く、暗い貧民街を出ようと歩き始めた少女は、五百メートル程離れた街の灯りの方へと向かった。この周辺には、廃墟や、家の跡のような痕跡しかない。暗い通りの所々には、普段は廃墟に住む数人の人々が、疲れ切った様子で座っている。

彼らにとつては、こんな所に迷い込んだ小娘など、いつもならカモでしか無かったが、彼女は違った。金品を奪おうとして、既に返り討ちにあつたことがあるからである。彼女は、この辺りでは、暴力的な少女として有名だったのだ。

少女は、通りに座る年老いた老人に近付くと、何か話しかけた。老人がしぶしぶ出した箱を受け取ると、少女は嬉しそうににやりと笑つた。

彼女は、受け取った箱の中身を一本取り出すと、口に啜えて持っていたライターで火を付けた。煙草の煙をくゆらせた少女は、足取りも軽く、街の灯りの方へ向かった。

その少女、ユミは、腹が減っていた。

腹が減ると、無性にいらいらとしてしまう。煙草なんて、腹の足しにもならないが、あれば多少は誤魔化せる。だが、本格的に減った腹をどうするか、建物の影に潜んで、明るい街の通り沿いの店を物色した。もちろん、金は持っていない。この辺りでは、電子マネーを持っていない者は、紙切れ一つ手に入れることは出来ない。

何度も泥棒や、無銭飲食を繰り返した彼女は、この辺りではすっかり危険人物として、目を付けられていた。彼女は、潮時だと思っていた。別の街に移動しなければ、姿を見られただけで捕まってしまうだろう。今日の罪を最後に、新天地へ向かおう、と彼女は心に決めた。

帽子を深くかぶった彼女は、無人精算のコンビニエンスストアの

ゲートを飛び越えると、大急ぎで食料品を掴んだ。すぐさま、入つて来たゲートに取つて返すと、犯罪者を閉じ込めようとする店のシャッターの隙間を潜り抜け、通りをひた走った。

ユミは、数キロも走つただろうか。辿り着いた公園内のトンネルのような遊具の中に入って、一息ついた。

そして、手に握り締めた盗んだ食料を、食べようと見直した。しかし、食べ物だと思つていたそれは、良く見ると、本物に似せたダミーだった。

恐らく、ユミが侵入することを、店のAIが予測して、取りやすい位置に予め陳列しておいたのだろう。

ユミは、激昂すると、そのダミーをトンネルの壁に叩きつけた。

突然、泣き始めた彼女の声が、公園の外にも響いていた。

日本は、米国の州の一つになつてから、半世紀が過ぎようとしていた。AIは、何処にでもあり、人々の暮らしや、国家の運営まで、欠かせないものになっている。

人工子宮で誕生する子供たちも、既に全体の八割以上となつている。

そんな時代にあつて、ユミの母親のように、人工子宮では無く、自然分娩で出産するのは、貧民街で暮らすような貧乏人だけだった。ユミの母親は、娼婦を生業として見知らぬ男の子を妊娠してしまい、堕ろす金も無く、やむを得ずユミを産んだのだ。望まれぬ形で生を受け、ユミは、小さな頃から様々な非合法な手段に手を染めて、今日まで生きてきた。母親は、ユミが十歳の時に蒸発し、彼女はたった一人で強く生きねばならなかった。

そんな彼女だったが、望んでそのような暮らしを選んだ訳でも無く、思い出したように、自らの不幸に、人知れず涙に暮れることもあった。

その時も、たまたまそんな時だったのだ。

ユミは、次第に涙が溢れるのが治まると、何処からともなく、食べ物といい匂いが漂つて来るのに気が付いた。

彼女は、遊具のトンネルを抜け出すと、ふらふらと匂いの方へ引き

寄せられていった。

公園の外から匂ったのは、一杯のカップ麺の香りだった。公園の低い塀の上に置いてあったそれを、ユミは恐る恐る手に取った。既に、お湯が注がれており、食べ頃と思われる。

辺りを見回しても、人の気配は無い。

ユミは、ご丁寧にかップ麺の上に置いてあった割り箸を割ると、勢いよくそれを食べ始めた。

ユミが、半分ぐらい食べた頃だろうか、背後に人の気配がした。彼女は、食べ物を取られまいと、気配の方を振り返って身構えるが、その人物は五メートル程の距離で立ち止まり、ユミの様子を眺めていた。

「誰だ！」

ユミは、警戒して、その人物、男の方を睨みつけた。

男は、ため息をついて、彼女の方へ話しかけた。

「探したぞ。情報が余りにも曖昧なんで、会えないかと思ったよ」

ユミは、その間も食べ続けた。何故なら、この機会を逃したら、また食べ物にありつけないかも知れないからだ。

「これは、お前のか？ 言っておくが、もう返せないからな」

男は、首を振った。

「いらないよ。君の為に置いておいたんだから」

麺を食べ終えたユミは、今度は汁を飲み始めた。そして、それを飲み干すと、その男に言った。

「あたしに用があるみたいだな。悪いけど、身体目当てなら諦めろ。そこまで落ちぶれちゃいない」

男は、両手を広げて再びため息をつく。

「俺も、そこまで落ちぶれちゃいないさ」

ユミは、首を傾げた。

「あんた、一体誰だ？」

男は、腕組みをして、少女を見つめた。

「君の名は、橘優美で間違い無いな？ 俺の名は氷室泰司だ。訳あって、旅をしている」

タイジの車に乗ったユミは、彼に渡されたクツキーの袋を抱えて、助手席で車窓の灯りをぼんやりと眺めていた。時間はもう遅く、深夜になっていった。

彼女が、タイジの誘いにのつたのは、食べ物に釣られてのことだった。一体、何処に向かっているのかも、彼は話してくれなかった。

二時間ぐらい車に揺られたらどうか。自動運転車に音声で指示をした彼は、広い敷地の入口のゲートを抜け、どんどん奥へと車が入って行く。そのゲートの脇には、プレートに、「宇宙科学研究所」と書かれていた。

「ユミ、着いた。ちよつと来てくれ」

入口のドアのガラスは既に無く、タイジはそこを潜り抜けて、先の中へと入って行った。

ユミは、食べ物に釣られて、こんな所に来て大丈夫だったか少し後悔していた。もしかしたら、この男は、臓器売買をしている業者ではないか、などと不吉な予感が深まっていった。

「心配ない。一緒に来てくれ」

ユミは、仕方無く、意を決して、その建物の入口を潜った。

建物の内部は、閑散としていた。そこに居を構えていた者たちが、ここを出て行って数年は経過していると思われた。

ユミは、辺りを警戒しながら、タイジの後を追った。そのタイジは、時折り彼女を振り返りつつも、どんどん奥へと進んで行き、地下へと降りる階段を下って行った。タイジが照らす携帯ライトの光だけが、階下を動いて照らしている。明かりはそれだけで、真つ暗闇だった。

ユミの心臓は、ときどきと早音を打っていたが、前に行くタイジは、足を止めない。地下の廊下を進む彼は、途中にあった部屋の扉を開いて、そこで立ち止まってユミの到着を待っていた。仕方無く、ユミは気が進まなかったが、その部屋の中へ入った。タイジが、壁のスイッチを操作すると、部屋が一気に明るくなった。

部屋の中央には、何やら大きな箱のような装置が置いてあった。不思議そうに、その装置を眺めるユミの後ろから、タイジが歩み寄って、その装置の上に手を置いて立ち止まった。

「これは？　まるで、棺桶だな」

タイジは、ユミの言ったことに、暫し考えていた。「なるほど。言い得て妙というのは、このことだな。確かに、こいつは、棺桶の様なものだ」

タイジは、微笑して、その装置の表面を撫でた。

それから彼は、装置の脇のデスクの椅子に手を差し伸べて、ユミに座る様に促した。不安な気持ちを隠せぬまま、ユミはその椅子に座った。先程、タイジが与えたクッキーの袋を大切そうに抱えたままだ。

タイジは、装置に寄りかかってユミに話を始めた。

「着いてきてくれてありがとう。君に、頼みがあるんだ」

ユミは、眉をひそめて、男が何を要求するのか、少し怯えた様子を見せた。

「この棺桶……。これは、人工冬眠の為の装置だ。正式には、ハイパースリープポッド、略してHSPという。俺は、これを使って、二百年前からやって来た」

「はあ？」

ユミの疑いは、一層深くなっていた。

「信じるかどうかは、今はいい。頼みというのは、こいつを君に月まで運んでもらいたいんだ」

「っ、月？」

タイジは、驚くユミに、微笑んで頷いた。

「そうだ。今、月面に都市が建設されているだろう？　こいつを、その都市に設置して、安全を確保して欲しい」

ユミは、開いた口が塞がらなかった。

「何を言っただ、あんた。頭がいかれてんのか？　見りや、わかるだろう。あたしみたいな貧乏人が、どうやって、月に行けるって言うんだよ」

タイジは、目を閉じて頷いた。

「そうだな。今の君には、無理だ。だが、未来の君なら、出来る」

「なんだそりゃあ。未来のあたし？　本当に、どうかしてるな、あんた」

ユミは、呆れた顔で、憐れみの表情でタイジを見つめた。だが、そのタイジは、大真面目で頷いた。

「かもな。だが、俺は、知ってるんだ。未来の君に教えてもらったから。君のこの時代の居場所、腹を空かせてるから、食べ物で釣れば言う事を聞いてくれるってことも」

ユミは、憤慨して言った。

「ふ、ふざけるな！ 誰に、あたしの事を聞いて調べたかしらねえけど……」

タイジは、彼女を遮ると言った。

「今は、信じられなくても、構わない。君は、これから、とある偶然によって、月面の建設を請け負うある企業の社長に出会う。その人は、君にとつて、とても大切な人になる。面接を受けた君は、その行動力を気に入られて採用され、彼と一緒に月に行く事になる。今の貧乏暮らしとは、その時におさらばさ。俺の頼みは、その時に、俺の話を思い出してもらって、このHSPと一緒に月に運んでくれれば、それでいい」

貧乏暮らしから抜け出せるという、彼の予言めいた話に、彼女は少しだけ興味を持った。少し考えていた彼女は、ふと顔を上げて言った「で、その見返りは？」

タイジは、初めて彼女の言う事に驚いた。

「あんたの言うとおりの事が、本当に起こったら、考えてやってもいいよ。でも、こんな大きな物を月まで運ぶとなれば、相当金がかかるはずだ。何か、見返りがなきや、手伝うのは難しいな」

タイジは、顎に手を当てて考えていた。

「わかった。俺の電子マネーを君にあげよう」

タイジは、ポケットから一枚のカードを取り出すと、彼女に渡した。カードを受け取った彼女は、当惑していた。

「今は、あんまり入ってないが、ちゃんと用意しておく。こいつを、月に運んでも、釣りがかなりあるだろう」

ユミは、ますます疑い深くなった。

「金があるなら、あんたがやればいいじゃないか。何で、あたしみたい

なのに頼む必要があるんだよ?」

タイジは、装置を叩いてから言った。

「俺は、こいつで、もっと先まで行く。だから、俺が旅立った後も、こいつの面倒を見てくれる人が必要だ。未来の君と、約束したから、君に任せられれば、安心出来るんだがね」

ユミは、立ち上がって装置の傍に寄った。

「これは、タイムマシンじゃないんだろう? 何で、未来のあたしとか、言ってるんだ?」

タイジは、ユミの質問に素直に答えた。

「こいつで寝ている間に、どうやら未来や過去の時間に接触出来る。俺にも、何でそんな事が出来るのかわからない。もしかしたら、人が見る夢っていうものが、時空を超えることが出来るものなのかも知れない。とりあえず、未来の君に接触したから、こうして君と会い、話が出来た。技術的には、いろいろ調べてみたいところだがね。寝ている間の凍りついた脳の脳波何てものがあるなら、それを分析したり……。だが、それも、恐らく何百年もの長期に渡る調査が必要だ。寿命の限られた、今の人間の手に負えるものじゃ無い」

ユミは、やつとのことで、少しだけタイジのことが、信じられるかも知れない、と思い始めていた。

「で、どうするだい? あんたは未来に行つて」

タイジは、少し恥ずかしそうに言った。

「ちよいと、未来で人類を救いに行くのさ」

ユミは、目を丸くした。

「はあ?」

タイジは、心外そうな顔で、ユミに言った。

「君が、俺に言ったんだよ。子供の頃の夢の中でね」

ますます、ユミは、頭がこんがらがった。

「まあ、今は、気にするな。その電子マネーカードには、君がこいつを運ぶ頃になったら、自動的に入金されるように設定しておく。無駄遣いされちゃ困るからな」

タイジは、ドアの方へ向かった。

「じゃあ、行こうか。元いた所に連れて行ってやるよ」

「あんたは、どうするんだい？」

「俺は、これからこいつに入って旅に出る。ここ、ISS……宇宙科学研究所は、NASAに統合されて無くなってしまったが、俺の為に数年は電源の維持を約束してくれた。君に渡した電子マネーカードや、俺の為の車も、ISSが、俺の功績に免じて残しておいてくれたものだ。後は、君に全てを託すから。頼んだぜ？」

タイジに背中を押され、ユミはその部屋を後にした。

元いた公園に戻ったユミは、去って行くタイジの車を見送った。彼に渡された電子マネーカードと、クツキーの袋を抱きしめて、彼女は自分の未来に想いを馳せた。

だが、タイジの言ったことが、真実かなんて、今の彼女にはどうでもよかった。少しの金と食べ物、それを与えてくれた彼に心から感謝した。

煙草に火をつけて、煙を吐き出すと、彼女は、これから何処へ行くか考えながら、ゆっくりと歩き出した。

続く…

遙か彼方の永劫を超えて10 途中下車Part3

人工冬眠中のタイジは、再び夢の中にいた。

再び、子供の頃に見た同じ夢を見ている。

次第に鮮明になって来るその記憶は、タイジの心を翻弄した。

そして、その記憶に至る歴史を、タイジはより深く知るようになる。

二十四世紀には、各国の政府のAIは、地球の限られた資源の限界を超えるエネルギーや物資の供給を実現するため、本格的に宇宙開発を推し進めた。太陽系内で有効活用出来る資源採掘を行い、地球に物資を供給した。これによって、ほぼ無尽蔵とも言える物資の供給が実現し、人々の暮らしはテクノロジーと豊富な物資に支えられ、かつて無い繁栄を享受していた。

二十五世紀になると、人工子宮による人間の誕生は、世界全体の出生者の九割を超えた。これによって、世界は、イデオロギーの違いをほぼ無くし、遂にはばらばらだった国家が、一つに統一された。

冷凍卵子と冷凍精子の在庫の管理も厳格化され、AIの分析によって、優秀な遺伝子同士の組み合わせが分類、整理された。AIは、人工子宮の提案をした時から長年研究を続け、この組み合わせと、遺伝子操作によって、更に優秀な優勢人種を生み出そうとしていた。人工子宮で生まれ、AIの教育で育った人々には、それはごく自然なことだった。更に優秀な人々が誕生すれば、より充実した未来が待っているからだ。人々は、その方針に多くが賛同し、実際に遺伝子操作が行われる事になる。

遺伝子操作された人の誕生は、世の中を大きく変えることになった。政府のAIが求める人材は、AIの処理速度に追従出来る、所謂頭脳明な人間だった。人々は、これらの人を指して、新人類と呼ぶようになった。

そのような人々が登場すると、旧式の人工子宮で誕生した人々の間で、様々な反発が起きた。何故なら、政府を支える閣僚に抜擢される人間は、徐々に新人類に入れ代わり、世界の経営を支える人材も、新人類が担うようになっていったからだ。効率と、利益を享受する事に

最大限の努力をしようとするAIの方針を実現するのも、彼ら新人類が担っていた。次第に、旧式の人工子宮で誕生した人々は、淘汰されようとしていた。

この変化の過程で、過ちを犯す特性を持った古い人間は、旧人類という呼び名が定着していった。彼らの主張は、人が過ちを犯すということこそが、人を人たらしめるものだ、というものだった。文化や文明のブレイクスルーには、こういった、一般的な普通の人々には無い、少しおかしいと言われるような特性を持った人間こそが、歴史を作ってきたと主張し、効率と利益を追い求める新人類との間で、激しい論争が起きた。

しかし、二十六世紀頃には、世界は完全に新人類へと入れ替わった。そのような議論さえも、その時代には無くなったのである。

一方、二十四世紀頃から政府のAIは、太陽エネルギーを効率良く収集する、ダイソン球構想を提唱した。

それは、元来のアイデアは、二十世紀から二十一世紀を生きた物理学者のフリーマン・ダイソンが提唱した、太陽を包み込むように巨大な殻の中に入れ、無駄なく全てのエネルギーを集め、地球に供給すると言うものだ。惑星一つが享受する太陽エネルギーは僅かであり、これを受け取る場所を多くすることで、莫大なエネルギーを受け取ることが可能になる。

来たるべき時代の高度なテクノロジーを支える為に、莫大なエネルギーが不可欠なものになるだろうと、AIは予測していた。しかし、技術的にも殻のように包み込むのが困難だったことから、リング状に太陽を包み込む、ダイソンリングを構築する案が、有力となった。

二十五世紀には、この構想の実験が始まった。他の惑星や衛星から集めた資源を利用して、それらを月面都市で加工し、組み立て、そこからラグランジュポイントに、最初のリングの一部が運び込まれた。

無線送信によるエネルギー供給も、同時期に実現されていた為、初めてエネルギーを受け取った地球では、実験の成功が伝えられ、人々はこれを熱狂的に歓迎した。

それから、更に長い年月をかけて、地球上から、原子力発電所や、そ

の他の発電施設は撤去されていった。それらが地球環境にもたらす公害や汚染は、長い年月人類を悩ませていたが、ダイソンリングが構築されてから、ようやく、その問題から解放されたのだ。

その後、ダイソンリングは、それから千年近い長い年月をかけ、やっと太陽を取り囲めるまでになった。

こうして、人類は、かつて無い繁栄の時代に突入したのである。

タイジは、歴史を俯瞰的になぜ見られるのか、という疑問を持ったが、見たことを考える方が先だと思っていた。

人類の未来の発展は約束されていて、何も問題が無いようにも思えた。ダイソンリングが崩壊し、人類がゆっくりと死滅していくあの未来の光景は何だったのか。

地球に住む人類は、高度な文明社会を築いていたが、ダイソンリングが崩壊したことで、エネルギー供給を絶たれ、あらゆるものが、稼働しなくなっていた。

最初に稼働しなくなったのは、その時代では、巨大な電子頭脳と言えるまで発達したAIだった。AIが、作動しない状態で、人類は、独自の判断を下さなければならなかった。

旧式の原子力発電所を再建する方法もあったが、それには、それを実現する工場等が、エネルギー供給を絶たれて稼働しなくなっていたことから、すぐには困難な状態だった。そのようにして、手をこまねいている間に、人類は暴動を起こし、食料を奪い合うような野蛮な生活に一気に落ちぶれた。そうしている間にも、終末は迫って来て、それから百年もすると、ゆっくりと人類は死滅して行ったのである。

タイジには、ダイソンリングの崩壊による影響を、何故AIが考えていなかったのか、大いに疑問だった。AIが、この事態を予測していないはずがない。ならば、どうして、このような結末になったのか。

タイジは、AIが原因とは思えなかった。また、歴史に登場する新人類も含め、文明の発達には、どれも不可欠な要素だったであろう。

そんな時、タイジの思考に、ユミが割込んで来た。

「面白いだろう？」

タイジが、意識を向けると、そこは月面だった。いつの間にか、目

の前に、ユミとダニエルが立っている。

「面白いとは、思うがね。それにしても、君に言われた通り、HSPを君に託したが、ちゃんと管理してくれているんだろうな？」

それには、ダニエルが答えた。

「問題ない。君に干渉したことで歴史が変わって、俺はユミと一緒にHSPを月に持って来た。あれは、うちの会社の地下に設置してある。月面都市は、建替えなどせずに、そこにずっと存在しているから、君のHSPも存在し続けるはずだよ」

「問題は、あれが本当に千年もの長い年月を耐えられるか、ということだ。さすがに、この耐用年数は、実験出来ない。シミュレーション上は問題無いはずだが」

それには、ユミが回答した。

「大丈夫だって。だって、あたし見てきたから」

タイジは、ふと疑問を感じた。

「それなら、俺がこれからどうするのかも、未来を知っているって事だな？」

ユミは、顔をしかめた。

「それがさあ。わからないんだよね。多分、あなたの今の意識と接触しているからかも。あんたが目覚めるまで、仕方ないから、楽しみはとっておくよ」

タイジは、少しがっかりした。

「それは残念だよ」

タイジは、歴史をもう一度振り返り、そこで感じた疑問を、彼らと問答して答えを探すことにした。

「俺は、祖父母が夢見た宇宙旅行を実現する為に、あのHSPを実用化した。しかし、千年経つてもそれは実現しそうもない。どちらかと言えば、人類は外に出るのを止めて、地球に引きこもる事にしたように見える。俺としては、それが納得出来ない。この原因は、AIが人類の営みを効率的に最大限の利益を享受出来るようにした為だ。それが原因で、外宇宙の宇宙探査など、利益にならないし、非効率だと判断された。だからと言って、世界が平和に統一された歴史を鑑みる

と、AIがやった事が間違っているとも言えない」

ユミが、思いついたことをぽつりと言った。

「ワープ出来るようになればいいんじゃないの？　そうすれば、非効率じゃなくなる」

タイジは、その疑問にあっさりとは回答した。

「実現出来るならな。例えば、ワームホールを人工的に作り出すとか、様々なアイデアが俺が生きていた時代でもあったが、莫大なエネルギーが必要で、どのアイデアも実験すら不可能だ。結局、人工冬眠が、今の人類が出来る唯一の実現方法だ」

その話を聞いていたユミが言った。

「それってさあ。ダイソンリングがあっても無理なのか？」

タイジの思考が、そこで止まった。

「何？　今なんて言った？」

ユミは、不満そうに言った。

「ちゃんと聞いてろよ。ダイソンリングがあれば、その莫大なエネルギーってのがあるんじゃないの？」

タイジは、それを聞いて、何か答えがまともうとしていた。

ダニエルが、そこで口を挟んだ。

「もしかしたら、AIは、それを見越していたのか？」

「あたしには、そんな難しいことはわかんないよ」

タイジは、二人に静かにするように言った。そして、暫く思考を巡らせた。

・ AIは、実は効率的に外宇宙に出る手段を考えていた。

・ その研究に必要な莫大なエネルギーを得る為に、ダイソンリングを構築した。

・ ダイソンリングが失われる可能性よりも、これらの実現を最優先で考えていた。

もしも、そうだとしたら？

AIは、人類の進化を目指していたのではないか？

人工子宮も、その為のものだった。

効率と利益を求める基本機能はあるが、もっと大きな目的を果たそ

うとしていたのではないだろうか。

この宇宙で、地球で花を咲かせた人類は、次のステップとして、胞子を他の星系に広げるべきだ。海から陸に出て、空を飛び、やがて宇宙へ。生命の進化の歴史を考えれば、当然のことで、AIにも、その思考はあつたのではないか？

だとすれば、人類が減びるこの時間軸は、AIが壮大な挑戦をした結果だ。残念ながら、自然現象でダイソソリングが崩壊したことで、失敗に終わったが。

然らば、俺のやるべきことは何か。

そう。失敗を恐れずに、挑戦し続けることを止めさせないことだ。ダイソソリングのようなテクノロジーは、また挑戦すればいい。人類が僅かでも生き残っていれば、またやり直せばいいことだ。

タイジは、ユミとダニエルに向かって言った。

「君たちのお陰で、どうすべきか決まった」

ダニエルは、心配そうに言った。

「じゃあ、行くのかい？」

「ああ」

ユミも、少し寂しそうに言った。

「これで、お別れか？」

「そうだな。二人とも、ありがとう」

そう言うと、次第に意識は、月面を離れ、宙をくるくると回っているような感覚があつた。何処かに、二人がいるのを感じたが、次第に遠くなっていった。

タイジが見ていると、人類が火星をテラフォーミングして住もうとしていた。木星の衛星に基地を設けて、資源採掘を行っていた。それらの様子が、手に取るようにわかる。

かと思えば、タイジの祖父母がまだ若い頃や、もつと昔の江戸の町を生き抜く人々の姿が見えた。

そう。遠い過去から命が繋がって、それがタイジに繋がり、今のそのバトンを受け取つたのだ。

そして、次第にゴールが迫っているのも感じた。

「だから、お願い。人類を救って……」

何処からともなく聞こえるその声は、目覚めようとするタイジに、最後の願いを伝えていた。

続く…

遙か彼方の永劫を超えて11 辿り着いた場所

三十五世紀、月面都市――。

タイジは、長い眠りから目覚めた。

タイジは、HSPから抜け出すと、長い旅をともにした装置を眺めた。多少はくたびれていたが、システムは正常に稼働していた。

「ここまで、俺を無事に送り届けてくれてありがとうな」

タイジは、装置の表面を撫で、そして、感謝を捧げた。

お婆ちゃん――。

俺は、やったよ。これがあれば、銀河を旅出来る。

しかし、今、その宇宙船は無い。

残念だが、後で考えよう。

まずは、やるべきことをやる――。

タイジは、暗い部屋の灯りを探した。壁のスイッチを見つけて押すと、部屋が明るくなった。タイジは、部屋の様子を見て、驚いた。

「な、なんだ？　ここは？」

その室内には、無数にHSPと同型の装置が設置されていた。ざつと眺めて数えた所、百台以上はありそうだった。

「どういうことだ？」

タイジは、傍にあつた一台の中を覗いてみた。誰か入っている。彼は、数台の中身を、同じ様に確かめた。どの装置にも人が入っている。

タイジは、疑問を抱きながら、部屋を出ることにした。

階上へ上がって、その謎はすぐに解けた。そこは、病院だったのだ。あれは、医療用の人工冬眠装置なのだろうとタイジは予想した。

辺りを見回すが、どうも千年もの未来に来たような感じがしない。病院内は見慣れた風景で、特に珍しいものも無かった。一階の受付カウンターを見ると、昔と同じ様な端末を使い、来院者の応対をしている。

タイジが、そうしていると、何処からか、看護師と思われる男性が走ってくるのが見えた。その看護師は、タイジの目の前で立ち止まると、息を切らせながら言った。

「ヒムロタイジさんですね？ コールドスリープ装置の覚醒信号を受け取って、探していました。まずは、その受付に行って頂き、いろいろ手続きをして頂けますか？」

病院側としては、当然の対応だろう。タイジは了承して、受付に立ち寄った。

受付の女性によれば、タイジは、病人として預けられていたらしい。彼女が調べてくれたところによれば、千年以上前に、ダニエルの会社から、この病院に移設されたらしい。そして、病人として手続きされ、この時代まで管理されていたようだ。

受付の女性から、健康診断とカウンセリングを受けるようにすすめられ、タイジはそれに同意した。

健康診断を受けた後、案内された医療室で、タイジが待っていると、カウンセラーの若い女性が現れた。

タイジは、その女性が、どこことなく、あのアユーシに似ているので凝視してしまっていた。

「何か？」

「……申し訳ありません。少々、知り合いに似ていたもので」

カウンセラーの女性は、それには答えなかった。

タイジが、女性が着る白衣の胸の名札を確認すると、そこには、ユリ9と書いてあった。顔をよく見れば、確かに似てはいるが、別人だった。それに、タイジの知るアユーシよりも、だいぶ年下のようだ。他人の空似と思い、彼はそれ以上触れるのを止めた。

彼女は、通り一遍の精神状態の確認等を行って話を終えた。彼女は、最後にタイジに言った。

「検査はこれで終わりですが、政府のAIが、あなたとお話したいと言っています。かまいませんか？」

政府の者と聞いて、タイジは少し驚いた。「願ってもない。私からもお願いしようと思っていました」

聞けば、政府のAIとは、希望すれば誰でも話す事は可能なのだそうだ。

タイジは、その医療室で、そのまま待っているように言われ、一人

でそこで待っていた。事前の想像では、端末を渡され、そこで対話するものと思っていたが、どうも違うようだった。

医療室のドアが開くと、一人の中年の男性が現れた。タイジが、訝しげにその人物を見つめていると、彼は握手を求めて来た。

「地球中央政府A Iのブライアンです」

タイジは、ぎよつとしたまま、その手を掴むのを躊躇した。結局、彼の方からタイジの手を握ってきたのである。

「あなたは、千年以上前からやって来たと伺いました。ご存知無いと思いますので、簡単に説明すると、この体はアンドロイドです。A Iの端末として使っています。人とお話するには、この方が都合が良いとわかってから、このような対応をしています。驚かせたようで、申し訳ありません」

タイジは、呆けたまま、首を動かして頷いた。

「あなた自身への興味も尽きませんが、そちらからもお話があるとか。まずは、ご用件を伺います」

タイジは、気を取り直して、冬眠中にユミやダニエルとの対話から考えて来たA Iへの質問を話し始めた。

「この時代には、ダイソンリングというものがあると聞いています。政府としては、あれが失われる可能性や、その場合のリスクをどうお考えですか？」

タイジは、ストレートに、一番聞きたいことを質問した。しかし、A Iは、表情一つ変えずに、淡々と回答した。

「あれを失う訳には行きません。あれは、全人類の生活を支える基盤なのです」

「私の質問の答えになっていないようですが」

「なるほど。そういうことでしたら、正確にご回答しましょう。あれを失えば、人類の文明は崩壊してしまうでしょう。だからこそ、決して失う訳には、いきません」

タイジは、余りにもあっさりとした回答に当惑した。相手は人間ではない、ということをつい忘れてしまいそうだった。

「対策については、二十四時間体制で対応可能なメンテナンス要員を

配置していますので、彼らがリングを守ってくれるでしょう」

タイジは、本当に危機が訪れた時の対応を、考えていないように感じた。

「あなたの懸念していることは、私も理解しています。しかし、既に私の電子頭脳や、あらゆる地球上のインフラを支える施設は、従来型の原子力発電等の発電施設で賄えるような物ではありません。あれが失われれば、代替えできる設備は無いのです」

タイジは、何故対策がまともにもされていないのか、という疑問への答えとして、随分単純な理由だった事に少し驚いた。結局、発展し過ぎた文明が、逆に首を締めていると言うことだったのだ。

「そのメンテナンス要員の事ですが、旧式の人工子宮を使っているとか。何故、新型の遺伝子操作を行う人工子宮を使わないのですか？前者は、それ以外の目的では、もう使われていませんよね？」

それまで明快な回答をしていたブライアンが、その質問に回答するのに、少し間が空いた。

「あなたの言う新型の人工子宮は、頭脳労働に適した人間を生み出す事を目的としてコントロールしています。対して、リングのメンテナンス要員に求められるのは、精神的、肉体的に強い人間です。遺伝子操作こそ行っていないませんが、そのような冷凍卵子と冷凍精子の組み合わせがされるように配慮しています」

明快な回答ではあるが、何か隠しているようにも、タイジには感じられた。すると、AIは、タイジの心を読んだかのように、説明を付け加えた。

「ヒムロさん。あなたは自然分娩で誕生した人間ですね。そう記録されています。この時代では大変貴重な存在です。私は、旧来型の人間も大切に考えているのです。現代の主流ではないので、今はメンテナンス要員の誕生のみで使われていますが、あなたのような人間が誕生する可能性があると考えており、設備を残しているのです」

「私のような人間？」

「気を悪くされたなら、申し訳ありません。この時代の人間に、千年以上もの未来に行こうと考える人間はいません。皆、合理的な判断で行

動する為です。失礼な言い方になりますが、あなたの行動は、非合理的に映ります。しかし、そのような非合理的な存在は、私の電子頭脳を超える発想の可能性があると考えています」

タイジは、その話を聞いて、一つの結論に達した。AIは、効率と利益を最大限にするようにし、人々の平和と安定に尽くして来た。それが、現代の世界平和であり、高度な文明に支えられた生活だ。しかし、一方でこの千年もの間に、大きな変化が起こらなかった事にも起因している。つまり、少々いかれた非合理的な人間こそが、人類の発展に寄与して来たことを、AIは学んだのに違い無い。

タイジは、最後の質問をした。

「もう一つ。あのダイソンリングの莫大なエネルギーは、地球に住む人類を支える以上の電力を賄って有り余るではありませんか？無駄だとは思わないのですか？」

AIは、またしても淡々と回答した。

「いいえ。これから、人類はさらなる成長を遂げます。余剰エネルギーは、その準備だとお考え下さい」

どうやら、この時代のマスコミに鍛えられたAIは、当たり障りの無い回答をするようになっていたようだ。これでは、大本営発表だとタイジは感じていた。

「私の経歴は、ご存知だと思います。私の専門は、宇宙物理学です。私は、あの莫大なエネルギーがあれば、恒星間航行用の、新しい航法技術の開発が可能だと考えています。外宇宙の宇宙探査や、その為の技術開発について、今後実行する予定はあるのでしょうか？」

彼は、その質問には即答した。

「その予定は、今はありません。リングが完成したので、人々の生活レベルを更に上げるのが、現在の目標です。しかし、将来的には、それは実行に移すでしょう。余剰エネルギーは、その時に有効に活用します」

タイジは、更に質問した。

「それはいつ？」

「まだ決まっていない事なので、明確にはお答えできません。数百年

以内と考えている、とだけ申し上げておきましょう」

タイジは、AIの回答に満足して、握手を求めた。

「ありがとう」

「どういたしました。あなたには、特別なIDカードを発行させていただきます。このカードがあれば、政府の要人扱いで何処へでも行けます。それから、電子マネーも支給しておきます。何かあれば、またお呼び下さい」

タイジは、その待遇を不思議に感じたが、先程、彼が言っていた、「大変貴重な存在だ」というのは、お世辞では無く、本心からのものだったのだろう。恐らく、AIは、嘘をつけないようになっている。

タイジは、病院を出て、空を眺めた。ドーム状のカバーの向こうに、宇宙に浮かぶ地球が見えている。壮大な眺めに、彼は目を細めた。

そして、彼は、宇宙港を探しに、通りを歩き始めた。重力が調整されているのか、地上で歩くのと、あまり変わりはないようだった。

遙か彼方の永劫を超えて12 終焉の終曲

アオは、うなされながら、ベッドで目覚めた。

寝ながら泣いていたのか、頬に何か跡がついていた。それを拭いて、彼は体を起こした。

辺りを見回すと、そこがリングにあった自分の個室なのに気づいた。

おかしい、輸送船に乗っていたはずなのに、と一瞬考え込んだアオは、今しがた見ていたのが、悪夢だったと理解した。

アオは、ほっと息を吐き出した。

「なんて酷い夢だったんだろう」

カレンダーを確認すると、丁度片足を失って、復帰しようとしていた日だった。ベッドの脇に置いてあった義足を見たアオは、夢の中で足をつけずに作業に出て、ユリ17に少したしなめられたのを思い出した。

彼は、頭を振って、義足を装着すると、部屋から出ていった。

アオは、リングの食堂にやってくる、いつものように普通の食事をトレイに載せ、長テーブルの隅に座った。食堂には、大勢の作業員たちが、思い思いに食事をとっている。

アオは、食事を食べながら、先程見ていた夢を振り返った。リングが崩壊して、ユリ17が行方不明になり、助かったアオは、時折彼女を思い出しては泣いていたのだ。それにしても、リアルな夢だった、と彼は背筋が寒くなるのを感じた。

その時、リングブロックリーダーが大きな声で、食堂にいた仲間たちに声をかけていた。

「注目！ 二週間後に、政府の要人がここを訪れることになった。その夕食時間に、全員がここに集まってくれ。以上だ」

政府の要人？ と聞いて、アオは夢の中で見た地球連邦政府からやって来たという役人の姿を思い出した。隕石回避の作業を数十年か数百年、ずっと続けるように指示を出して帰っていった彼に、アオは、大いに腹がたつたのを思い出した。そして、あのユリ17が、ア

オの前で激昂する原因になったのだ。

もし、そいつが本当にやって来たら聞いてやろう。

僕らが、何の為に生きているのかを……。

それから、アオは、毎日ユリ17を探して話したいと思っていたが、何故か中々会えなかった。時々姿は見かけたが、話をする機会がない。彼は、しまいには避けられているのだろうかと疑うようになった。

そうして、ある日、遂に展望室にいる彼女を発見した。

「ユリ17!」

彼女は、アオの姿を認めると、足早に展望室を出て行くとした。彼は、明らかに避けられていたようだ。

「待って下さい!」

アオは、やっとのことで、ユリ17の腕を捕まえた。

「何か、気にさわることをしましたか? 何で避けようとしているんですか?」

彼がまくし立てると、彼女の腕の力がようやく抜けた。彼女は、アオの方を向かずに、顔を背けたままで言った。

「何か用かしら」

その一言に、アオは悲しくなった。夢の中で味わった絶望感を、何故現実でも感じなければならぬのか。

アオは、自分の気持ちを彼女にぶつけた。

「僕は、少し前に、酷い悪夢を見ました。リングが崩壊して、あなたが行方不明になりました。辛くて、悲しくて……。その事を、ほんの少し聞いてもらいたいただけなんです!」

少し間があって、やっと彼女はアオの方を振り向いた。その表情は、何か恐ろしい物でも見たかのような顔をしていた。

「あなたも、同じ夢を見たんですか?」

アオとユリ17は、展望室の窓に並ぶ椅子に隣り合って座って話をしていた。

ユリ17は、静かに頷いた。

「そう。そして、あなたは、私の本当の気持ちを知ってしまったという

ことね」

アオは、夢の中の彼女の言動を思い出した。彼女のあの最期は、死に場所を探していた事が原因ではないかと、彼は考えていた。

「たぶん……そうだと思います」

彼女は、あまり見せた事がない、自嘲めいた笑みを浮かべていた。

「どうする？ 勝手に死なないように、どこかに閉じ込めておく？」

アオは、泣きそうな表情で言った。

「止めて下さい」

ユリ17は、視線を窓の外の宇宙に移した。

「夢で見たような出来事が、現実を起こったら、私は、たぶんそこが死に際だと、同じ様に思うでしょうね」

「そんなこと……！」

「私には、私の意志がある。私の意思を、あなたに話す事で影響を与えなくなかったの。あなたも、自分自身で考えるべきだから」

アオには、何も言えなかった。確かに、日々、ここで生を受けた意味を考え続けていたのだから。

「私が、どうして体を機械に交換したか、話してなかったわね」

それは、ずっとアオが聞くべきじゃないと思って触れて来なかったことだ。

「私には、以前大切に思っていた人がいた。その人に、私は聞いてしまったの。何の為に、私達はここで生まれて来たのって。その人も、ずっと同じ様に悩んでいたのに」

ユリ17は、遠い目をして言った。

「その数日後に、彼は作業中に行方不明になった。何でも、バックパックを捨てて、宇宙に身を投げたんですって。一緒に作業に出ていた人たちに、後から聞いたわ」

アオは、ユリ17が、泣きそうな表情をしているのを見てしまった。

「私は、自分を責めた。あんな事を言ったせいで、彼の自殺願望の引き金を引いたのかも知れない。私も、後を追おうとしたけど、出来なかった。私はその時に、女である事を捨てようとして決意した。その結果が、この身体よ」

アオは、口を開けたまま、呆然とその話を聞いていた。

「だから、人に言うべきじゃないの。何の為に生きているのか、なんて。それは、自分自身で考えるべきことだから」

ユリ17は立ち上がった。

「もう行くね。もう、あなたを避けたりしないから」

ユリ17が去った後、残されたアオは、しばらくの間、彼女を何とかして守れないか考え込んでいた。

その後、政府の要人がやって来る日になった。

リングの食堂は、作業員全員が集まっていたため、非常に混雑していた。

アオは、ユリ17に声をかけて隣に座っていた。

やって来たのは、中年の男性ともう一人の壮年と思われる男性だった。アオは、ユリ17と顔を見合わせて、夢でやって来た人物と異なっているのを確認した。

「静粛に！ 今日、政府から連絡事項があると、このお二人がやって来た。静かに話を聞いてくれ！」

リングブロックのリーダーが後ろに下がると、中年の男性が前に進み出た。

「皆さん、私は地球連邦政府AIのブライアンだ」

AIと聞いて、食堂に集まった人々からどよめきが起こった。

「AIだってよ？」

「人間じゃないのか？」

「俺、生まれて初めて見たぞ」

ブライアンは、騒ぎが収まるのを待ってから、話を続けた。

「この体は、アンドロイドのものだ。皆さんとお話しし易いように、AIの端末として使用している。今日は、皆さんにお話ししなければならぬことがある」

アオとユリ17も、意外な人物に驚いていた。

「政府のAIがここへ来たのって、初めてなんですか？」

「今まで、聞いたことがないわ」

ブライアンは、再び話を続けた。

「未曾有の危機が迫っている。隕石群が、最近ダイソンリングに衝突する事故が頻発しているのは、知っていると思う。これから、数十年か、数百年に渡り、隕石群が飛来してくる確率が上がるだろうと予測している。そこで、隕石群の接近に伴い、リングブロックを切り離して移動し、隕石群が去ったら元へ戻す、というのを君たちのお願いたい」

再び食堂はどよめいた。

「おいおい、数十年とか、数百年とか、そんなことやっつけられると思ってるのか!」

「冗談じゃねえぞ!」

「地球でぬくぬく引き籠もってる奴らにも手伝わせろ!」

作業員たちの不満が爆発して、騒ぎが次第に大きくなっていった。

アオとユリ17は、顔を見合わせた。

「夢で見たのと同じ……」

「じゃあ、あの夢は正夢ってことかしら……」

「そんな……」

アオは、いても立ってもいられず、立ち上がって叫んだ。

「あの!」

ブライアンは、一人の若者の姿に気が付いた。ブライアンは、傍に
いる男の方を見て、頷き合っていた。

「言ってみたまえ」

ブライアンに指を刺されて、アオは少し萎縮しながらも、勇気を出して言った。

「これから、沢山の隕石や彗星がやってくるって、僕は知っています! あなたがおっしゃったような処置では、とても追いつきません。このままでは、間もなくダイソンリングは、崩壊してしまいます!」

ブライアンは、その話を聞いても、眉一つ動かさなかった。アンドロイドの体なのだから、当然とも言えるが、アオの苛立ちは、最高潮に達していた。

「聞いているんですか!? 僕らは、この対策で、大勢の犠牲者が出ます。それでも、リングを守れとおっしゃるんですか!」

すぐ横にいたユリ17が、立ち上がってアオの腕を掴んだ。

「アオ。落ち着いて。あれは、夢で起きた事よ」

「落ち着いてなんて、いられませんよ！ あなたが、死んでいくとわかっていて、僕は黙っていることは出来ません！」

前にいたブライアンが、腕を頭の上まで上げて大きな音で手を叩いた。

「皆さん、最後まで聞き給え」

それを聞いた人々は、再びブライアンに注目した。

「先程の話だが、私はそのように考えていたし、これは政府としての決定事項だ。だが、この方が、別の案を提示してくれた」

そこで初めて、ブライアンは、傍にいた壮年の男に手を差し出して、前に出るように促した。

「君の案、ぜひ皆に聞かせてやってくれ」

「本当にいいのかい？」

「言っただろう？ AIを超える可能性が、あると」

「わかった。ありがとう、ブライアン」

壮年の男は、にやりと笑って前に進み出た。

彼は、咳払いを一つすると、集まった人々に語りかけた。

「俺の名は、氷室泰司。タイジと呼んでくれ。ブライアンよりもいい案がある。それを、皆に聞いてもらいたい。その立つている二人も、まずは座ってくれないか。話が終わってから、何故これから起る事を知っているのか教えてもらいたいけどね……」

タイジは、立っている二人のうち、一人の姿に釘付けになった。

「まだだ……」

タイジの目に映るユリ17は、若き日のアユーンにそっくりだった。今度は、他人の空似と言えない程、彼女によく似ていた。

タイジは、気を取り直して、話を始めた。

「私は、二十一世紀から人工冬眠装置を使って、この時代へやって来た。まあ、この事は、今は省略する」

再び、集まった人々がざわざわとなりだした。

「ブライアン、つまり、政府のAIの考え方は、最小限の作業で最大限

の成果を上げること。それにより、リング全体を守り、人類が享受する利益を守ること。これを基本的な前提としている。だが、これを前提とすれば、先程ブライアンに意見してくれた彼の言った通り、想定外の事態が発生した場合に、対応が困難になる。ならば、臨機応変に、前提を変えればいい。その前提とは、守るべきは、リングなどでは無く、人類の利益でもない。本当に守らなければならないのは、人の命だ」

タイジは、そこで話を区切り、作業員たちのざわめきが収まるのを待った。

「未曾有の危機に対して、リングなど、無くなっても構わない。何故なら、人が、僅かでも生きてさえいれば、また作ればいいからだ。そうだろうか？ ブライアン？」

タイジは、横にいたブライアンの方に問いかけた。

「君の言う事は、これまで長い年月をかけて、人類が積み重ねてきた努力や苦難を、全て捨て去ることを意味する。私には、そんな発想はあり得ない」

「だからこそ、俺の話を聞いてくれたんだろう？」

ブライアンは、AIらしからぬ笑顔のようなものを浮かべているように見えた。

タイジは、再び、集まった人々を見回した。この話は、ここにいる人々だけでなく、リング全体にいる他のリングブロックの人々にも中継されている。彼は、多くの人々の視線が、自らに集まっているのを感じた。

そして、アオは、二十一世紀からやって来たという男の話を、驚きを持って聞いた。横にいるユリー7も、興味津々といった様子だった。夢で見た内容と同じ事が起こりそうだが、彼の存在が、事態を大きく変えそうだった。

「では、今の話を踏まえて、私の案を説明する」

タイジが、リングブロックのリーダーに合図すると、食堂の中空に、三次元モニターの立体図が現れた。

「まず、これから増えるという隕石などからの被害を回避する為、リン

グをブロック毎に分解して、これを輸送船で曳航させる。完全に安全とは言えないが、一旦これを月面や、火星の衛星に運ぶ。この過程で、リングからの地球へのエネルギー送信が途絶えるだろう。そして、AIの電子頭脳も、地球上のインフラ設備も、すべてその時に停止する。しかし、最優先は、リングを移動させてしまうことだ。恐らく輸送船が不足すると思うので、これは政府に、曳航に使える宇宙船を出してもらうことで対応する。これで、数十年も数百年も、リングの面倒を見る必要は無くなるだろう」

作業員たちは、意外な展開に戸惑いが広がった。そのうちの一人が、タイジに質問をして来た。

「俺たちは、ここでメンテナンス作業するしか能のない奴ばかりだ。それが終わったあと、俺たちはどうすりやあいんだ？」

タイジは、大きく頷いて言った。

「君たちには、次に重要な仕事をお願いしたい。地球に降りて、新しいインフラ設備を建設してもらいたい。まずは、発電施設に必要な物資やパーツの開発を、独立した電源を持つ月面で行い、それを地球に運んで組み立てて欲しい。これは、恐らく原子力発電所などの旧式のものになり、今の地球上のインフラを稼働するには不十分だろう。ならば、その次は、その電力で賄える設備にインフラを作り変えればいい。これは、恐らく百年はかかる一大事業になるはずだ。君たちは、本来は、精神的にも肉体的にも、新人類と呼ばれる地球に住む人々より、強い人間だ。君たちが指導して、彼らを導いてやって欲しい」

その話をする頃には、集まった人々は、タイジの話に夢中になっていた。

「そうして、数百年後になるだろうが、ダイソンリングを、再び宇宙に戻す。その時には、隕石などの対策も平行して研究を進め、同じ様な事が再び起こらないようにすればいいだろう。その時は、再びAIの電子頭脳を再起動出来る」

別の作業員の一人が、質問をしてきた。

「今の話は、ありがたい話だし、数百年後の事なんて、俺達には関係が無いことだが、未来の俺たちの仲間は、またリングのメンテナンスに

明け暮れる人生を送れっていいのかい？」

タイジは、頭を振った。

「それもあるが、もっと大きな目標がある。それは、ダイソンリングの莫大なエネルギーを利用して、恒星間航行に必要な新しい技術を開発する。恐らく、ワームホールを人工的に作り出し、それを使って時空を超えて別の星系に瞬時に旅立てるようになるだろう。そんな時代を支えるのは、君たちのような普通の人間だ。AIや、新人類には難しい奇想天外な発想や、強靱な肉体が必要になる。これからは、君たちが、人類の未来を作って行って欲しい。今回の大転換は、その為の第一歩だ」

作業員たちのざわめきは非常に大きくなっていった。メンテナンス作業に明け暮れる人生に絶望していた人々に、タイジは新たな希望を与えたのだ。

そのタイジは、ブライアンの方を向いた。

「人間には、希望が必要なんだ。それが無ければ、人は絶望してしまう」

ブライアンは頷いた。

「そのようだ。そういった対策が不足していたようだ。そして、君の案は、極力、何も失わないようにするものだ。ただ、数百年、まわり道をするだけだ。自分自身を停止するなどと言う案は、そもそも検討すらしていなかった。そういう新たな発想が生み出される事を期待して、ここの作業員たちを地球にいる新人類と接触をさせないようにしてきたのだが……。結局、二十一世紀生まれの君に助けられることになった」

「その兆しはあるさ」

タイジは、先程ブライアンに意見した若者の姿を目で追った。

タイジは、再び皆に語りかけた。

「では、この後のことは、リングブロックのリーダーたちから指示を出してもらおう。リングの移動作業は、最も危険を伴う作業になるだろう。気を引き締めて取り組んで欲しい。私からは以上だ」

話を終えると、人々は、タイジに感謝を伝え、肩を叩いたり、握手

を求めたりしていた。

ユリ17は、目を潤ませてアオの方を見つめていた。

「私たち、もう、リングのメンテナンスをしなくていいってことで合ってるかしら」

アオは頷いた。

「はい。僕らは、リングを救うだけじゃなく、人類を救う。それが、僕らのやるべきことになりました」

「どうしてかしら。何だか、涙が出てくるの」

アオは、同じ様に目を潤ませた。

「それは、僕もです」

アオは、ユリ17の肩にふれて、一緒に食堂を出ようと立ち上がったが、タイジと目が合うのを感じた。彼は、手招きをして、アオとユリ17を呼び寄せた。彼は、二人と少し話したいと言い、食堂に残ることになった。

そこには、ブライアンも含めて、四人が向かい合って食堂のテーブル席に座っていた。

アオは、恐る恐る聞いた。

「話というのは何でしょうか？」

タイジは、彼らに微笑んだ。

「そんなに警戒しないでくれ。先程言った通り、俺は、二十一世紀生まれの古い人間だ。今日の危機を知り、人類を救おうと思って、人工冬眠装置を使って、ここまでやって来た」

アオとユリ17は、その話に、どう反応していいかわからない、といった表情をしている。

「頭が、いかれていると思うかも知れないが、これには理由がある。俺は、不思議な夢を子供の頃に見続けた。それは、ここで、隕石群や彗星群がダイソンリングを崩壊させ、人類が、緩慢な死を迎えていく様子だ。俺は、人工冬眠の実験中に、再び夢を見たことで、ここへ来る決意をした。夢の中では、意識が時空を超え、様々な時間に接触することが出来た。理由はわからない。だが、先程の君のブライアンへの発言は、俺と似たような体験を君がしていると感じたんだが、違つか

い？」

アオは、ユリ17と顔を寄せ、小声で何か話していた。二人は頷き合うと、その回答をした。

「はい。僕らも夢で同じ体験をしました」

「やはり、そうだったか」

タイジは、何か考え込んでいた。

「その記憶……大切にすることだ。俺が思うに、そのような体験をしたことに、何か意味がある。恐らく、人類の未来に関わる何かを、君らがこれから行うのかも知れない」

「私たちが？」

タイジは頷いたが、それ程自信は無さそうだった。

「多分な。申し訳ないが、俺は君らの未来がどうなるのかは知らない」

タイジは、ブライアンの方に向いた。

「ブライアン。多分、この過去や未来の記憶に接触する現象は、検証や研究が必要だ。そのような秘密に迫れるのは、命の限りがない、君のような存在が、研究を続けるべきだろう。例えば、医療用の人工冬眠装置で寝ている人々を対象に、検証するのが早道だと思う」

ブライアンは、またもAIらしからぬ表情をしていた。

「その話、信じていいのかまだ判断が出来ん。だが、君の功績に免じて、約束しよう」

「それで十分だ」

タイジは、最後に、ユリ17に目を向けた。見れば見るほど、出会った頃の若かりし日のアユーシに似ていた。

「君の名前は？」

ユリ17は、不思議そうな表情で、タイジを見つめた。

「ユリ17です」

タイジは、目覚めた病院のカウンセラーの名札にも、ユリ9と書いてあったのを思い出した。

「どうということだろうか？」

まるで彼女が追いかけて来ているような気持ちになっていた彼は、その理由を思索した。

「少し気になってね。月の病院で、君によく似た女性に出会ったんだ。名前も同じだったんだがね」

ユリ17は、月の病院と聞いて、彼女も少し考えている。

「私は、リングにある人工子宮から誕生しました。恐らく、同一の冷凍卵子と冷凍精子の組み合わせで誕生した、私の、いわゆる姉妹でしょう。月面都市への人員配置も、リングの人工子宮で行っているはずですよ」

タイジは、ユリ17の顔を見ながら考えた。

「もしや……いや、まさかそんな。」

タイジは、ブライアンに質問した。

「人工子宮で使用されている冷凍卵子と冷凍精子の提供者を確認することは出来るのだろうか？」

「提供後、二百年以上経過していれば、情報公開している。無用なトラブルを避ける為、本人に会うのが不可能な年数が設定されている」

「どういう手続きをすればいい？」

「私に聞いてくれれば、この場で回答可能だ」

ブライアン以外の三人は、意外な回答で驚きを隠せなかった。

「えーと、ユリ17。俺は、君とよく似た人物の知り合いがいてね……」

ユリ17は、何を確認しようとしているか、ようやく理解した。

「構いませんよ。私も、自分自身のルーツを知るのも悪くないと思っています」

ブライアンは、タイジの顔を見つめた。

「君の知り合いだということのかね？ それは、情報公開制度の穴だな。知り合いに開示しない為のルールだが、さすがに二百年以上前の人間がやって来るのは、想定外だ」

タイジは、笑った。

「すまないな。開示してくれるかい？」

「ルール通りだから、問題ない。だが、見直しを後で検討するよ」

ブライアンは、ユリ17を見て、照合を行ったようだ。それは、ネットワークを通じて、リング内の人工子宮に接続して確認を行っている

た。

「照合した。卵子の方は、西暦二〇七〇年生まれ。名前は、伊藤・ア
ユージ優里。提供日は、西暦二一〇一年」

「タイジは、口を開けたまま、暫く固まっていた。」

「そうか。やっぱり、そうだったんだな。俺が出発した翌年に提供し
ているのか……」

「タイジは、感無量といった様子で、遠くを見つめている。」

「どんな人だったのか、教えてもらってもいいでしょうか？」

「ユリ17の質問に、タイジは、どう話せばいいか、考えがまとまら
なかった。月並みな事しか言えそうもない。タイジは、苦笑して、目
を閉じてから言った。」

「頭が良くて、優しく、それから……とても美しかった」

「ブライアンが、更に続きを話し始めた。」

「それから、精子の方だが……」

「タイジは、それを遮ってユリ17に聞いた。」

「君が聞きたいなら、俺は……。気分のいいものじゃないから、あま
り聞きたくは無いかな」

「ブライアンが言った。」

「タイジ。これは驚いた。本当に聞かなくていいのかね？」

「ユリ17が言った。」

「ぜひ、聞かせて下さい」

「タイジは、少し困惑したが、ブライアンに先を促した。」

「タイジ。精子は、君のものだよ」

「タイジは、驚きのあまり、ブライアンを凝視した。」

「何だって？」

「君が提供者だと言ったんだ」

「タイジは、記憶を辿った。確かに、冷凍精子の募集がかかった時に、
遊び半分で申し込んだのを覚えていた。」

「俺が……？」

「タイジは、ユリ17に向き直った。」

「そんな、嘘だろ。そんな偶然……」

ユリ17は、タイジを真っ直ぐに見て、ぽつりと言った。

「お父さん……う？」

アオは、急な展開に、ユリ17と、タイジを交互に見ていた。
「ブライアンが話を補足した。」

「確かに、偶然だと思うが、この組み合わせは、提供された年代、国籍、職業等を考慮して選定している。君らが、そういう条件が一致しているなら、必然的に組み合わせられる確率は上がる。ある意味、偶然では無かったとも言えるな」

タイジも、ユリ17も、お互いどうして良いやらわからなくなっていた。そもそも、ユリ17やアオたちは、親という存在を知らずに育っているのだ。二人には、そのような絆は理解出来ないはずだった。それなのに、ユリ17の瞳から涙が溢れるのを見ると、タイジはいたたまれない気持ちになった。

「は、はは……」

タイジは、思わず笑いが込み上げて来た。

アユーシ。こんな事になって、すまない。彼女が、ユリ17なら、17人も子がいる事になる。随分と子沢山だなあ、俺たち——。

タイジも、自然と込み上げて来る涙を、抑える事が出来なかった。この旅に出なければ、彼女と結婚して、子供をもうけた未来もあつたかも知れない。そう思うと、この信じがたい偶然は、神の御業のように思えた。

その翌日から、タイジの提案が実行に移された。

ダイソンリングは、地球から遠い位置にある場所から、解体が始まった。リングブロック単位で接合部のロックが作業員によって解除され、近くに待機する輸送船に運ばれた。複数の作業員が、リングブロックに取り付き、宇宙服のバックパックのスラスタをふかすことで、人力で移動していた。それらを、輸送船から伸びるワイヤーに括り付ける。一定の数のリングブロックが接続されると、輸送船は後部ロケットエンジンを咆哮させて、一路最も近い星に向かった。

同じようにリングブロックの分離と、輸送船による輸送が、あちこ

ちで行われ、急ピッチでリングは解体され、比較的安全な月に移送された。

また、場所によっては、火星に移動した方が近い場合もあり、フォボスやダイモスにも分散してリングブロックは運ばれて行った。これは、万一これらの衛星にも隕石群が降り注ぐ可能性もあり、リングが破壊されるリスクを分散する為でもあった。また、これら衛星に運んでいる理由も、大気圏突入等のコストを下げる意味があった。作業中にも、隕石群などは襲って来ており、出来るだけ、迅速に作業を完了させる趣旨もあった。

ある場所では、実際にリングブロックの分離作業中に隕石群に襲われた場所もあった。タイジの説明会の後、各リングブロックリーダーに詳しい作業方法が記載された資料が配布されたが、そこには、人命第一と記載されており、危険を察知した場合は、リングを捨てて、緊急避難する指示が伝えられた。

隕石群に襲われた場所では、作業を中止して、早めに輸送船でその場を脱出したことで、死傷者はほぼ出ないで済む形となっていた。この作業中でも、メンテナンズ作業員の数に対して、輸送船に乗船可能な人数が足りず、脱出時は、リングブロックを曳航する目的のワイヤーに掴まって移動していた。

着々と作業が進められると、地球に近いリングブロックが徐々に最後まで残ることになった。このリングブロックを解体して移動すると、地球へのエネルギー供給が完全に途絶えてしまう為、ぎりぎりまで移動させない方針だった。

一部の作業員は、月面に降りて、タイジの指示にあった旧式の発電設備のパーツの開発を進めていた。タイジは、地球中央政府のメンバーと一緒にあって、この開発と地球への移送を指揮していた。あのブライアンも、AIの電子頭脳へのエネルギー供給が続く間は、原子力発電用の放射性物質採掘の作業指示や、発電所の建設場所の準備に追われ、地球に住む地球連邦国民らへの説明などで、多くの時間を費やしていた。

アオとユリ17も、リングの解体作業員として、作業に参加してい

た。二人は、リングブロックの中でも重要な、人工子宮が格納されているブロックを担当していた。二人は、内部で接合部の分離作業を行い、外にいる十名程の作業員が、手押しで輸送船まで運ぶ手筈だった。人工子宮のあるブロックは、人工子宮の電源が喪われると、保存されている冷凍卵子や冷凍精子の冷凍状態が維持できなくなる為、特別な作業を必要としていた。内部へのバッテリーの設置と、リングの外側に、大型の太陽光パネルを設置して、電源が維持されることを確認してから分離するのである。

「ユリ17、バッテリーの設置は終わりました」

重いバッテリーも、ここでは無重力で宙に浮いており、設置作業は、力仕事では無かった。

ユリ17は、各バッテリーから伸びたコードを束ね、人工子宮の電源に接続する作業を行っていた。ユリ17は、電源パネルを閉じると、アオの方を振り返った。

「こっちも、終わったわ。外で設置中の太陽光パネルの電源ケーブルも繋げたし、後は分離作業をするだけね」

「太陽光パネルの設置は、まだ何時間かかりそうですね。少し、休憩しましょうか」

「そうね」

アオとユリ17は、人工子宮の格納容器的すぐ横の床に、服の臀部にあるマジックテープで固定して座り、携帯食料を口にしていた。

「タイジさんの説明、理解出来ました？」

ユリ17は、エネルギー補給用のドリンクを飲みながら、タイジのどの話の事だろうと考えていた。彼との交流によって、あまりにも多くの情報や事実の確認があった為である。

「ブラックホールを作る実験が出来るとか言ってたじゃないですか」

「ああ、そのことね。そんなこと、わからないわ」

アオは、興味津々といった様子で、話を続けた。

「ダイソンリングを、巨大な粒子加速器に使うとか言っていましたね。ブラックホールの生成実験から、最終的にワームホールの生成まで研究してみたいとか。科学者って、考える事が桁違いで、驚いちゃいま

したよ。太陽の近くにブラックホールなんて作って大丈夫なのか、とか、僕はそっちの方が心配になっちゃいました」

ユリ17は、笑っていた。

「そうね。でも、それって何百年ものずうつと先の話よ」

「タイジさんは、千三百年もの時を旅したって言うじゃないですか。僕らだって不可能じゃないですよ」

アオは、目を輝かせて、未来を夢見ていた。そんな彼を、ユリ17は、眩しそうに眺めた。

「そうね。どんな可能性もある。つい、この間まで、一生死ぬまでここでメンテナンス作業をやって行ってくつて思ってたのにな」

そう言う、ユリ17も、未来への新たな予感を感じているのか、希望を胸に抱いているようだった。

アオは、そつとユリ17に聞いてみようと思っていた。

「僕は、何の為に生きてるんだろう、何て、もう言いません。ユリ17は、どうですか？」

夢の中で死に場所を探していた彼女。その彼女が、今、どう思っているのか、彼は気になっていた。

ユリ17は、アオの目を真っ直ぐに見つめて言った。

「うん。もう少し、頑張ってみようかな。今はそう思っているわ」

アオは、満面の笑みでユリの手を両手で包み込んだ。

「よかった。本当に、よかった。安心しました」

ユリ17は、彼に手を触れられたまま、そつと目を閉じた。その脳裏には、様々な思いが去来していた。

「ねえ、アオ」

「何ですか？」

ユリ17は、瞳を閉じたままと言った。

「親って何なんだろうって、あれから考えているの。私たちって、人工子宮で生を受けて、政府機関の施設で育てられた。何となく、施設の養護師さんとか、そういう人から、多分親のような愛情をもらっていたと思う。でも、いろいろ昔の資料を調べてみると、どうも本当の親って、そういうのとも、また違うみたいなの。無償の愛って、わか

る?」

「無償の愛?」

ユリ17は、目を開けて頷いた。

「何も見返りを求めない愛情のこと。子を守る為なら、親って、命を捨てることだつてあるらしいわ。それって、凄く素敵なものだと思わない?」

アオは、不思議そうな顔をしている。

「確かに、それは凄いことかも知れませんね」

ユリ17は、人工子宮を見ながら、続きを話した。

「あそこに、私たちのお母さんや、お父さんの元になったものがある。その人たちって、私たちのことを知ったら、愛してくれるかしら?」

アオは、タイジとの出会いから、彼女がそのようなことを考えているのを知った。

「……そうかも知れません」

アオは、もしかしたらユリ17は、彼からの愛情を求めているのだろうか、と考えた。そして、何となく不安な気持ちになった。恐らく、嫉妬のような感情に違いない、と、彼は自らの心の変化を思った。彼は、以前の夢の中で、彼女に想いを告白したら、どうなるだろうか、と考えていたことを思い出した。

「ユリ17……。ぼ、僕は……」

ユリ17は、突然アオが言いにくそうに何か言おうとしているのを見て、首を傾げた。

「なあに?」

その時、突然二人の携帯端末から音が鳴った。驚いた二人は、腰にぶら下げていた端末を取り出した。

そこには、隕石群接近のアラートが表示されていた。

「いけない。近いわ!」

「何で、こんな近くになるまで、警告が出なかったんだろう?」

「リングを分解したせいだわ。もう、リングのセンサーが遠くまで検知出来ないのよ!」

二人が、窓の外を見ると、船外作業中の仲間たちにも、警告が届い

ていたらしい。慌てて蜘蛛の子を散らすように、リングから離れて輸送船の方へ向かっている。

その時、ユリ17の端末は、リングブロックのリーダーからの通信が入っていた。

「こちらユリ17」

「隕石群を検知した！五分以内にここに到達するぞ。たった今、このリングブロックは放棄する。二人とも、脱出ポッドですぐに避難しろ！」

すぐに通信が切れると、二人は顔を見合わせた。

そう。夢の中と同じ状況になった、ということに、二人はすぐに気がついた。

アオは、その出来事のことを、頭を振って振り払った。

「急ぎましょう！ 脱出ポッドは、ブロックパーツを二つ先にいった所にあつたはずですよ」

アオは、立ち上がって移動しようとした。しかし、ユリ17は、人工子宮を見つめたまま、動きが止まっていた。

「ユリ17！ もう、行かないと」

「これを失えば、もう、私たちの仲間を生み出せなくなってしまう。それに、私たちのお母さんやお父さんが、あそこにはいる……」

アオは、ユリ17の言っていることを理解した。タイジとの出会いが、彼女に親への渴望のようなものを芽生えさせたのだろう。しかし、今は、そのようなことを言っている場合ではなかった。

アオは、ユリ17の両肩を掴んで、自分の方へ向けさせた。

「ユリ17。逃げましょう。生きていれば、どうにでもなります。夢の中で、あなたを失った時の気持ち、僕は忘れることは出来ません。僕は、誰よりも、あなたが大切なんです！」

一瞬驚いた彼女を無視して、アオは彼女の肩を抱えて、床を蹴って移動した。そして、気を取り直したユリ17も、自ら床を蹴って移動し始めた。

脱出ポッドに辿り着いた二人は、夢の中のことを思い出していた。一人乗りのポッド。その時はアオが乗り込んだのだ。そして、外に掴

まると言った彼女は、嘘をついていた。

「ユリ17、あなたが乗って下さい」

ユリ17は、宇宙帽を掴むと言いつ返した。

「いいえ。全身サイボーグの私が、外に掴まる。あなたが乗って」
「しかし……！」

ユリ17は、その彼に、あの時と同じように、腰にぶら下げている水筒の様な円筒形の容器を差し出した。

「大切なものの。あなたが、ポッドと一緒に運んで」

アオは、容器を受け取ったまま困惑していた。

「アオ、もう大丈夫。今は生きていたい。だから、信じて！」

アオは、もう時間が無いとわかつていた。確かに、もう、自分が宇宙服を着る時間がない。

「信じます。これから、一緒にいて下さい！ 約束ですよ！」

そう言い残すと、彼はポッドに乗り込んだ。

ポッドの射出準備をすすめるアオは、時々ポッドの窓の外を見た。なかなかユリ17が、リングから外に出てこないのです、心配でたまらなかつた。

「ユリ17！」

アオは、射出準備が整うと、通信機で彼女を呼んだ。

空電音が鳴り、彼女からの応答がない。

「ユリ！」

悲鳴のような、彼の声だけが、脱出ポッドに反響した。

「こちら、ユリ17。準備出来たわ」

ポッドの窓の外の済に、彼女が顔を覗かせた。宇宙帽の中は暗く、彼女の表情は窺えなかつた。

「急いで！アオ、射出して！」

アオは、目を閉じた。そして、ポッドの射出ボタンに置いた指が震えていた。

本当に大丈夫かなのか——？

「アオ！」

彼女の叫びに、彼は遂にボタンを押した。

衝撃とともに、脱出ポッドは急速にリングから離れていった。宇宙空間をくるくると回転しながら、どんどん速度を上げて行く。

アオは脱出ポッドの窓の外を確認した。その窓の外に、ポッドに接続した電源ケーブルに掴まっている、ユリ17の姿が見えた。

アオは、思わず瞳から涙が溢れていた。安心感から、大きく息を吐き出し、未来が変わった事に感謝した。

窓の外では、既にかなりの距離を移動していたが、小さくリングが見えていた。そのリングが光を放っている。隕石群が、リングブロックに命中したのだ。

通信機から、ユリ17の寂しそうな声が、聞こえてきた。

「人工子宮が……」

ポッドは推進力は、とうの昔に失われていたが、慣性の法則により、宇宙空間を飛び続けた。このまま長い時間漂っていれば、やがてユリの宇宙帽に供給している酸素が尽きてしまう。

アオは、通信機で必死に呼びかけているが、輸送船には連絡がつかないようだった。

アオが、力なくポッドの狭いシートに体を埋めると、ユリ17から、通信が入ってきた。

「アオ」

アオは、すぐに返事をした。

「ユリ17。すいません。輸送船に連絡がつきません」

通信機は、しばらく静かになった。

彼女は、生きていたい、と先ほど言っていた。せつかくここまできて……。

再び、通信が入ってきた。

「アオ。さっき渡した容器なんだけど……」

アオは、先ほどの容器を片手に取った。

「はい」

「それ、中身は、私の冷凍卵子なの」

アオは、とても驚いて、容器を両手で持ち直した。

「ええ？」

「体を機械に交換する時に、悩んで、それを残してもらったの。何でかな。私が、女だったっていう証拠を捨てられなかったっていうか……」

アオは、しげしげとその容器を見つめた。

「最初は、いつか、人工子宮に提供しようかと思ってたの。その人工子宮が無くなってしまったし……。良かったら、あなたがもらってくれない？」

アオは、そう言われて、言葉が出なかった。彼女は、死を覚悟したのだろう。

「さつき、言ってくれたよね？ 私が一番大切だって。ずっと一緒に居たいって。だから、それは、あなたにあげる。嫌じゃなければ、体外受精で子供を作ってくれたら、嬉しいかな……」

「ユリ……」

「そろそろ、駄目みたい。酸素がもう一分ももたない」

アオは、ユリに渡された容器を抱きしめた。

そんな……。こんなの、酷いじゃないか。

アオは、神を呪った。

その時、アオの視界に何かが見えてきた。

アオが、何だろうと、目を凝らすと、何か人の形をしたものが近付いてきた。次第に、はっきりとした姿となったそれは、あのブライアಂಡだった。

アオが、驚いてその姿を見守っていると、彼の背には大型のバッテリーパックがついていた。彼は、スラスターをふかして逆噴射すると、あつと言う間に、ポッドの速度に合わせて並行に飛行を始めた。そして、後方にいるユリ17に近付くと、持っていた酸素ボンベの交換を行った。

そのブライアンから、通信が入ってきた。

「こちらブライアン。君たちの位置は把握した。これから最寄りの輸送船に移動して、君たちを迎えにこさせる。もう少し、待っていてくれ」

「な、なんで、あなたが来てくれたんですか？」

「君たちのリングが隕石群の被害を受けたと報告があった。君たち二人が、脱出ポッドで脱出したが、位置が掴めないよね。タイジが酷く心配して、迎えに行くように懇願するので探しに来た。因みに、同型のアンドロイドは何体もある。一番近くの月面の個体を起動させたから、何とか間に合ったというところだ」

そう言い残すと、ブライアンは脱出ポッドを離れていった。助けを呼んでくれるのだろう。

アオは、この奇跡をまだ信じられずにいた。先ほど呪った神に、再び感謝しなければならぬだろう。

「アオ」

「ユリ?」

「何だか、さつきお別れを言ったつもりだったんだけど……助かったみたいね。何だか、バツが悪いけど……」

「はい。もう、大丈夫だと思います」

そこで、少し彼女は黙り込んだ。

「さつきの話……。せつかくだから、あなたと私で、お父さんとお母さんをやるのは、どう? あなたが嫌でなければ……」

アオは、ユリー7が、母性と呼ばれるものに目覚めたことを知った。体を機械に交換した彼女は、そのような感情から、遠ざかっているはずだった。これも、神が与えた奇跡なのだろうか。

アオは、優しい笑顔を浮かべて言った。

「ええ。ぜひ、そうさせて下さい」

「本当にいいの? こんな身体の私でも……」

「そんなの、関係ありません。だから、これからも、ずっと一緒に居て下さい……」

小さな点でしかないその物体は、宇宙をまだ漂っていた。

そこでは、人類が長い間失っていた新たな希望が芽生えていた。この後、この二人が自ら子を育てて行くことが、人類の未来に大きな影響を与えて行くことになる。

しかし、それはまた、別の話――。

遙か彼方の永劫を越えて13 旅は続く

月面都市――。

タイジは、政府が用意した、ダイソンリング解体プロジェクトの対策本部にいた。ユリ17が心配で、居ても立ってもいられず、部屋の中をうろついていた。

「少しは落ち着き給え」

対策本部には、大勢の政府のスタッフとともに、ブライアンの姿もあった。アオたちを救助に向かったのとは、別の個体が起動してタイジの元に居たのである。

「輸送船に乗った、別の私の個体が、無事救助したのを確認している。そんなに心配する必要はない」

「AIのあんたには、わからんだろうな。親の気持ちって奴が」

「気持ちまでは理解できんが、データはあるので、推測は出来る」

「お前さんが再起動した暁には、人間の感情について、理解出来るように、改良した方がいい」

二人がそんなやり取りをしていると、宇宙港に、二人を救助した輸送船が到着したと連絡があった。

宇宙港へ向かおうとするタイジを、ブライアンは肩を掴んで引き留めた。

「慌てるな。ここに立ち寄るように言っている。待っていれば、向こうからやって来る」

「しかしだな」

「いい加減にしておけ。私が停止するまで、もうあまり時間が残っていない。今後のことを君とも話さなければならんだ」

タイジは、諦めてブライアンに従った。

「今後のことは、地球の人間の政府代表に任せてある。この時代のことは、彼と話せばわかるだろう」

「なら、何を話そうって言うんだ？」

「君は、また、旅に出るつもりだろうか？」

タイジは、ブライアンの言う事に、啞然とした。

「AIは、そんなことまでわかるのかい？」

ブライアンは頷いた。

「君は、遠い過去から、この時代を目指してやって来た。そして、今、この時代の君の役割は終わったと言っているだろう。恐らく君は、恒星間宇宙船が完成する可能性のある時代に行きたいと考えている。違うかね？」

タイジは、困惑して言った。

「確かに、当たっているが、君はやはり人間の感情を学ぶべきだ」

ブライアンは、驚いたような表情をしていた。

「簡単だよ。身寄りが無い俺は、ここに留まる理由が無かった。だが、身寄りがいるのを知ってしまったんだ。少なくとも、彼女が幸せになるのを見届けたいと思うのは、人間にはありがちな感情だ」

ブライアンは、納得したらしい。腕組みをして頷いた。そんな仕事を見ると、本物の人間ではないかと勘違いをしてみたいそうだ。

「なるほどな。だが、気が変わるかも知れん。人間とは、そうやって何か理由があれば、簡単に気が変わるものだ。私は、三百年後には再起動出来ると予測している。また向こうで相談に乗ってもらえると有り難いのだがな」

三百年後。その頃は、再びダイソンリングを宇宙に戻す計画だ。タイジは、にやりと笑って頷いた。

「わかった。彼女の行く末を見守った後で、気が変わったらな。向こうで会おう」

「だがな、私は、君の気が変わると確信している」

「ほう？」

ブライアンが何か言おうとした所で、アオとユリ17の到着の報があった。

「また、後で話そう」

タイジは、迎えに行こうと、急ぎ足で対策本部の部屋を出て行った。「仕方がない」

ブライアンは、彼が部屋を出ていくのを見守った。ダイソンリングの分解状況から言って、もうあと僅かしか時間が無いんだがな、とブ

ライアンの頭脳の片隅で思考していた。

アオとユリ17は、対策本部のある建物の階下で待っていた。

タイジは、満面の笑みで、大股で二人に近付いていった。

「二人とも、無事で良かった!」

タイジは、ユリ17を抱きしめようと思っていたが、彼女の手を、アオが繋いでいるのを見て思い留まった。

「ん? 君たち、いつからそうなったんだ?」

タイジの一言に、アオは顔を赤らめていた。

「救助された時に……です」

ユリ17は、にこにこことタイジに笑顔を向けている。

タイジは、アオの姿をつま先から、頭のとっぺんまで見渡して、ため息をついた。

「父親の気持ちつてのを、今になって知るとはなあ……」

タイジは、二人の肩を叩いて言った。

「幸せにな」

タイジは、先程ライアンと会話したことが、こうもあつさりと達成された事につかりしていた。

ならば、もう、ここに留まる理由は無いな……。

タイジが、そんなことを考えていると、突然、後ろから背中を叩かれた。タイジが振り返ると、そこには、もう一人のユリ17が立っていた。

「まさか、娘に手を出そうなんて、考えて無かったでしょうね? 随分、がつかりしているようだけど」

タイジは、困惑していた。随分と馴れ馴れしいが、ユリ17の所謂姉妹の一人だろうか、と考えていた。

その彼女は、つかつかと前に進み出て、ユリ17に握手を求めて手を差し出した。

「はじめまして。あなたの卵子を提供した、アユーシ優里です。よろしくね」

タイジは、その言葉を聞いて、頭が真っ白になった。アオと、ユリ17も、啞然とした表情をしている。

「アユーシ……う？」

そのアユーシは、腰に両手を添えて、大きくため息をついた。

「全く、あなたを追いかけるの、大変だったのよ？」

タイジは、まさか、と思うので精一杯だった。ユリ17は、彼女におずおずと言った。

「ま、まさか……お母さんなの？」

アユーシは、大きく頷いた。

「ブライアンから聞いた。顔もそっくりだし、間違い無いんじゃない？」

タイジは、ようやく言葉が口から出た。

「本当に、君なのか？」

アユーシは、不満そうに目を細めた。

「本当に大変だったんだから。私、製薬会社に転職したじゃない？」

向こうで、医療用の人工冬眠装置の開発をすることになってね。ISAには悪いと思ったけど、ノウハウは全部持ってたから、似たような機能のものを、作らせてもらったの。で、被験者第一号で、自分が入ったって訳。一年ぐらい入ってたんだけど、あなたが言ってた変な夢、私も見ちゃったのよね。あなたが言ってた事が、嘘じゃないってわかった。そしたら、居ても立ってもいられなくて、あなたを追うことにしたの」

あっけらかんと話す彼女の様子を見て、タイジ自身も呆気に取られていた。彼女の話は、更に続いた。

「その後、ISAに行つて、あなたが百年後に起きるように設定したのを確認して、私も同じ時間、装置に入ることにした。医療用だったから、さすがに千年も一度には無理だったから、百年おきに起きて、あなたが次にいつ起きるか確認した。HSPを月に移動した時は、行方がわからなくなつて、かなり焦つたかな。まあ、つてを辿つてどうにか突き止めてからは簡単だったけどね」

アユーシは、意地の悪そうな顔でタイジを見つめた。

「ここに辿り着く時は、同じ病院で、あなたより先に起きたの。ブライアンに会つて、先に話して、あなたの到着を待ってた。彼には、私が

いることを黙っててもらった。驚かそうと思ってね」

タイジは、ブライアンがさつきすぐに気が変わるとか言っていたのは、このことだったのだな、と理解した。

「で、感想は？」

「こんなことをして、どうするつもりなんだ！ もう、戻れないんだぞ！」

タイジは、気が動転しすぎて、何を言っているか、自分でもわからなくなっていた。

「それ、そっくりそのまま、あなたに返してあげる」

アユーシは、穏やかな笑顔を浮かべて彼を見つめた。

タイジは、突然、彼女を強く抱きしめた。

「何て、馬鹿なことを」

「あなたに、言われたくない」

二人は、そのまま、互いに抱きしめ合った。時を超えた再会の奇跡を、二人は噛み締めていた。

「タイジ。愛してる」

アユーシは、タイジの耳元で囁いた。

「アユーシ、会えて嬉しい。俺も、君を愛してる」

それを見ていたアオとユリ１７は、居たたまれない様子だった。

「タイジ。私たちの娘に、ちゃんとお別れしようか？」

アユーシの言う事に、タイジははっとした。

「俺と一緒に、また旅に出てくれるのかい？」

「当たり前でしょ。もう、引き返せないんだから」

二人は、ようやくユリ１７とアオの方を向いた。アユーシが、最初に彼女に話しかけた。

「その人を選んだのね。どうか、幸せになってね」

そう言ったアユーシは、ユリ１７を抱きしめた。

ユリ１７は、母親にまで会えるなど、思いもしなかった。涙を溢れさせた彼女は、母親に向かって言った。

「お母さん……」

「ユリ……」

アオは、抱き合う二人を、涙を浮かべて見つめていた。子を作り、父と母になる。それがどういう意味を持つのか。これからユリ17と一緒に、長い時間をかけて知って行くことになるのだろうか。

アオとユリ17が去ってから、二人は、ダイソンリング解体プロジェクトの対策本部へ戻って行った。しかし、その時既に、ブライアンは動かなくなっていた。ダイソンリングのエネルギー供給が切れてしまったのだろう。

二人は、動かなくなったブライアンの身体を抱いて、一頻り、感謝を伝えた。

「アユーシ、次は三百年後だ。ブライアンに約束したから」

「いいわ。じゃあ、この時代とも、お別れね」

タイジは頷いた。

「ここでやるべきことは、全て終わった」

「また、あなたが変な夢を見なきゃいいけど」

タイジは、その可能性を考えていなかった。だが、そろそろ、別の者が、このバトンを受け取るべきだろう。

二人は、対策本部を後にして、病院に置いてある、それぞれの人工冬眠装置へと向かって歩き始めた。

遙か彼方の永劫を超えて14 エピローグ（最終回）

帰還

ユミとダニエルは、ようやく未来の時の流れが変化したのを確認した。

「その後、どうなった？」

「あれじゃないか」

ユミとダニエルは、更に三百年後の未来で、タイジとアユーシが、ブライアンとともに、次の計画を話すのを見た。かと思えば、アオとユリ17の影響で起きた変化。自然分娩のよる子の誕生が再び始まったのだ。

そして、様々な人々が、時代の変革に翻弄される様子を見た。ほんの一瞬でこれらのことが手に取るように理解出来る。

それらの時の流れを確認すると、ユミは、一気に更に遠い未来へ跳躍しようとしていた。

「おい、ユミ！」

ダニエルの呼びかけを無視した彼女は、無鉄砲に先へ先へと飛び去って行った。

時空間を縦横無尽に行き来する中で、ユミは更に遠い未来で、銀河に進出した人類が、その銀河自身の崩壊に直面する様子を見た。人類は、再びそのような絶望的な危機に立ち向かい、そして、力尽きて行く未来が見えた。

かと思えば、遠い過去の遠い星で、銀河や、この宇宙の未来を知った異星人の姿を垣間見た。彼らは、この宇宙の膨大な時空を知る術を持ち、高度な文明を築いていた。その技術こそ、今ユミたちが経験しているものの正体だった。

ユミは、同じ時空に存在する、彼らの意識に触れ、その絶望感、悲壮感に意識を侵食された。

「やめろ！ あたしに勝手に入って来るな！」

ユミの意識は、彼らと次第に一体化し、彼女という存在自体が、何

の意味も持たなくなつて行つた。元々ユミだったその存在は、この宇宙に絶望し、救済を求めていた。

我々は、何の為にこの宇宙に存在しているのか。

いつしか、宇宙が滅びる運命なのであれば、困難に立ち向かい、努力を積み重ねて行くことに、何の意味があるのか。

誰か――。

ここに生きる意味を永遠に喪う前に、この宇宙に救済を――。

それは、存在自体への渴望だった。

数万年、そして数億年の膨大な時の流れに身を任せることによつて、時空間は俯瞰可能な主観的な概念と化し、いつしか高次の存在をも感知し始めていた。

それこそが、我々が神とも呼ぶ、何者かの存在だったのかも知れない。

そして、突然前触れも無く、ある惑星が誕生した。その時空間には、過去にも未来にも存在しなかつたはずだが、高次の存在が、何か目的を持つて生み出したのだろうか。

異星人たちは、現実の世界で船を建造し、その惑星の衛星に拠点を築いた。そして、それが意味することを近くで観察した。

そして分かつたことは、彼らに、僅かに干渉するだけで、時空間が増殖するということだった。増殖した時空間は、可能性世界の拡大を意味する。もしかしたら、この宇宙を救う触媒としての可能性があるのかも知れない。

そして、ある可能性に賭けた。

ほんの僅かな干渉をするのだ。

一言、魔法の言葉を囁いた。

だから、お願いだ。

この宇宙を救つて欲しい――。

この言葉による干渉は、形を変え、時の流れの中で変化して受け継がれ、彼らの触媒としての存在を活性化させた。

いつしか、彼ら自身が、自らに干渉し、自身で変化を続けるのを確認した。時空間は、その瞬間から爆発的に拡大し、可能性世界が無限

に増殖した。

それでも、宇宙は救われていなかった。しかし、いつかは、その増殖の中から、新たな可能性が開かれるかも知れない。

やがて、ユミだった存在は、爆発的に広がる、可能性世界の時空を漂流し、最早、自らが存在した世界が何処だったのか、思い出せなくなっていた。

その何処かで、何か大切なものがあつた気がするが、それは何だっただろうか。ユミだった存在は、意識の片隅で、その記憶を探した。

あれは、何だっただろう――。

「……！」

何かが、その意識の片隅で知覚される。

何だろう。

これは、気持ちのいい眠りを妨げられる時に似ている。

気持ちのいい眠り？

そう言えば、遠い昔、住む所も無く、辛い日々を誰かが、救ってくれた。そして、与えられた部屋のベッドで、心の底からくつろいで、安心感に包まれて眠りについたので、懐かしく思い出した。

その幸せで温かい感覚。

そうだ。誰かにとても感謝してたのに。

あれって、何だったかなあ。

「……ユミー！」

ユミは、眠りから目覚めるように、突然意識が自分自身に戻っていた。その意識を包んでくれたのは、紛れも無い、温かい部屋とベッドを与えてくれた、ダニエルその人だった。

「ユミー！ お願いだ、戻ってくれ！」

ユミは、意識をダニエルに向けた。そうすると、本当にすぐ近くに彼の意識が存在していた。

「随分遠くまで来ちゃったよ。ダニエル、あんた、帰り道知ってる？」

ダニエルの意識が、大きな安堵に包まれていく。

「ああ。探したぞ。いつもいつも、迷惑ばかりかけて……」

彼の意識が、その温もりが、ユミは懐かしかった。きっと、そこが

一番居心地がいい場所に違いない。

「帰ろう。俺たちの居場所へ」

大きく頷いたユミは、彼の意識に寄り添い、もと来た道を辿って行った。

エピローグ

とある病院で、子供が誕生した。

父親と母親は、その子の誕生を祝った。

よくある風景だった。

病院を退院した母親は、子を抱いて自宅に戻った。

自宅では、祖父母がやって来て、いろいろと手伝いをしてくれた。

育児に関わるいくつかのやり取りをし、赤子をベッドに寝かせる
と、お祝いの準備をした。

楽しい話に花を咲かせた一家は、幸せに包まれていた。

祖父母は、帰り際に、もう一度子を抱きたいと言うので、母親は、赤子を抱き上げて、祖母の腕の中に渡した。

赤子をはすやすやと眠っており、祖母は大切にその子を抱えて優しい笑顔をしていた。

泰司と命名されたその子は、元気な男の子だった。

優子は、その子を抱きながら、幸せにそうに、夫の裕介の方を見た。

裕介も、笑顔を返し、その子を見つめた。

「元気な子だ。いい子に育つといいな」

優子は、少し考えてから言った。

「そうね。どんな子になるのかな？ 楽しみだね」

そうして、二人は、その子の成長を願い、彼のこれからの未来に願いを込めた。

遙か彼方の永劫を超えて

完――。